
星影月華の創造術

如月 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星影月華の創造術

【Nコード】

N7092V

【作者名】

如月 蒼

【あらすじ】

「君八最高傑作デアリ最高欠作。限りなく歪デ異端ノ存在。ダカラ、君二今ノ世界ヲ壊シテ欲シイ」朝が来なくなった世界。神の贈り物とされる力が、無限の夜を刻む世界を支えていた。神の贈り物 『創造術^{クリエイト}』。そして、創造術を行使する人々を 『創造術師^{クリエイター}』と呼ぶ。そんな創造術師を育成する学院に、世界から忌み嫌われる存在の少年が編入して

正統派（なのか？）ファンタジーを目指します！ ルビ好き人間の書くファンタジー、良ければ読んでやって下さい。

この物語はフィクションです。固有名詞は作中だけのものです。
更新は日曜日の夜9時です。早かったり遅れたり更新出来なかつたりも多々あると思います。宜しくお願い致します。

10/02「第一章 創造祭編・第一部「編入生」 終結しました

」

第0話 出会いと別れの記憶（前書き）

突然ですが、『星影月華の創造術』は、『せいえいげつかのクリエイト』と読みます。本当は、ほしかげげつか、となる所ですが、無理矢理そう読ませました。

プロローグから少し残酷な描写がありますので、苦手な人はウターンする事をお勧めします。

全くの新人なので、至らない所が多々あると思いますが、宜しく願います。

掠れた、小さな声は、少年の前で両腕を広げて仁王立ちする女性のもの。

「レミ姉……？ 何言ってるの？」

少年に「レミ姉」と呼ばれた女性は、少年に背中を向けている。だから少年には見えなかった。

彼女が、少年の声を聞いて、柔らかく微笑んだのを。

「……早く、逃げて」

先程の声とは違い、はっきりした女性の声。

それを聞いて、少年はやっと、目の前の光景を理解する事が出来た。

目頭が熱くなり、視界がぼやけた。止めどなく溢れる涙を拭う余裕など、少年にあるはずが無かった。

「……泣い、てるの？ こら、駄目だぞ……男の子は、あんまり泣いちゃいけない……」

女性の言葉がふいに途切れる。

「……レミ姉？」

「……私、は……」

「え……？」

女性が、肩越しに後ろを振り向く。ふわ、と長い銀髪が揺れた。

彼女は表情を変えてはおらず、美しい微笑みが少年を捉えた。

今の女性の姿は、さぞかし絵になった事だろう。

彼女の左胸が、淡く発光する、化け物の触手に貫かれていなければ。

「私は……守れた、かな？ 大切な、人を……」

女性は眩しいものでも見るように目を細めて口元に笑みを刻みながら、少年を見詰めている。

しかし。

ぐじゃっ、という生々しい音と共に、女性の胸を貫いていた触手が引き抜かれた。

糸の切れた人形のように倒れる女性。

「あ……あ、ああ……」 少年の口から抑えきれない声が洩れる。
そして。

「あ、あ、あ……あ、ああああああああ……!!」
喉が焼き切れる程の音量で、少年は絶叫した。

それは、大切な人との別れの記憶。

第1話 創造術師の少年（前書き）

本編に入ります！……プロローグ、そんな長かった訳ではないですが。

後、この話の世界はずっと夜（時間的にはなく明るさ的に）だという事を念頭に置いて読んでいただ方が良いかもしれません。何か面倒臭いですね……申し訳ありません。

第1話 創造術師の少年

「第一章 創造祭編・第一部「編入生」 創始」

世界から朝というものが消えた。

世界から太陽というものが消えた。

その代わりに、人間は力を手に入れた。

《クリエイト創造術》という、神様からの贈り物を。

冬のある日。

駅のホームに、奇妙な二人組が降り立った。

体格からして、一人は男。体格からして、というのは、その男がコートのフードを目深に被っていて顔が見られないからだ。

もう一人は小柄な少女。こちらは顔を隠したりなどはしていない。緋色の髪と瞳を惜し気もなく晒した、可愛いと美しいの中間にいろよくな少女だ。顔立ちはまだあどけないものだが、雰囲気がか神秘的な様相を醸し出して、美しい、と言っても何ら遜色無いのである。

「やっと着いたな。ずっと揺られていたから腰が痛い」

男が腰を擦りながら呻くように言った。

「レゼル、年寄り臭いですよ」

レゼルと呼ばれた男は、緋色の髪の少女に指摘されて腰を擦るのを止めた。

表情は見えないが、レゼルは今眉をしかめているだろう事が少女には容易に分かった。

彼に嫌な思いをさせてしまったかもしれない、と思った少女は、慌てフオローした。ただ、慌てた表情は顔には出なかったが。

「でも、汽車に乗るなんてレゼルはかなり久し振りでしょう？ 腰が痛くなるのも仕方ないと思います。私に至っては今日が初めてですし、腰が痛くなるというのは嫌という程理解しました。今まではずっと飛空艇でしたし」

「え？ セレン、大丈夫か？」

「はい。レゼルが心配する程の事ではありません」

少女 セレンは、全く抑揚の無い声で言い、レゼルに頷いて見せた。

彼女は相変わらずの無表情だが、レゼルからしてみればそうでもない。今だって、一見何の感情も浮かべていない様に見えるが、よく見れば頬がほんの少しだけ引き吊っている。どうやら腰の痛みを我慢しているらしい。

だが、セレンが心配要らないと言うのだから、とレゼルはそこには触れない事にした。

「やっぱ、変な姿勢で寝てたのが悪かったのか？ ……最悪だ。大事な試験の日なのに」

レゼルの口調に少し苦々しさが混じった。

「サーシャさんに知られたら笑われますね」

「そうだな。……いや、笑われる前に『汽車で寝ただと？ 貴様、浮わつくにも程があるぞ！ 何時なんどきも気を抜くなと言っただろう！ 油断大敵！』とか言われて、ボッコボコにされそうだな」
「ボッコボコ、というよりザクザクじゃないですか？ それにしてもレゼル、口真似が上手ですね」

そんな事を誉められても全然嬉しく無いんだが、と思いながら、レゼルはやつと歩を進め始めた。

その後ろをセレンがちょこちょこ付いて来る。

足元は石畳。それなのに、冷えきった空気が充満する駅のホームに響く足音は一人分。

周りに人影は無い。立ち話をしていた間に他の客はホームから全員出ていった様だ。

足音は緋色の長髪を持つ少女のものだけ。

ちよつと背伸びしたくて買った様な大人なデザインのベージュ色のブーツが、カツン、カツン、と音を立てている。

対して、レゼルの方は足音など皆無だ。見る者が見れば、それだけで、彼がかなり武術に精通している事が分かるだろう。

「……でも、サーシャさんは心配してくれているんですね」

セレンは目の前の背中に声を掛けた。先程の話の続きだ。

だが、背中からは、世界一深いと言われるアリーナ海溝より遙かに深い溜め息が返ってきた。

「心配も行き過ぎればありがた迷惑だ。俺達が学院に入るのを、サーシャさんが反対したから、俺達は入学じゃなくて編入って形になっただけ」

今は冬。学院の入学式は春。

「かなり出遅れましたね。しかも、学院は後三週間もすれば冬休みに突入します」

「編入して一ヶ月も経たない内に休みかよ。これもそれも、あの切り裂き魔のせいだな」

ホームの出入口をくぐって外に出る。すると、ホームの中の静けさが嘘の様に街の喧騒が聞こえてきた。

あちこちに灯る街灯の光が、明るく空間を照らしている。この街では、終わる事も途切れる事も無い夜空に輝く星々の光が少し弱く見えた。

今は別に、時間帯が夜という訳ではない。今の世界に朝というも

のが無いだけだ。

昔は、太陽というものが世界に光をもたらしていたらしい。朝が無いのは、太陽が無くなったからだと言われている。

何時、太陽が無くなったのか、それは誰も知らない。ただ、そういうものが昔あった、というだけで、詳しい歴史は残っていないのだ。

可笑しな事だが、朝が無くなったというのに『朝御飯』などという言葉は現在も使われている。

駅前のロータリーには色々な露店が出ばってきている。売っている物は様々だが、全体的に温かい食べ物や飲み物を売る店が多い様だ。季節が変われば売る物の種類も変わるのだろう。

「それにしても寒いな。ディブレイク王国に来たって実感するよ」「今更ですか？ ……でも、寒い、というのは同感します」

沢山の人々が行き交うロータリーの光景を、心なしか興味深そうな表情で見渡すセレン。

そんな彼女を微笑ましそうに眺める。

「セレン、寒いなら俺のコートを……」

セレンの、ワンピースにマフラーだけ、という北の王国には相応しくない格好を危惧して自身の羽織るコートに手を掛けたレゼルだが、その手を目にも留まらぬ速さでセレンが掴んだ。

「駄目です、レゼル。ここはもう、飛空艇の中ではありません」

「……そう、だったな」

レゼルが手を降ろすと、セレンも掴んでいた手を放した。

「私なら大丈夫です。寒いと感じる事は出来ませんが、風邪を引く事は出来な……いえ、無いので」

少女の言葉に、レゼルは奥歯を噛み締めて、目深く被ったフードの奥から少女の緋い瞳^{あか}を覗き込んだ。

セレンから見える彼の瞳は、漆黑。何時もならその眼を見て安心するはずなのに、セレンはそれが出来なかった。

何故なら、彼の瞳が少なからず揺れているようだったから。

自分は風邪など引かないから大丈夫、そう伝えたかっただけなのに、またやってしまった。セレンはレゼルの漆黒の瞳から逃れる様に俯いた。

しかし、その直後、わしゃわしゃと頭を不器用な手つきで撫でられた。

思わず顔を上げれば、そこにはフードの奥に、レゼルの笑顔があった。

無邪気な、まだあどけなさの残る、男　　というより少年の笑顔。しかし、その笑顔にはどこか陰がある。

「お前が俺を気遣ってどうするんだ。悪いのは俺なんだぞ？」

「違います！　レゼルは悪くなんてありません」

セレンは、撫でられて些かくしゃくしゃになってしまった髪を揺らしながら、ぶんぶんと首を左右に振った。

その仕草が少し大袈裟な気がするが、レゼルに気持ちを伝えたいのならこれくらいするべきだ。

セレンは知っている。自分の感情が、決して表情に出ない事を。

「私は、レゼルに感謝しています」

その言葉も強めに言ったのに、多分レゼル以外の人が聞けば、淡々としている、と思うだろう。表情だって、相変わらずの無表情。

だけど。

「……ありがとな」

自分は、彼に気持ち伝わってくれば、それでいいのだ。

今度は本当の笑顔になったレゼルを見て、少女はそう思った。

だが、彼は唐突に焦ったような顔をした。

「……セレン。指定されてる時間って、何時だったけ？」

「えっと、学院の前で4時半です。試験官を務めてくれる人が放課後なら時間が取れるからって」

何時の間にか、二人の足は止まってしまっている。

周りの人々が、立ち止まったまま動かない男女を見て、迷惑そうに顔をしかめていた。

「……今、何時？」

「……」

「……いや、セレン。何時かって訊いてるんだけど。腕時計見てくれ」

セレンの左手首には、シンプルなデザインの腕時計がある。サーシャが無理矢理彼女に持たせたものだ。

レゼルも腕時計は持っているが、それは右手で無造作に引くトラंकの中突っ込んである。腕に何かを付けるのは嫌いだ。はつきり言つて邪魔なのである。

しかし、セレンは自分の腕時計に目を落とす事もないまま、変化の無い顔で空中を見詰めていた。

何かあるのか？ と彼女の視線を辿れば、

「……あ」

流石、ディブレイク王国の誇る第二の首都・リレイズの街。このロータリーからは当然とでもいう様に街の時計塔が見えた。

煉瓦造りの時計塔が示している時間は只今、

「四時二十五分……」

「後、五分……」

二人は眩きが終わらない内に歩みを再開し、露店などには目もくれずロータリーを抜け出した。

「うわ……」

思わず、レゼルの口から声が漏れた。

ロータリーを出て眼前に広がるのは、リレイズの街を半分に割るメインストリートかのような大通り。

左右には様々な店が軒を揃え、出店もある。売り子と客の声がこの街を活気付かせていた。

だが、レゼルが声を漏らしたのは大通りの様子に気分が浮わついたからではない。

大通りとその人垣を越えた所にある、白亜の城の様な建物。神殿や王宮と言つてもいいだろう。そんな、厳かな建物が、大通りを挟

んでレゼルの前に聳そびえている。

それを見て、声を漏らした。かと言えはそうなのだが、別に建物の雰囲気は圧倒されたとか感嘆したとかそんな事ではなく、レゼルはただ、

「遠過ぎだろ……」

「クリエイター 厳かな建物 クリエイター 創造術を行使する者、クリエイター 創造術師の為の教育機関、クリエイター リレイズ創造術師育成学院、略称・クリエイター 創造学院までの距離がかなりある事に対して、うんざりとした為、声を漏らしたのだった。

後、五分も無いのに。

レゼルは右手でフードを押さえ、左手でセレンとはぐれないように手を繋ぎ、人混みの中へ駆け出した。

《クリエイター 創造術》。

それは、神様からの贈り物だとされている。

それは、物を創造する力。

星の光を、使って。

「十五秒遅刻だぞ、編入生」

創造学院の門の前。

パンツスーツを着こなした美女が、水色の眼鏡を人差し指でクイツと押し上げながら言った。

長身で、ルックスもさることながら、プロポーションも完璧な女性だ。スーツは少しキツめなのか（特にバスト）、身体の線が浮き出でしまっている。当人はあまり気にしていなさそうだが。

低い位置で一つに纏めた明るい色の髪は、上へ上げて大きなピンで留め、滑らかなうなじを晒している。

「……す、すいません」

正直、十五秒の遅刻くらい見逃してくれよ、と思っただが、編入試験の前から波風を立てるのは嫌だったので素直に謝っておいた。

こっちは全速力で大通りを突破して来たのだ。息が乱れている、という事は無いが、疲れているのは確かなので面倒事は避けたかった。

しかし、女性は意外そうな顔をして、

「……そこで謝るのか、お前は。殊勝な事だな」

……何だ、それは。

「つと、自己紹介がまだだったな。私はルイサ・エネデイス。試験官を務める者だ」

「あ、俺が、編入試験を受けに来たレゼル・ソレイユです。宜しく願います」

軽く頭を下げる。

そうしながら、ルイサ・エネデイスという名が何処かで聞き覚えがある気がして記憶を探ったが、結局分からないまま頭を上げた。

「……ソレイユ、か。編入試験希望の資料を送ってくれた時から気になっていたが、君は、あの《白銀の創造術師》シルバリー・クリエーターの身内か何かかね？」

「はい。俺は、《白銀の創造術師》レミル・ソレイユの弟です」

レゼルの答えは、即答だった。

「弟……？ レミル・ソレイユには弟がいたのか……」

眼鏡の奥で目を見張らせるルイサ。

しかし、それは普通の反応だろう。レゼルの存在を知っている者はほんの一部の人だけだ。

レミル・ソレイユ。

レゼルの姉にして、《白銀の創造術師》と呼ばれる最強の創造術師。

この世界で彼女を知らない者の数は二割を切るだろう。

だが、レミルは、ある事情から弟のレゼルの存在を隠してい

た。頑なに。

「まあ、《白銀》の話は後でゆっくりとしようか。まだ、君が嘘をついていないとは限らないし」

「嘘なんてついてない。……信じられない、という気持ちは分かりませんが、嘘なんてついたって何のメリットも無いでしょう」

「それでも無いと思うが……まあ、すぐバレるのがオチだろうな」

ルイサは何かを納得した様に一つ頷くと、視線を下へずらした。

「……？」

「……で、君と手を繋いでいる彼女は誰かね？ 恋人か？」

レゼルはルイサの視線を追って、セレンと手を繋いだままだった事に気が付いた。

あ、と声を上げて、スツと手を放す。それは自然な動作だった。

「ごめん、セレン。……えっと、エネデイス……試験官？」

「先生、で良い。私は学院の教師だからな」

「じゃあ、エネデイス先生。俺と彼女　セレンは、そういう関係ではありません」

レゼルが苦も無くルイサの勘繰りを否定する横で、セレンは自分の右手　レゼルと繋いでいた手　を見詰めながら、何処か不機嫌な雰囲気を醸し出していた。

幸い（？）、レゼルは気付かなかったが。ルイサに至っては、感情の発露が希薄なセレンの今の様子になど、気付けるはずがなかった。

「では、彼女も編入希望者か？　いや、編入希望届はレゼル君のものしか届いていないが？」

「セレンはまだ十四歳ですよ。学院には入れません」
学院に入学出来るのは十五歳からだ。

レゼルの後ろで、相変わらず既成事実を何気無く刷り込むのが上手ですね、などという言葉がボソツと呟かれたが、レゼルは無視した。

「実は、訳あって俺とセレンは離れる事が出来ません。そこでお願い

いがあるのですが……」

「……聞こう」

「セレンを、学院で働かせてくれませんか？」

ルイサは目を丸くした。こんな事を言われるとは露程も思わなかったのだから。まあ、当たり前だが。

「働かせるって……十四歳の少女をか？」

「教師とか、そういう仕事ではありません。何と言うか……補佐、みたいな感じで」

「補佐？」

「はい。ほら、学院の教師って研究者気質の人が多いらしいじゃないですか。だから、掃除とかしてくれる人が居たら良くないですか？　ちなみに、セレンは家事全般得意ですよ」

ビギン、と音がしそうな程の勢いでルイサの顔が固まった。

それから彼女はレゼルの耳元に口を寄せ（フード越したが）、急に小声になって囁いた。

「それは本当か？　家事全般得意、というのは」

「はい、本当ですよ」

ニッコリ、とレゼルが笑う。その表情はフードに隠れてルイサとセレンには見えなかったが、何とも爽やかな笑顔だった。

「……二つ、質問して良いか？」

「どうぞ」

「その少女　セレンを学院に置く許可を取るだけで、彼女は私の補佐役になってくれるのか？」

「もちろん」

私の、という所に違和感というか疑問を覚えたが、交渉の流れを絶ち切りたくなくて、レゼルは頷いた。

「……君と彼女が離れられない訳、とは？」

「それは……」

近くにいたセレンにはルイサの囁きが容易に聞こえていたのだから。レゼルが言葉に詰まったのを見て、今まで閉じていた口を開い

た。

「私が、レゼルの傍に居たいんです」

ハッキリとした声音。

ルイサは緋色の髪の少女を見、レゼルに顔を向け直して、

「……そういう関係では無い、のでは無かったか？」

「あ、あはは……」

返ってくるのは乾いた少年の笑い声。

それで大体二人の関係　　というか、セレンの気持ち　　を理解

したルイサは、はぁ、と短い溜め息を吐いた。

「……仕方が無いな。セレン、君を私の専属補佐に雇おう。もちろん、レゼル君が編入試験に合格したら、だが」

表面上は、そういう事なら仕方がないな、という風を装っていたが、眼鏡の奥の瞳が輝いているのをレゼルは目敏く発見した。

セレンに雑用を押し付けられるかもしれない（補佐役とは突き詰めれば雑用係と同じだ）、と思うとぞつとするが、彼女と離れない為にはこうするしかないのは事実だった。

ルイサはセレンの小さな肩に両手を置き、

「宜しくな、セレン」

真つ直ぐに緋い瞳を見詰めながら、強い口調で言った。

「よ、宜しく願います」

表情には全く変化が無かったが、セレンが引いているのが分かった。

しかも、セレンの声を聞いて、抑えきれない、という様に口元を緩ませるルイサ。

レゼルは怖くなって、セレンとルイサを引き剥がした。

「何してんだアンタは！」

最早教師に対する敬意は無い。

「あ、ああ……すまん。こう、可愛いものを見るとデレてしまうのだ」

「意外な少女趣味というギャップを狙っているのか、それともただ

の百合なのか、どっちだ！ それとセレンは物じゃない！」

「心配するな。ちゃんと人間だと認識しているよ」

「そこだけ！？ 否定するのはそこだけなのかオイ！？」

「む？ 他に否定する箇所などあったか？」

「あつただろ！ お前今百合疑惑を掛けられてんだぞ！」

「ああ……それか。安心しろ、私は百合ではない」

「今更言われても全く安心出来ないんですけど！」

「こんなにツツコんだのは久し振り　でも無いか。だが、疲れた。

レゼルは気を取り直して息を整え、やっとの事で本題に入

「それよりも、早く編入試験を受けたいのですが……」

「なあ、レゼル君。ちょっと思っただが、セレンはレミル・ソレ

イユに似ているな？」

ろう、として、ルイサに横槍を入れられた。

ただ、レゼルはそれに怒る事も苛立つ事も出来ず、頭の何処か冷静な部分が「そうだろうな」と思った。

セレンとレミルは似ていてもおかしくはない、どころか、似ていなければおかしい。だってセレンは

レゼルが意図せず思考に耽りかけた時、腕を引かれる感触を覚えた。

背後を見れば、セレンが袖を掴んで引っ張っている。

「……レゼル。ずっと外に居ては、風邪を引いてしまいます」

それは、レゼルが風邪を引いてしまう、という意味の言葉だったが、ルイサは、セレンが風邪を引いてしまう、と誤解した様だ。

「それもそうだな。セレンはかなり寒そうな格好をしているし、早く学院の中に入って試験を始めよう」

だが、その誤解が良い流れを招いたので、敢えて誤解を解く事はしなかった。

ルイサは学院の砦の様な大きな門を押し開きながら、こちらに背を向けながら言った。

「……君は、自分の顔にコンプレックスでもあるのかい？」

「…………え？」

「どれだけ顔が悪いからといって、フードで隠して一度も見せないというのは、失礼だろう」

「…………これは…………」

ちら、とルイサが肩越しにレゼルを一瞥する。

その視線をフードの下の瞳で受けとめたレゼルは、キツパリと覚悟を決めていた。

「…………リレイズ創造術師育成学院は」

「ん？」

急に低くなつたレゼルの声にルイサが体ごと振り返る。

レゼルは、創造学院の門の下で佇んでいた。顔を上げ、ルイサの目から視線を逸らさず。

ルイサからはフードによる陰のせいでレゼルの顔は見えなかったが、彼のその佇まいに何か引き込まれるものを感じて、ルイサも彼と見詰め合う形になる。

「創造学院は、十五歳か十六歳なら誰でも入学・編入試験を受ける権利があるんだよな？」

敬語が消えた口調とその雰囲気は訝しそうな顔をするルイサ。

「ああ、そうだが…………それが、どうした？」

「なら、良いんだ。その言葉、忘れないでくれよ？」

レゼルは悪戯っぽい言い方をしながら、フードに手を掛ける。

ルイサの目が瞬きも忘れる程引き付けられた、その時。

「きゃああああっ！」

女性の悲鳴と、

「おい、引つたくりだ！ 捕まえる！」

男性の怒号が大通りから続けて響いた。

「…………！」

素早く反応し振り返つたレゼルは、通常の間人には不可能なスピードで駆け出した。

「レゼル！」

「セレンはそこで待ってる！」

あつという間に、彼は大通りの人混みの中へ消えていく。

「まずい！ こんな人混みの中で荒っぽい事をすれば被害が出るぞ！
何を考えているんだ、アイツは！ セレン、行くぞ！」

「レゼルに任せておけば大丈夫ですよ」

「何呑気な事を言っているんだ！ 創造学院に入学もしていない子供
の創造術師に任せられるはず無いだろう！」

「……仕方ないですね」

ルイサとセレンもレゼルを追って大通りの人混みへと駆け出した。

レゼルは人混みを上手にすり抜けながら、引ったくり犯を追っていた。
いた。

ちらちらと見える後ろ姿は男のもの。人混みに逃走路を塞がれている
のか、上手く走る事が出来ていない。

段々、レゼルとの距離は縮まって来ている。それは相手が人混みに
足を取られている事もあるが、大きくはレゼルの使っている創造
術のお陰だ。

大方、引ったくり犯はバレない様に物をかつぱらいたかつたんだ
ろうが、それに失敗して悲鳴を上げられてしまったのだろう。な
ので人混みに紛れて逃走を謀る事も連鎖的に失敗してしまった訳だ。

まあ、レゼルからすれば、「ざまあ」としか言えないが。

レゼルは引ったくり犯の男を追いながら、素早く前後左右を確認
した。

今、何が起こっているのか理解しているのは当然だが犯人と被害
者の女性（多分悲鳴を上げた人）、それにレゼル、後は怒号を上げ
た男と彼の声に触発された正義感のある男が数人。

正義に生きる（？）男達は皆、レゼルの背後から犯人を追ってい
る。全員が全員、人混みに悪戦苦闘していた。

あれでは協力をしてもらうのは無理そうだ。逆に足手纏いになるだろう。そして別に、一人では引ったくり犯を捕まえられない、という事はない。

「さて、どうしようか……」

一度駆け抜けて来た道を、一度目とは比較にならない速さで逆走しながら考える。

もちろん、しっかりとフードを右手で押さえた格好で、だ。

考えたのは、一瞬。

次の瞬間には、あっさり引ったくり犯を追い抜いたレゼルが、彼に流れる様な足払いを掛けて転倒させ、いつの間にか左手に握っていた漆黒の拳銃を彼の額に向けていた。

よく見れば、その拳銃は空の色をしていた。昔はあつたという青い空の色ではなく、夜の空の色だ。限りなく漆黒に近い、しかしそれとは明らかに異なる、闇の色。

そんな暗い色をしているのに、レゼルの銃はその長い銃身が輝いている様に見えた。

「ひっ……！」

引ったくり犯が、銃身の闇色より深い色の銃口の奥を見て恐怖に歪んだ顔で声を上げた。

しかし、諦めが悪い性格なのか何なのか知らないが、悪足掻きとも言える行動に出た。

コートのポケットに隠し持っていたナイフを倒れたまま振り回してきたのだ。

銃を向けられているのに何とも無謀な、とレゼルは心の中で溜め息を吐いた。大人しくしてくれていれば拘束が楽だったのに。

だが、頭の片隅でレゼルは感心してもいた。パニックになった状態で自分の持っている武器を使える、というか思い出せるのは、荒っぽい事に多少は慣れているという事だ。まあ、今の場合は判断を間違った、としか言いようが無いが。

レゼルは右手をフードから放して、鋭く横に一線する。まるで、

剣を振るかの様なその動作の拍子に顔を隠していたフードが外れた。そして実際、右手には淡く輝く短刀が握られていて、それが引ったくり犯のナイフを真上に弾き飛ばした。

片刃の短刀は、完全に振り抜かれる前　ナイフを弾いた直後には刹那の内に消えていて、その刃が周囲の人触れる事は無かった。「奪った物は、返してもらおう」

レゼルが引ったくり犯のコートの膨らんだポケット　ナイフが入っていたのとは逆だ　を見て呟く様に、だが威圧的に言った時、「うわっ……!？」

重力に忠実に落下してきた自分のナイフを目の当たりにし、引ったくり犯はふっ、と気絶した。

もちろん、レゼルは周囲の人々や犯人の倒れている位置を考えてナイフを弾いたので、落下してきたそれが犯人の顔に埋まってスプラッタな事になるなんて事は起きず、計算通りに犯人の顔横五センチの所に落ちた。

「……上手く気絶してくれたな、コイツ」

キーン、と音を立てて石畳の道に小さく傷を作るナイフを一瞥もせず、レゼルは引ったくり犯のコートのポケットから、奪われたと思しき財布を取り出した。

もちろん、フードをしつかりと被り直しながら。

ルイサとセレンが、二人共器用な身体捌きでレゼルの元に辿り着いた時には、彼は引ったくり犯に拳銃を向けていた。

そしてその後の行動は、見事、としか言い様がないものだった。明らかに、こういう事に慣れてる者の行動。しかしその慣れている者は、たかが十五、十六歳の少年だ。

一般人には何が起こったか、全く分からなかっただろう。きっと何故ナイフが引ったくり犯の手から離れたのかも認識出来なかった

はずだ。

認識出来たのは、多分、学院の教師である創造術師のルイサと、その隣で無表情に少年を見詰める緋色の少女だけ。

「実戦で使えるレベルの創造術か……」

ルイサはやつと、セレンが「大丈夫」と言った意味を理解して、面白そうに呟いた。

そして、彼の素顔を見る事も出来た。

まだあどけなさがほんの少し残る、どちらかと言えば中性的な顔だが意志の強そうな瞳と、最強と名高かった彼の姉、レミル・ソレイユに似た世間的に見て整っていると見える顔が、フードの中に隠れていた。

そして、何より。《白銀の創造術師》と同じ、銀色の髪と、青い瞳。

あの顔なら隠さなくても良いだろうに、とルイサが思った時には彼はフードを被り直してしまっていた。

「銀髪碧眼……」

ルイサでもセレンでもない誰かが、啞然とした口調で呟いたのが聞こえた。声の高さから、多分女性。

ルイサは周りを見回したが、如何せん周囲は人、人、人。結局、呟いた女性は見つけれなかった。

レミル・ソレイユが銀髪碧眼だというのは誰もが 一般人も、

だ 知っている事。レゼルが創造術を使ったと分かる者ならば、彼とレミルを繋げてしまうのも自明の理。ただでさえ、銀髪碧眼はこの世界で珍しいのだから。

「……セレン」

「……？ 何ですか？」

無表情のまま、ちょこん、と首を傾げる少女に 思わず笑顔になつてしまいそうだったが、何とか抱き付きたいという自分の欲求を抑えたルイサは彼女に問い掛ける。

「確認の為訊いて置くが……レゼル君の使った銃とナイフは、創造

術で創造した物だよな？」

「はい、そうですね。拳銃が「闇夜」で、短刀が「霞刀」です」
創造術は、万物を創造する技術だ。

いや、万物、と言えば嘘になる。創造術で創造出来ない物の代表が、生命。植物の様な生命なら腕の立つ創造術師なら創造する事は可能だ。だが創られた植物が枯れるスピードは自然物と比べると遥かに早い。これが動物となってくると難易度は格段に跳ね上がり、成功した者は世界でも片手で数えられる程しかない。そして、人間を創造する事は、創造術師の禁忌である。

では、生命体以外ならばゼロから簡単に創造出来るのかと言えばそれは違う。

確かに、生命体創造より難易度は落ちるが、創る物の内部構造が複雑だったり精密だったりすると、植物創造より難しくなる事も多い。

そして、創造術はゼロから物を創っている訳ではない。殆どゼロに近いが、創造術は星の光と人間の身体を流れるエネルギーを消費する。

エネルギーとは、人間の身体を血管と平行する様にある脈を流れる、生きる力。生命力の源だ。だから、プラーナ、と呼ばれる事もあ

る。それを消費するのだから、創造術は使い過ぎれば術者を死に至らしめる事もある。これが、創造術がゼロから物を創るなどという万能でない事の所以だ。

創造術は、夜空から降り注ぐ星の光をエネルギーの流れる脈に取り込み、同調させ、星の光とエネルギーの融合体を外に引っ張り出す事で物を創造する。この過程を構築と言ふ。

そして、この構築の時、何を創造するのか明確にイメージする必要がある。イメージを強固にする為に創造術師は自分で創造したものに名前を付けるのが普通だ。「闇夜」と「霞刀」も、そのセオリーに則って付けられた名である。

イメージが上手か下手かで創造術師の能力が高いか低いかも決まってしまう事もある。これに至っては、経験と才能センスがものを言う。その点でレゼルは創造学院受験者の平均を、比べるのがおこがましいくらい上回っているだろう。いや、もしかしたら、今年の受験者のトップかもしれない。

武器を構築するスピードも、創ったものを消失バニッシュさせるスピードも半端ではない。(消失は霧散デイスパース、ロストとも言う。)

そして、創造術は物を創るだけに留まらない。

創造術は、反射神経・身体能力までも創造するのだ。

物を創るには星の光とエナジーの融合体を外に出すが、体中に取り込むのが反射神経・身体能力の創造だ。正確に言えば反射神経を上げたいなら神経系に、身体能力を上げたいなら筋肉に融合体を取り込む、といった具合だ。

そして創造術を行使する者を、創造術師クリエイター、と呼ぶ。

レゼルが通常の間人には不可能な速さで走っていたのも「能力」創造のお陰で、ついでに言えば彼は状況判断の為の視力や聴力も上げていた。彼が引ったくり犯に足払いを仕掛けて転倒させた時、犯人は誰にぶつかる事もなく、倒れたのだ。それはレゼルが人混みの少し開けた場所を狙って仕掛けたからである。

「凄いな、彼は。戦闘能力は学院の教師より上かもしれない」

ぼつり、と漏らした呟きに意外ながらセレンがこちらを見上げて話に乗ってきた。

「……それは、貴女よりもレゼルが上だと？」

「いや。私は彼より上だよ、セレン。君には悪いが《バイオレット・クリエイター 董すみれの創造術師》は子供の創造術師ごときに負けられないのね」

「董……ですか。朝があったと言われる昔に咲いていたという、花の名前ですね」

「おや、よく知っているね」

ルイサは愉快そうに笑った。そして実際彼女は愉しくて仕方がなかった。

今はもう見えないが、あの青い瞳。失われてしまった空の色。

対して、「闇夜」と名付けられた銃の夜空の色。今現在見上げればそこに在る、空の色。

レゼルが財布を被害者の女性に返して、やっと事態を理解した周囲の人々が歓声を上げる中、ルイサは唇の端が上がってしまつのを止められなかった。

第1話 創造術師の少年（後書き）

全体的にごちゃごちゃしている、と感じたかもしれません。ごめんなさい。

次話は少し短くなる……予定、です。

第2話 編入試験？（前書き）

ページバラバラ更新で誠に申し訳ありません。
今回は少し緩い感じになっています。

第2話 編入試験？

「筆記試験はどうでしたか？ レゼル」

「……まあ、数学と化学以外は」

階段状になっていて講堂の入口から入って来たセレンの問いに、レゼルは机に突っ伏しながら答えた。

「相変わらず理系は駄目なんです」

「淡々と言われた一言にグサツとくるものを感じたが、事実なので反論出来ない。」

今は創造学院の編入試験其の式、筆記試験が終わった所だ。

セレンが入って来るのと入れ替わりに、監視役として講堂にいたルイサは心底面倒臭そうにレゼルの答案用紙を持って出ていった。

「何でそんな面倒臭そうなんですか、と訊いたら、彼女曰く、「レゼル君は試験するだけ無駄だろう。学院は筆記ではなく実技を重視するからな」との事。引ったくり騒動を見ていた彼女からすれば、筆記試験の監視役なんて退屈で仕方なかっただろう。」

監視役、と言っても、この広い講堂ではレゼルしか試験を受けていない。入学試験になるとここで百人前後の人が一斉に受けるらしく、その為の不正行為防止監視役なのだが、レゼル一人だと「意味無くね？」と思ってしまうのも仕方ない。ルイサも甚だ本意そうだったが、試験の在り方は変えられない、とか何とか副院長様に言われたらしい。それを教えてくれたルイサの顔は、

「凄かったな……」

「としか、言えない。何か、副院長様に恨み妬み嫉みでもあるのだろうか。」

「何が凄かったんですか？」

「あ、いや、何でもない」

「キョトン、とした声音で訊ねてくるセレンにレゼルは首を横に振った。」

因みに、レゼルはコートのフードを屋内に入った今でも深く被っている。今は冬だからコートを着たままでもルイサには何も言われなかったし、もう少しこのままでも良いか、と思ったのである。

そして、試験中は考える事を後回しにしていた思考に手をつける。あの後、引ったくり騒動の後だに、引ったくり犯は騎士団（犯罪の防止・取締に務める組織だ）に預け、財布はちゃんと被害者に返した。

レゼルはその、被害者の女性に引つ掛かりを持っていた。

彼女は、レゼルの後ろにいた正義感ある男達より早くレゼルの元に来て財布を受け取った。そこに違和感を覚えたのが始まりだ。

彼女への違和感が疑念になったのは「ありがとうございます」という彼女の声を聞いた時。

レゼルはそのお礼の前にも同じ声を聞いていた。

引ったくり犯と対峙（とは言えないかもしれないが）していた時、彼は聴力を創造術クリエイトで一般人の三倍くらいに上げていたから、聞こえたのだ。

銀髪碧眼、と唾然として呟く声を。

確かに被害者の女性と同じ声だった。それは断言しても良い。

問題は、彼女がレゼルの銀髪碧眼を見ていた事そのものだ。彼のフードが外れたのは一般人からしてみれば一瞬の事に過ぎなかっただろう。しかし、彼女はそれを見ていた。

つまり、彼女はレゼルが引ったくり犯のナイフを弾いた時には既にレゼルに追い付いていたのだ。

そんなに身軽なら、引ったくりなんてされても悲鳴なんて上げないで自分で対処出来たんじゃないのか。いや、そもそも引ったくりなんてされないのではないか。

財布を渡した時に見た彼女の立ち姿・歩き方は少なからず武術を学んでいる者のものだった。

何故自分で対処しなかったのか。彼女なら簡単に引ったくり犯を取り押さえられただろうに。

「……何か、人様には言えない事情でもあったんだらうか」

そう思うと、割り込んでいってしまった事が少し申し訳ない。

因みに、彼は正義感などという立派な気持ちに突き動かされた訳ではなかった。今までこういう事を仕事にしていたから、癖の様なものだったのだ。引ったくり騒動を收拾する為に動いてしまったのは。

「……まあ、財布渡した時、嫌そうな顔はしていないっていうか、笑顔だったから良いか……」

ぼつり、と漏れた言葉にセレンが反応した。

「誰が笑顔で良かったのですか？」

彼女は相変わらずの無表情。しかし何故かいつもよりその無表情に柔らかさが無い気がした。

上手く言えないが、何だか急に講堂の空気が張り詰めた様に感じる。

「あ、いや……引ったくりの被害者の人だけど」

瞬間、セレンの深紅の瞳が冷えた。

俺、何か変な事言ったか？ と、レゼルは困惑した。

「そうですね。レゼルはああいう人がタイプなのですか」

「は？」

「引ったくりされる様なノロマメイドに懸想しているのですか」

「いや、何言ってるのか全く分かんね……って、メイド？ メイドってどついう事だ」

「おや、レゼル、そこに反応するのですね。流石は年頃の男子……」

「おい、今の前半の台詞、頼むから単体で使わないでくれよ」

「……はい？」

可愛らしく、きよとん、と小首を傾げるセレン。

「……いや、何でもない。純粹な心でいてくれたら、俺も嬉しいから」

「何か何処かにありそうな台詞ですね。……それにしても、レゼル、疲れていますか？」

「まあ、テストの後だしな……」

それからセレンに被害者の女性が気になる理由を話した。

彼女はいつも通り無表情ながら、少し意外そうな口振りで、

「……成程。メイドはノロマでは無かったのですね」

「そこはいいから。で、メイドって何だ」

「レゼル、分からなかったのですか？ 被害者が着ていた黒と白を基調としているドレスを地味にした様な服は使用人の服　つまり、メイド服ですよ」

「……そうなのか？」

「そうなんですよ。レゼルは本当にそういう事には興味無しですね」

「……そういう事ってどういう事だ」

「だから、メイド服とか猫耳とかバニーガールとか制服エプロンとか水着エプロンとか裸エプロンとか……」

「エプロン率高ッ！　ていうか誰だ、そんな事をお前に教えたのは！？」

「サーシャさんですが」

「あんの切り裂き魔がアアアアアッ！」

「レゼルが壊れました」

なんて事をやっていたら、いつの間にかルイサが講堂の入口に立っていた。

「……何を叫んでいるんだ、君は。物騒だぞ」

黙り込む二人。

暫く気まずい沈黙が講堂を包んだが、ルイサは興味無さそうにレゼルの元へ歩き始めた。

「……何故君は、講堂のど真ん中を陣取ったんだ？　先程から気になっっていたんだが」

ルイサが階段をゆっくりと上りながら訊いてくる。

彼女が言う様に、レゼルは講堂の下から七段目真ん中、つまりこの空間のど真ん中でテストを受けた。

理由としては、

「……まあ、気分の問題ですかね」

貴女が何処の席でもいいって言ったんじゃないですか、と付け加えるレゼルに、ルイサは呆れ顔を向けた。

「端に座るものじゃないのか？ 普通は」

「何かそれ、テスト上手くいかなさそうですね」

レゼルはあっさりとその話題を流した。

彼がど真ん中に座ったのには、気分の問題もなくてはなないが、大きくは壁との距離を取る為だ。もし壁を破壊して何者かが襲撃してきたとしても、ど真ん中なら最初の一撃が当たってしまう可能性は低くなるし、その後の対応もし易くなる。しかも四方向何処から攻めて来ても、だ。

警戒し過ぎだろう、と思うかもしれないが、これも癖だった。良くも悪くも、サーシャの「何時なんどきも気を抜くな」という教えは、レゼルの中に刻み込まれてしまっている。

汽車の中で寝てしまったのは、編入試験の為に前日遅くまで付け焼き刃、悪足掻きという名の勉強をしていたからだった。主に理系の。

もちろん、学院に入学すると決心した結構前から、試験勉強はちゃんとしていた。が、前日に不安になってしまるのが人間という生き物だ。そう思っているのはレゼルだけかもしれないが。

「そうそう、テストだが、結果が出た」

ルイサの発言にレゼルは首を傾げた。

「随分早くないですか？」

「仕事中の同僚を三人捕まえて無理矢理採点させたからな」

「うわぁ……」

「君も結果を待つのは嫌だろう？ 脳の情報処理能力を創造術で上げさせたからな、採点は三分も掛からなかったぞ」

「うわぁ……」

呆れてそれしか言えないレゼル。

脳の情報処理能力向上は、反射神経・身体能力向上のやり方と同

じ。星の光とエネルギーの融合体を脳に取り込めば良い。

だが、創造術による反射神経・身体能力・脳の情報処理能力向上は、簡単に人間の限界を突破してしまう。それでは人体に負荷が掛かり、最悪自滅する事になりかねない。

そこで、創造術師は、クリエイター根本を　つまり人体の強度を創造する、という創造術も、反射神経・身体能力・脳の情報処理能力向上の創造術と平行して行うのだ。

人体の強度の創造は、言葉にしてしまえば簡単だ。例えば、身体能力を向上させたいなら、融合体を筋肉だけでなくその周りにある皮膚、肉、骨などの細胞にも送り、細胞の強度を上げるのだ。脳の情報処理能力向上にしても、脳そのものと脳細胞の強度を上げてしまえば良い。

と言うと簡単に聞こえるが、誰でも出来る訳ではない。融合体を外に引つ張り出す『物』の創造より、融合体を内に取り込む『能力』の創造の方が難易度も危険度も桁違いなのだ。

それを、学院の教師という一流の創造術師だとしても、たかが一人の試験の採点に使うとは、何と言うか、それを強制された教師達に同情してしまう。

「権力がありなんですね」

誉め言葉なのか貶し言葉なのか分からない事を言ったのはセレンだ。

「紫の名は伊達じゃないという事さ」

「むらさき……？」

セレンが小さな声で呟いて頭の上にはなマークを浮かべた。

対して、レゼルは驚愕の表情を隠せなかった。

「紫って……」

「やっと気付いたか、レゼル君」

「バイオレット・クリエイター《董の創造術師》……？」

ルイサの二つ名を呟く少年に、彼女は意地の悪い笑みを浮かべた。
「そういう訳で、私は色々顔が利くんだ」

絶句するレゼルと愉しそうに笑うルイサの横で、置いてけぼりにされたセレンは表情には出さないながらも拗ねていた。

筆記試験の結果を告げられたレゼルは、微妙な顔をしていた。

微妙、とは、喜べば良いのか悲しめば良いのか分からない、という微妙だ。

「やっぱ理系は駄目か……」

前日の付け焼き刃と悪足掻きはもの見事に無駄に終わった。

「いや、何度見ても凄いな。この点数は」

ルイサが今眺めているのは、創造術の分野の答案用紙だ。

そちらはもの見事に全て九十五点超えを博している。特に創造術医学じゅついがくの分野は満点だ。

「君は戦闘派だと思ったんだが……」

「実技が出来る人は得てして理論も理解しているものですよ」

レゼルの指摘に、まあ、そうなんだが、とルイサは少し苦いものが混じった口調で呟いた。

「創造術科目は文句無しの結果だな。今年、いや、学院始まって以来のトップかもしれない」

ルイサは創造術化学そうちうじゅつかがく 創造術の観点から見た物質の性質と化学変化の法則性などを学ぶ教科 答案用紙を見て、次に一般科目である化学のそれを見た。

「……貴様、一般科目を嘗めているのか？」

「君、から、貴様、になりましたね。気持ちは分かりますが。……えっと、嘗めてませんよ。理系は苦手で」

「苦手というレベルか？ これは」

ルイサが眉を顰める。

それも当然だった。

創造術化学は九十八点という高得点、しかし普通の化学となると、

「……十二点」

嘗めている、としか思えない。

「理系以外の一般科目は全て九十点超えなのにな。しかも語学に至っては満点ときた。採点させた先生が嘆いていたぞ、論文を古代語で書くなって」

古代語。

この世界に朝があつた時代の言葉だ。

「ディブレイク王国の公語以外で一番得意なのは古代語なんですよ」「馬鹿を言つな。それこそ私達学院の教師を嘗めているぞ。この世界に古代語を理解出来る者が何人いると思つている？ ましてや何の資料も無しに古代語を書く奴なんぞ頭がおかしいとしか思えん」「何でこの状況で悪口を言われなきゃならんのだ、とレゼルは軽く苛立ちを覚えた。

「素直に嘗めるよ」

そして苛立ちはいつの間にか口に出ていた。

「……何だと？」

ルイサがレゼルをギロリと睨んだ時、

「……あの」

控え目に声が掛けられた。

セレンの声を聞いた事で二人共、頭に上つていた血が冷えていく。「もう結構遅い時間になっていますよ。早く実技試験に移った方がよろしいかと」

引つたくり騒動のせいで筆記試験が始まったのは午後五時。今は既に十一時を過ぎてている。

「……はい」

「……そうしよつか」

面倒臭いという理由から実技試験を明日に送る気の無い二人は、一も二も無く頷いた。

第2話 編入試験？（後書き）

ヒロインにあるまじき事を言わせてしまった気が……。

それは置いといて、次話は結構長めになります。筆記試験と実技試験で二つにしたかったです。すみません……。

という訳で、次は実技試験です！

第3話 編入試験？（前書き）

長くなってしまいました……。毎回ページバラバラですみません。

第3話 編入試験？

「実技試験ってどういう事するんですか？」

講堂の建物から出てレゼルの前を歩く女性教師の背中に彼はふとした疑問をぶつけてみた。

女性教師　ルイサ・エネデイスは振り返る事なくすらすと答えた。

「普通なら『物』の創造をしてもらおう。創造術クリエイトで創った物　創造物「コントラクシオン」の構築と消失の早さ、それに強度などを試験官が評価する」

今は、編入試験其の式・実技試験が行われるという実技棟に向かっている所だ。

筆記試験が行われた講堂と実技棟は渡り廊下で繋がっている。現在その渡り廊下にいるのだが、渡り廊下は中庭を縦に分断する様にあつて、レゼル、セレン、ルイサの三人は冷えきった空気の中を進んでいた。

「寒いな……」

ルイサの呟きは独り言だとは分かっていたが、レゼルは寒さを忘れたいが為に声を発した。

「時間的に一番冷える時ですしね」

レゼルの口から白い息が漏れる。

ルイサも彼と同じ気持ちだったのか、レゼルの話に乗ってきた。

「全く、引つたりなどがあつたお陰で予定が三十分もずれてしまった」

只今の時刻、午後十一時半少し前。後三十分もすれば日付が変わってしまう。

「今更だが、学院の休日に試験が出来なくてすまないな」

ルイサは歩き続けながら、振り返りもせず、だったが、声には謝罪の響きが確かに込められていた。

だから、レゼルは反射的に首を横に振った。

「いや。学院には滅多に編入生なんて来ないから、仕方ないですよ。試験が遅い時間になるのもある程度覚悟してましたし、俺が編入届送ったのも時期が悪かったし」

学院に編入生は滅多に来ない。まず、創造術を学ぼうとする少年少女は春に入学するからだ。

因みに、全ての創造学院で、一人の者に門戸を開くのは一度と決められている。入学試験で落ちてしまった者は、そこで諦めるしかないから、入学試験で失敗した者が編入するという事はない。

そして、創造学院が冬に最も忙しくなるのは有名、というか当たり前の話だった。

「冬は空気が澄んで、星がよく見える様になる。創造術が一番行使しやすい時期だ」

ルイサが夜空を見上げながら言った。

レゼルとセレンも釣られて顔を上に向ける。

渡り廊下の屋根は硝子製で、夜空に浮かぶ星々が透けて見える。屋根にはステンドグラスも嵌め込まれ、頭上の風景は学院の儼かな雰囲気にとびつたりだった。

「綺麗です」

セレンがうつとりとした声音で呟いた。無表情は変わらないが。

「……隠れてるな」

目を凝らして夜空を見上げていたレゼルの声はルイサに聞こえてしまったらしい。

彼女は首を回して不思議そうにこちらを見た。

「隠れてる？ 何が、隠れているんだ？」

「あ、いや……その、月が雲に隠れてるなって」

「月？ ……ああ、そうだな」

ほぼ真上に浮かぶ月は今、ちょうど厚い雲に覆われてしまっている。今夜（時間的に）は風が無いから、あの雲は明日まで月を包み続けるだろう。

「そつえば、さっき思ったんですが、実技試験って『能力』の創

造は評価しないんですか？」

レゼルの言葉は少々唐突だと感じたが、彼の言葉で言い忘れていた事を思い出したルイサは、すぐに彼の質問に答えた。

「馬鹿者。『能力』の創造は受験者には難しいし危険だ。学院に入る前から出来る者など毎年入って来る新入生二百五十人の内三十人程度だぞ」

「そうなんですか？」

「そうなんだ。『能力』の創造をあんな簡単にこなす君がその三十人の中に入っているというだけだ」

そうだったのか、とレゼルは心の中で驚いていた。

今まで彼の周りにいたのは、プロの中でも一流の創造術師^{クリエイター}達だけだったのだ。学生の創造術師、つまりアマチュアには会った事さえ無い。

「……だが、実技試験で君には『能力』の創造もしてもらおうと思っ
う」

「……は？」

ルイサの言った事が心の底から理解出来なくて、レゼルは足を止めた。

上を向いて歩いていたセレンがその背中にぶつかった。

「言ったはずだぞ？ 普通は『物』の創造をしてもらう、と。普通は、という事は、今回は普通では無いという事だ」

ルイサも歩を止め、振り向いてくる。眼鏡の奥の瞳は冗談を言っている時のものでは無い。

「……何で普通じゃないんですか？」

「もうこんな時間だろう？ 実力を見るなら戦闘が一番手っ取り早い。もちろん対人戦だ」

「対人戦って、相手はまさか」

「私ではない。そこまで酷な事はしないさ」

レゼルの発言を遮って言うと、ルイサは体の向きを元に戻して歩みを再開した。

レゼルとセレンもその後に行く。

「心配要らないさ。相手など、実技棟に行けば沢山いる」

「え？」

「行けば分かる」

ルイサはそれだけ言って黙ってしまった。

レゼルも無理に問うたりはせず、行けば分かると言っただからと、大人しく試験官に付いていった。

「日付が変わる前に終わらせてしまおう」

後ろで眠たそうにしているのを隠しきれていないセレンが気に掛かっていたレゼルは、ルイサの意見に同意した。

編入希望の少年が筆記試験を受けている頃に時間は遡る。

実技棟に、一人の女子生徒と一人の男子生徒が訪れた。

「あら、代表に副代表。遅くまでお疲れ様です」

実技棟に入るとすぐに広い空間が広がっている。ここは創造術の訓練場でもあるから、当たり前と言えば当たり前だった。

実技棟は模擬試合の闘技場も兼ねているので、それを観戦する為に長方形の空間の左右には観覧席が設けられている。訓練場もとい闘技場を見下ろす形になる、階段状の観覧席だ。

今来たばかりの女子生徒と男子生徒は、二人がここに来る前からここで創造術の訓練に励んでいた女子生徒に実技棟に入るなり声を掛けられた。

代表、と呼ばれたのは女子生徒の方。

その女子生徒はかなりの美少女だった。高い位置で纏めたポニテールは鮮やかな金髪。その活動的な雰囲気醸し出す髪型としてくりくる、峻烈で美しい翠の瞳。

すっかりしていそうな容姿は少し冷たさを感じたが、声を掛けてきた女子生徒に対し微笑んだ表情は、とても暖かなものだった。

「貴女も、お疲れ様。遅くまで頑張っているのね」

「そんな！ 私は自分の為だから……。私達の為に遅くまで頑張っている代表達とは、比べ物になりませんよ。創造祭そうちうさいの準備、お忙しいのでしょうか？」

「まあ、そこそこね。はつきり言つと、細かい所は先輩達がやってくれるから、一年は楽だわ」

「おいミーファ、お前が楽しんでる分は俺の所にくるんだからな」

ミーファ、と名前を呼ばれた女子生徒は、自分と一緒に実技棟を訪れた男子生徒を見た。

先程、元々ここにいた女子生徒から副代表と呼ばれたのはこの少年だ。

体格の良い男子生徒だった。明らかに格闘技の得意そうな容姿。

かといって露骨にゴツイ、という印象はそれほど無い。茶色に染めた長めの髪と片耳だけに付けた小さな金色のピアスは、軽い感じを思わせる。

だが何処か、人を安心させる様な、負の感情を包み込んで消してしまう様な雰囲気もある。

「え、そうだったの？ 知らなかったわ」

「絶対知ってただろ、お前！」

二人のやり取りに女子生徒がクスクスと笑う。

暫くしてミーファと男子生徒もそれに釣られて笑顔を溢し、和やかな空気が漂った。

「ノイエラ、訓練は上手くいつてる？」

ミーファにノイエラ、と呼ばれた女子生徒は曖昧な笑みを浮かべた。

「そこそこ、ですね。今日は少し暗いとはいえ、それは月が雲に隠れているからであつて、星は綺麗に見えているのに」

星の光を使う創造術は、気候・気象が大きく影響してくる。

星に雲が掛かっていればその光は地上 正確には創造術師

に、届き難くなる。創造物の構築や『能力』向上の際に重要になる

融合体は、星の光が少なくなつてエネルギーとの比率が乱れると外に引つ張り出し難くなつたり、筋肉や神経系に取り込み難くなつたりしてしまうのだ。

その行き着く先は、創造術の失敗。

エネルギーの脈が暴走し、エネルギーが外に駄々漏れになつてしまふ、という事もある。それは生命力が徐々に減つていくという事。流血と同等の「重症」なのである。

身体にダメージが返ってくる程のミスをしなくても、創造物が脆くなつたり能力が思った通りに上がらなかつたり、という事が起こる。

星の光が多くてエネルギーが少ない融合体も問題だが、エネルギーの制御は星の光の制御より格段にやり易いのでそういう融合体を作り出す創造術師は殆どいない。

制御しやすい理由は唯一つ、エネルギーは自分の身体を構成するものだからだ。誰だつて他人の腕を思い通りに動かすよりは自分の腕を思い通りに動かす方が明らかに簡単だろう。

だから、星のあまり見えない日は創造術は使い難い。

星が殆ど見えない というか、星の光が全く届かない真つ暗な空間でも簡単な創造術ならこなせる様になれば、創造術師として一流の証だと言われている。

「さつきも剣の創造に失敗して、すぐに折れちゃつたんですよ。創造術の使い易い冬でもこれなんて、先が思いやられます……」

はあ、と疲れた表情で溜め息をつくノイエラ。

そんな彼女に、ミーファが笑顔で声を掛けた。

「大丈夫よ。だつて、ノイエラの本領はこつちでしょ」

自分の頭を指差すミーファ。

ノイエラは、実技の成績は芳しくないが、一般教科含め創造術理論 つまり筆記に至つてはかなりの秀才なのだ。

「しかしそれだつて、代表には敵わないではありませんか。創造祭だつて評価されるのは実技です」

「ミーファ、何のフォローにもなっていないぞ」

ノイエラの悲しそうな瞳と呆れ顔の男子生徒に責められる様に言われ、たじろぐミーファ。

しかし、すぐにノイエラは笑顔になった。縁無し眼鏡の奥の知的そうな目が細くなる。

「ふふ。私は代表に敵わないからこそ、代表に憧れるのですが」

「ノイエラ……」

感動した様に翠の瞳を輝かせるミーファに、男子生徒は内心呆れ返っていた。

「おい、ミーファ」

「何よ、ハルキ」

「早くしねえと、編入生が来ちまうぞ」

「分かってるわよ」

男子生徒　ハルキとミーファの話にノイエラは首を傾げた。ス
トレートショートの髪が揺れる。

「編入生ですか？……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？」

「実はね、今日、編入試験が行われているの。それでこの実技棟を
使うのよ」

ミーファの説明にノイエラは目を丸くした。

創造学院に編入生なんて普通いないから、驚いたのだろう。いや、
学院に編入という制度がある事自体、彼女は知らなかったのかもし
れない。

「今から試験なんですか？　もうすぐ一日が終わっちゃいますけど」

「ああ、そうだ。休日は教師全員、時間が取れなかったらしい。編
入生、カワイソーに。眠気と戦いながらの試験だぜ」

ハルキは自身の言葉とは裏腹に、とても楽しそうに言った。

ミーファとノイエラはそんな彼を見て苦笑を浮かべる。

「まだ、あまり眠い時間でも無いですけどね。編入生って、どんな
人なんですか？」

ノイエラがその表情のまま、どちらともなく訊ねる。

答えたのはミーファだった。

「それがね、名前しか分かってないの。レゼル君って言うらしいわ」「男の名前だよな、レゼルって。姓も分かんねえし。面白い奴だと良いな」

ハルキが実技棟の中で創造術の訓練をしている沢山の生徒達を眺めながら言った。

友達同士でグループを作って創造術で模擬試合をしている者達もいれば、一人で黙々と『物』の創造を繰り返している者もいる。おそらくノイエラは後者だったのだろう。

そしてそんな空間の所々から様々な色の光が輝いている。この光は、融合体を外に引つ張り出す際に漏れる光で、クリエイトフラッシュ創造光と呼ばれている。

だが、この創造光を漏らさないのが一流の創造術師だ。

創造光を漏らさない、という事はつまり、構築のスピードが早いという事だ。融合体を外に引つ張り出すのが早ければ創造光はあまり漏れない。

実戦でも、創造術で『物』を創造する度に光が発されていたら隠れる事も出来ないだろう。

しかし、学生の創造術師 アマチュアで創造光を漏らさない、という生徒はあまりいない。

創造光を漏らさない創造術 むこうそく無光創造が出来るのは、最高学年の四年生や三年生の半数、毎年三十人程度いると言われる『能力』の創造が出来る特別優秀な生徒くらいだろう。

「まあ、学院に入学じゃなくて編入してくる奴なんだから面白い奴の可能性は高いな」

「入学手続きが遅れただけかもしれないわ」

「今冬だぞ？ 半年以上も遅れる事なんかあるのか？ ……ミーファ、お前、学年で一番筆記出来るのに変なところで頭悪いよな」

「う、うるさいわね。余計なお世話よ」

ノイエラはミーファとハルキの会話を微笑ましそうに笑顔で聞い

ている。

ミーファはそんな彼女を見て「何かハルキに言ってくれば良いのに」なんて思いながら、話を逸らす事にした。

「それより、早く皆に事情を説明して試験の間だけ実技棟のスペースを空けてもらおうよ。訓練の邪魔をするように悪いけど」

リレイズ創造術師育成学院はまるで神殿、王宮の様な造りをしている。

その理由は、創造術が神様からの贈り物で神聖なものだからだ。創造術の学舎は、教会の様に神聖な場所でないといけない。

だからこそ荘厳な造りになっているのだ。まずは形から、という事だろう。

その事から、学院はこう呼ばれる事がある。

サンクチュアリ
聖域、と。

「……何か、急に違う場所に飛ばされたみたいな……」

そして、学院が聖域だからこそ、実技棟の外見を見たレゼルはそう呟いた。

実技棟の外見は、聖域と呼ばれるに相応しい本校舎や講堂などとは違って、飾り気が一切無いのである。

長方形の大きな建物が縦に五つ並んでいる。右から第一実技棟、第二実技棟、という風になるらしい。中庭を通る渡り廊下は全ての実技棟に通路が延びていた。

実技棟の屋根は創造術を使い易くする為（星の光を取り込み易くする）、硝子張りだ。ルイサに聞いた話によると、星の光を物理的な障壁を越えて取り込める様に訓練する為に第五実技棟だけは硝子張りの屋根ではないらしいが。

そこはまだ良いとして、問題は壁だ。白一色の強化素材で造られた壁。窓は屋根が硝子張りな理由と同じで沢山あるが、飾り気は全

くない。実技棟は創造術の技術と共に日々進んでいる科学の力を使っているらしい。おそらくは最新のものを取り込んでいる。

まるで、近未来にタイムスリップして来たみたいだった。

しかしすぐに「いや、そういうえば外見に反して講堂の中は冷暖房・空中投影ディスプレイ完備だったな」とレゼルは思い直した。

学院の中と外では科学技術の進歩度がまるで違う。サーシャには前もってその事を聞いてはいたものの、やっとレゼルは実感出来た。「私も最初はそう思ったが、もう慣れたな」

「……俺は慣れそうにないな」

レゼルはルイサの言葉に首を振った。

何故って後ろを振り返れば荘厳で厳かで神秘的な中庭と渡り廊下と講堂と本校舎があるのだ。その中は科学技術がふんだんに搭載されているが、実技棟に来た時の違う世界に飛ばされた感はずぐには拭えないだろう。

「まあ、とにかく入ろう。早く試験をしないといけないし、何より寒い。中では一年の代表と副代表が準備をしてくれているはずだ」

ルイサがそう言っている内に、強化素材の扉が両側に開いていく。センサーが扉に歩み寄った彼女に反応したらしい。講堂にこのシステムは無かったから、これは実技棟だけなのだろう。

変わらぬ足取りで入って行くルイサにレゼルとセレンが続く。

緋色の髪の少女はとても眠たそうだ。

早く試験を終わらせなければ、と決意の様なものを秘めながらレゼルが実技棟に入ると、何故か沢山の生徒に出迎えられた。

「……は？」

フードに隠れた目を見張って、思わずすっとんきょうな声を上げてしまう。

一体ここは何処だ。今真夜中近いんだが、何故こんなに生徒が実技棟にいるんだ。何かイベントでもあるのか。何かって何だ。これからあるのは俺の実技試験じゃないのか。

数々の疑問が頭の中を過っていく。

唖然とするレゼルを、沢山の生徒達は観覧席から出迎え　否、注目し、見下ろしていた。

男子は黒、女子は白を貴重とした創造学院の制服を着た生徒達は、レゼルを見て微かにざわめき始めた。

「アイツが編入生だろ？」

「顔見えなーい」

「強いのかな？」

「馬鹿言え。半年以上も遅れて今更学院に入ってくる奴だぞ？」

「そうそう。きっと学習意欲が薄いだよ」

「強い訳ないって」

「あ、だよなー」

レゼルの卓越した聴力は全ての台詞を拾っていた。その事に生徒達は気付くはずもない。

こういう事を言われるから編入という待遇は嫌だったんだ、と思つて心の中で溜め息を吐きながら、しかしレゼルにそれほど気にした様子は無かった。

覚悟はしていたし、こんな中傷はレゼルにとって何でもないものだったからだ。

生徒達のざわめきの中には「赤い髪の子、誰？」とか「編入生つて二人いるの？」とか「超可愛い」とかも混ざっていた。が、セレンは特に気にはしていない様で、

「……レゼル」

袖を引かれた感触がして肩越しに後ろを見ると、眠たそうにぼーっとしていた感じを完全に消したセレンが小さく囁いて来た。

「……何だ？」

レゼルも小声で問う。

「顔を見せるのは、実技試験で創造術を見せてからの方が良いです。そうでない」と……」

「……ああ。確実にパニックになるな」

二人は小声で話す間も、ルイサの後を付いていつていた。

観覧席でなく、実技棟の中央　訓練場の中央にも生徒はいた。
左から、体格の良い男子生徒、金髪ポニーテールの女子生徒が横
に並んで立っている。

ルイサは彼らの前で止まると、女子生徒の方に声を掛けた。

「準備ご苦労様、と言いたい所だが……ミーファ、この状況は何だ
？　生徒達は寮に帰らせなかつたのか？」

すると、女子生徒は苦笑いを浮かべた。

「皆、実技試験が早く終わるならその後でまだ訓練していきたくい
て言ってます。それと、実技試験を見たいみたいです」

「ま、普通はこうなりますよね」

と、自分の後頭部に腕を回して軽い調子で言ったのは隣の男子生
徒だ。

「成る程、な……」

ルイサは女子生徒の説明で納得したのだろうか、溜め息を吐いて
いた。

「頑張り屋なのは結構だが、殆どの生徒が編入試験というイレギュ
ラーに好奇心を隠せなかつた訳か」

そしてレゼルも、彼女と同じ心境だった。

彼女と女子生徒の会話から、何となく状況は把握出来た。

冬には、創造祭という祭りが創造学院主催で開催される。学院が
冬に忙しくなるのはこれが理由だ。

その創造祭で学生達は自らの創造術を披露するという。生徒達が
こんな遅くまで訓練に励んでいるのはその為だろう。

そして、レゼルの実技試験が見せ物の様になったのは、女子生徒
やルイサが言った通りの理由である。

「あ、えっと、初めまして。私、一年代表のミーファ・リレイズと
言います。編入実技試験は代表として観させて頂きます」

金髪ポニーテールの女子生徒は翠の瞳を細めて微笑みながら、自
己紹介と何故この場にいるかを話し、気さくに握手を求めてきた。

しかし、レゼルは彼女の手を握る事が出来なかつた。

握手を拒む理由があった訳じゃない。彼女の名前を聞いて、少なからず驚いてしまったのだ。

ミーファ、という名前の女子生徒はフードでレゼルの顔が見えていないのだろう。なかなか握手を返してくれない彼に、ミーファは怪訝そうな顔をした。

「……リレイズって」

だが彼女は、呟かれたレゼルの言葉に彼が驚いているのだと経験則で分かり、曖昧な笑みを浮かべながら手を下ろした。

「ええ。私の母は学院長兼この街の領主、ミーナ・リレイズです」
リレイズ家は、代々、リレイズの街の領主と創造学院の長を務める家系だ。多くの優秀な創造術師を輩出した、創造術の世界の中の名家である。

そして、ミーファというこの少女も、優秀な創造術師。神童と呼ばれる彼女はまだ創造学院の一年生だった。

その事に、レゼルは驚いたのである。
そしてもう一つ、握手を返せなかった理由があった。ほんの一瞬だけ、彼女を見て違和感を感じたのである。その正体は何なのかは分からなかったし、気のせいかもしれないのであまり気にはしなかった。

「やっぱ有名だな、ミーファは。編入生のレゼル君も知ってたぜ」
おちゃらけた感じで言ったのは、男子生徒だった。彼は笑って続ける。

「俺は聖笹院晴牙^{しやうさのいん・はるき}。一年の副代表だ。ここにいるのはミーファの理由と同じ。頑張れよレゼル」

男子生徒　晴牙は手を差し伸べては来なかった。しかしそれはレゼルが気に食わないとかではなく、単に面倒臭いからだという事が雰囲気から分かった。

「シヨウノイン……？　珍しい名前だな。極東の人か？」

どうやら彼はかなり話しやすい人のようだ、と直感したレゼルは晴牙に訊ねた。

そのレゼルの言葉を聞いてミーファが首を傾げたが、訓練場にいる者は誰も彼女の仕草に気が付かなかった。

「ああ。俺は極東から来たんだ。初めてか？ 東洋人を見るのは」
よく見れば、彼の瞳は茶色をしている。顔立ちも生粋の東洋人の証になっていた。

それなのに、流暢にすらすとディブレイク王国の公語を話すな、とレゼルは感じた。が、語学には一応自信があるレゼルなので、それが顔に出る事はなかった。

「いや。一度、極東に行った事がある。とても良い所だったよ」

これは本当の事だ。二年前、レゼルは極東を訪れた。そして本心から良い所だと思えたのである。

途端、晴牙は目を輝かせ、手を握って来た。

「だろ？ 良い所だろ？ お前良い奴だな！」

ばんばん、と背中を叩かれる。地味に痛かったが、嫌な気分にはならなかった。

しかし同時に疑問を覚えた。

確か、極東の日本という国にも創造学院はあつたはずだ。どうして北のディブレイク王国にあるこのリレイズ創造学院に来たのだろうか？

世界で五つある創造学院の入試は同じ日に行われる。一人の者に一度しか門戸を開かないというのは五つの創造学院全て引つ括めての制度だ。だから日本の創造学院の受験に落ちたからリレイズ創造学院に来るなんて事は無理。そうなると、最初から晴牙はリレイズ創造学院を狙っていた事になる。

質問を口にしたレゼルだが、プライバシーという言葉を出して自重した。

「ところでレゼル、その緋い髪の子は？」

「名前はセレン。彼女はレゼル君の連れでな、彼が試験に合格すれば私の補佐役になる」

レゼルの手を離して首を捻った晴牙に答えたのは今まで黙ってい

たルイサだった。

「宜しく願います」

ペこり、とセレンが可愛らしく頭を下げる。それで実技棟のざわめきが少し鎮まった（静まった？）気さえした。

「自己紹介は済んだな。さ、試験を始めるぞ」

「ちよつと待って下さいエネデイス先生！ まだレゼル君の自己紹介が終わってませんから」

ルイサを制してミーファはレゼルに言う。

「ごめんね、レゼル君。私とハルキ、君の編入希望届見せてもらってないの。自己紹介してもらって良いかな？」

「ああ、分かった。元々そのつもりだったしな。俺はレゼル・ソレイユ。ちよつと事情があつて学院に入るのが遅れてしまったんだ。

無事入れたら、よろしく……って、あの……？」

ミーファは目を見開いてレゼルを見詰めていた。

最初は戸惑つたが、すぐに彼女の驚きの顔の理由が分かった。

それに、驚いているのは彼女だけではない。晴牙はまさか、という顔を隠そうともしていない。観覧席にいる生徒達もぼかんとしたり、絶句したりしている。

彼らは皆、ソレイユという姓の意味を知っているからだ。

セレンの仕草のお陰で少しは収まったはずのざわめきが再び大きくなるのを認識しながら、レゼルはミーファや晴牙に、自分はレミル・ソレイユの弟である事を伝えようとした。

「じゃ、じゃあ、君はあの」

しかしミーファが微妙に呂律の回っていない口調でレゼルの発言を事前に遮った。

そして彼女の発言さえも、遮られた。誰かの言葉ではなく、物理的な干渉によって。

敵意は、実技棟に入ってから途切れる事なく察知していた。だが、如何せん敵意は多過ぎた。

一際強い敵意を探するのは面倒臭かった。レゼルは、自分に向けら

れる敵意ならどうでも良かったからだ。自分が敵意を向けられても、自分の大切な人達に被害が及ばないのならば、自分を好きだけ嫌いになればいいと思っていた。

しかし今、レゼルに向けられている敵意が彼の最も大切な人を害しようとしていた。

観覧席から飛んだ投げナイフ。

鈍色の刃は、レゼルという的を外してセレンにその矛先を向けていた。

咄嗟に身体が動く。

創造術を使うなんて意識は全く浮かばない。

セレンの前に素早く回り込んだレゼルは、素手でナイフを受け止めた。右手の甲を自分の顔に向け、ナイフの刃の部分を人差し指と中指に挟んでいる。

「レゼル。私でもナイフくらいどうにでもなりましたが……」

生徒達やルイサが言葉を失う中、セレンが無表情に、しかしレゼルが守ってくれた事に少し嬉しそうな声音で言う。

だが、そんな少女も、次の瞬間、周りと同じ様に言葉を失った。

「貴様！」

レゼルはセレンや周りの反応には構わず、怒りのまま声を上げた。投げナイフを放った者はとくに特定出来ていた。ナイフは創造術で創った物だったらしく、レゼルが指に力を加えると消失した。

レゼルから見て右側の観覧席の一番上。そこにいる男子生徒を殺気と怒気を込めて睨み付ける。

彼の視線と雰囲気、自分の創り上げた創造物^{ナイフ}が簡単に消失した事に、その男子生徒は誰の目にも明らかに怯み怯えたが、男子生徒のネクタイは赤。最高学年の意地があるのだろう、彼は表情を狂った笑みに変えた。（男子制服のネクタイと女子制服のリボンの色についてはルイサに教えられていた。赤が四年、緑が三年、青が二年、紫が一年。実技棟には少し一年の割合が高いものの、ほぼ四学年は人数の比率は変わらない。）

「ふざけんな！ 目障りなんだよ、お前！ 今頃編入？ ハッ、お前みたいな学習意欲の無い奴がノコノコと入って来れる場所じゃねえんだよ、学院は！ お前が編入試験を受けるだけでも虫酸が走るつづーのに、拳げ句俺達の訓練を邪魔して実技試験だと？ ウザいにも程があるんだよ、自分の立場分かって……」

興奮し、狂った様に叫び、レゼルに悪態をつく男子生徒。

しかしレゼルは、何時までも続くと思われた彼の罵倒が次第にフエードアウトしていった事が気になった。

彼には、男子生徒の罵りは全く届いてはいなかったからだ。心底どうでもいい言葉の羅列だと思っていなかった。

そこで、レゼルは自分の頭の上が軽くなっている事に気付いた。その意味にも気付き、レゼルは一瞬全身から血の気が引く感覚を覚えた。

だが、それも一瞬。

元より覚悟していた事だとすぐに冷静になる。そしてこれが原因で男子生徒の罵りはフエードアウトしていったのか、と納得した。レゼルの、コートのフードが、外れていた。

但し、ルイサの見た髪と瞳の色は、そこには存在していなかった。

観覧席が静まり返った。ルイサが、晴牙が絶句した。ミーファだけは何故か、悲しそうな瞳をしていた。セレンは、レゼルと共に覚悟を決めていた。

しかしレゼルは、変わらずナイフを放った男子生徒を睨み付けていた。

「ちゃんと俺を狙え！ 貴様それでも四年か！？」

少し怒りの矛先がずれたレゼルの発言に実技棟の中の張り詰めた緊張感が幾らか削がれ、それが引き金になったのか、あちこちから立て続けに悲鳴に近い声が上がった。

「うわっ……!?!」

「お、おい、マジかよ! あれって……!」

「きゃあああああっ!」

「嘘でしょ!?!」

「何で《雲》クラウドが学院の試験なんか受けてんだよ!」

「やっと顔見えたあ。ちよつと、や、かなり良くない?」

「何言ってるんの馬鹿! 彼の髪と目の色、あれ、どつからどー見たつて《雲》でしょーが!?!」

小さなパニックに陥る観覧席。

中には半狂乱になって実技棟から逃げ出す者もいる。

「レゼル君、君は……!」

呻く様なルイサの声。特に彼女は引つたくり騒動でレゼルのあの姿を見ているから、目の前の少年の姿が信じられないのだろう。

緋色の髪と瞳の少女を背中に庇いながら、悠然と観覧席を睨み付ける少年。

今、彼の髪と瞳の色に、《白銀シルバリー・クリエーターの創造術師》レミル・ソレイユを彷彿とさせる銀と青は無い。

彼は、灰色の髪と漆黒の瞳だった。

観覧席のパニックが最高潮に達する。

レゼルに睨まれている男子生徒はその眼光に吞まれてしまったかのように突っ立ったまま。膝が情けなく震えていたが、表情は気丈にも笑みを浮かべている。

そこでやっと、呆然としていた晴牙とルイサが事態を收拾しようと動き出そうとした。

さすがは学年を束ねる副代表と教師　それも彼女は普通の教師ではない　だ。

しかしその時、実技棟に怒りに染まった声が叩き付けられた。

「黙りなさい!?!」

クラウド
《雲》。

この朝のない世界にはそう呼ばれる者達がいる。

一般人との違いは、二つだけ。

創造術が先天的に使えない体で生まれてくる事と、必ず灰色の髪と漆黒の瞳を持って生まれてくる事。

創造術は、誰でも使えるという訳ではない。しかし、才能があまり無くても努力をすれば簡単な創造術なら誰でも出来るようになる。幾ら努力しても、《雲》は創造術が使えない。才能が有るとか無いとかじゃなく、《雲》には創造術という概念自体が欠損しているのだ。

そして彼ら、《雲》は、世界から忌み嫌われている存在だ。

神に見放された者。

《雲》をそう呼ぶ事もある。

創造術は、神様からの贈り物。神聖なもの。

それが使えない《雲》は、神に見放された者だと言われているのだ。

この世界では、三年に一度、クラウド・ハント《雲狩り》という虐殺行事がある。

世界に太陽があった時代に、魔女狩りというものが行われていたというのは多くの文献に記されている事だ。それになぞった《雲狩り》は、神様からの贈り物である創造術を信仰する宗教団体によって行われる。

宗教団体は《雲》を見つけ次第、躊躇い無く殺す。処刑の連続執行だ。

世界を汚す者として、《雲》というだけで、創造術が使えないというだけで、殺される。

運良く《雲狩り》の直後に生まれる事が出来ても、《雲》の寿命はたったの三年。その三年の間も存在を隠さなくてはならない。

大抵は生まれた子供が《雲》だと分かった瞬間に親によって殺される。だが、そんな事が出来る訳のない家族がいるのも当たり前。その為の《雲狩り》なのだ。

創造術は血に依存する。創造術の才能の有無は家系によって大きく傾いてくる。一般家庭から突出した才能のある者が生まれる事もあるが、それは稀だ。

そんな中で、《雲》はどんな家系にも生まれる可能性は等しくある。

例えば、二年前までは優秀な創造術師を輩出してきた名家に《雲》の子が生まれ、一気に落ちぶれてしまった話は有名だ。

《雲》。

世界から、忌み嫌われる存在。

そんな存在が、創造学院に入ってきた。

聖域に、足を踏み入れて来た。

パニックが起きるのも当然だった。

レゼル・ソレイユ。

彼の名を聞いた時、ドクンと心臓が跳ねた。

彼の声を聞いた時、思わず涙が出そうになった。

だから、赦せなかった。堪えられなかった。

彼が《雲》だと分かった瞬間、みっともなく狼狽え、パニックになる生徒達が、赦せなかった。

こんなに本気で怒ったのは久しぶりだ。

頭の片隅でそんな事を思いながら、ミーファ・リレイズは怒鳴った。

「黙りなさい！！」

「……え？」

実技棟がしん、と静まり返る中、レゼルは後ろの少女を振り返った。

最初はセレンが怒鳴ったのか、と思ったが、違う。その証拠に怒鳴った声はセレンのものではなかったし、彼女もレゼルに背を向け振り返っていた。

肩を怒らせ、眉を吊り上げ、頬を紅潮させているのは、金髪ポニーテールの少女だった。

「これから実技試験なのよ！ 少し黙っていなさい！！」
いきなり（でもないかもしれないが）激昂した一年代表に学年は関係無く全員がぎよつとしていた。

感情が表情に出ないセレンも、ミーファの剣幕に身体を後ろに引いた。とん、とセレンの肩がレゼルの脇腹に当たる。

ミーファは語を続けた。

「これから試験をする人の事を考えなさい！ どんな事情があったって、騒ぎ立てるのは迷惑だわ！」

その言葉はキツイように思えたが、彼女の言っている事が人として正しいという事は殆どの生徒が理解した。

だが、それでもまだ戸惑っている者もいる。

「目の前に《雲》がいて落ち着ける訳ねえだろ……」

「何であの編入生、《雲狩り》で殺されてないのよ……」

「あの髪と目だったら、問答無用で殺られてる筈なのに」

「……何者……？」

「ヤバいんじゃないの？ 学院に《雲》入れるって」

騒ぎが収まった代わりにひそひそと内緒話のように囁かれる。

勿論、レゼルは全て聞こえていた。

内心で、はあ、と溜め息を吐く。《雲》だという事に対する誹謗

中傷には慣れていた。だから、特にこれといって悲しいとか寂しいとか相手が憎いだとかは感じない。ただ慣れたら慣れたで、うんざりするようになった。

観覧席を立つて落ち着こうとしない生徒達にしびれを切らしたらしいミーファが再び怒声を叩き付けようと口を開いた、その時。

「あの、皆さん座って下さい！ 試験が開始出来ません！」

ミーファの背後の観覧席で、一人の女子生徒が立ち上がりながら呼び掛けるように言った。いや、呼び掛けた。

リボンの色は紫。一年生だ。縁無しの眼鏡にショートカットの真っ直ぐな髪。知的な雰囲気のある少女だった。

「ノイエラ……」

振り返ってその少女を視界に収めたミーファが呟く。どうやら彼女の名前はノイエラというらしい。

ノイエラの呼び掛けに何人か生徒が大人しく席に座った。それに釣られて他の戸惑っていた生徒達も次々に座っていく。

実技棟からは観覧席を降りてからでないと出られない為、パニックになっていた中では外に出られた者はいないようだ。

生徒達が座ってくれた事に安堵したのか、ノイエラは胸を撫で下ろして自分も席に座ろうとした。動作が、ふいに止まった。

彼女は、反対側の観覧席を見詰めていた。

その視線を追う様に、レゼルが、セレンが、ミーファが、晴牙が、ルイサが、振り返った。

ただ、レゼルだけはノイエラという女子生徒が何を見ていたのかわかっていた。

後ろから、一人だけ座る気配が無かったのだ。そして座ろうとしないのは誰なのかも、当然分かっていた。

「ざけんなよ……」

レゼルが予想した通りの人物の口から、呪詛のような気持ちの悪い、低い声が漏れ出た。

投げナイフを放ってきた男子生徒だった。

粘つく様な悪寒のする視線で、男子生徒はレゼルとミーファを交互に睨んだ。

「ふざけてるのは貴様だろう」

男子生徒への怒りが消えた訳では無かったレゼルが、そう言つて男子生徒を睨んだ。彼の気持ち悪い目のせいで、セレンが小さくレゼルの袖を掴んできた事が引き金となつたのだが。

すると男子生徒は一瞬ビクツと震えた。視線をレゼルから逸らしミーファに固定する。

そして言葉を撒き散らした。

「おい、女。お前、一年代表だからつて調子乗つてんじゃねえよ。黙りなさい？ ハッ、偉ぶつて何か楽しいですか？ 最悪だな、うぜえんだよ女！ 黙つてんのはお前の方だつーの！ ああ、そうかお前、学院長の娘だっけ？ だから先輩の前でも優等生面して偉ぶつて良いとか思つてんだろ。益々うぜえな。どうせ代表になれたのも親の権力を振り翳したんだろ？ ずるい奴！ 見た目良いからつて粹がつてんじゃねえ！」

粹がつてんのはお前だ、と実技棟にいるナイフ野郎以外の生徒は思つただろう。

生徒達は皆、長々と続く男子生徒の愚痴に辟易としていた。もうすぐ日付が変わつてしまう。実技試験を早く始めて欲しかった。《雲》が試験を受けるのだ、果たして創造術は使えるのかとか、一度落ち着いてしまえば好奇心が膨れ上がつていた。

周りから向けられる非難の眼差しに気付きもしないナイフ野郎。

「大体、何だよ、お前。急に怒り出してさあ？ 何？ もしかしてそんな汚らわしい《雲》がお好みなのか？」

ナイフ野郎の言葉に、ミーファの顔にかあつと血が上つた。

その様子を見てヒヤヒヤハハハッ、と下品に嗤う男子生徒。

実技棟に不気味に反響する狂つた嗤い声に、ミーファに憧れを持つノイエラが怒りに震え始めた。それに気付いた周りの生徒が「本^マ気^ジグレしそつなんだけど……」と後じさる。

一触即発の空気に包まれ、セレンがレゼルの袖を握る力を強くした。

そして、

「えつとね、四年の……誰だっけ、君。まあいいや、ナイフ君と呼ぶね。で、ナイフ君、独り演説中に悪いんだけど、はつきり言つて邪魔だとか皆思つてるよ？ さつきから何にキレてんだか知らないけど、大人しくしてくれなかないかな？」

実技棟に入つて来た女性がニッコリと笑つて言った。但し、目は笑っていない悪魔の微笑みだ。

毛先がふんわりとした金色の髪に翠の瞳。ミーファによく似たスーツ姿の女性だった。

スーツの中に窮屈そうに押し込まれた胸、スカートから伸びるすらつとした長い脚は黒いストッキングに包まれて艶かしい。大人の色気を兼ね備えた若い美人。

だから、制服ではないが、四年生にミーファの姉でもいるのか、と思つたのだが、

「あ、お母さん」

と、ミーファが何でもない事のように（実際何でもない事なのだが）その女性を呼んで、

「今は学院長と呼びなさい、ミーファ」

と、女性は軽く自分の娘を窺めた。

「……母あ！？」

すつとんきような声を発したのはレゼルだった。

「ん？ 何か問題でもあるのかな？ レゼル・ソレイユ君」
女性が悪魔の笑みを此方に向ける。

若過ぎだろ、今何歳なんだ、という疑問（問題？）を封じて、レゼルは言う。

「い、いえ……別に何も問題なんて無いですよ」

袖からセレンの手が離れる感覚。その直後、彼女に背中を抓られた。

痛い。

「そつか。じゃ、初めましてだね、レゼル君。私は学院長のミーナ・リレイズ。これからよろしくね」

「……え？」

ミーナ学院長の言葉に声を漏らしたのはセレンだった。

その理由はレゼルにも分かる。

ミーナは「これからよろしくね」と言った。レゼルが試験に合格して編入する事を確信している様な言い方だ。

引ったくり騒動の事はまだあまり広まっていない筈だ。そもそもレゼルが顔を晒したのは一瞬で引ったくり騒動を収めたのがレゼ尔だとはルイサかあの謎のメイドが言い触らさない限り知られる事は無いだろう。

だが、ミーナはすぐに男子生徒 ナイフ君に向き直った。

「ね、ナイフ君。実はね、レゼル君の実技試験の内容は対人戦なの。もう時間無いからね。だから大人しく出来ないんだったら君がレゼル君の相手になれば良いと思うの。最初からここにいる誰かに相手頼もうとしてたし。良いよね、ナイフ君？」

ニツコリ、とミーナは笑った。 極限まで隠された悪魔の笑みで。

レゼルと男子生徒（ナイフ君）は実技棟の中心で対峙していた。レゼルと男子生徒の間にはルイサが立って試験官を務めている。セレンやミーファ、晴牙、ミーナはノイエラのいる左側の観覧席で此方を見詰めている。

席は、先程のノイエラの怒気によって彼女の周りで確保済みだった。

最初、男子生徒はミーナの提案に尻込みしていたが、こんなにギヤラリーがいるのに断る事は出来なかつたんだろう。本当に、意地

だけは人並み以上にある奴だ。

ただ、今彼はレゼルを真正面から見て、余裕たっぷりな顔を浮かべた。

「お前、マジで《雲》なんだな。創造術も使えないのにどうやって戦うんだ？ お前は馬鹿か？」

何とでも言えば良い、と思った。

これから戦う相手は、レゼルの事を《雲》だと油断している。確かにレゼルは《雲》で、世界の常識なら《雲》が創造術を使えるなどとは誰も考えないだろう。

しかし、《雲》でありながらレゼルは学院に来たのだ。もしかしたら、と思ってもいい筈なのだが。

「戦い易い相手だな……」

ボソリと呟く。

四年だからそれなりに実力はあるだろう。だが、世界の常識に嵌まり込んでしまっていては、その実力も塵芥同然だ。

「人を睨む事しか出来ない、神に見放された奴が俺に勝とうなんて無理に決まってるんだろ。大体、創造術名家の血筋でもない限り、『能力』創造が出来る四年に勝てる訳がない。俺は二年の時から『能力』創造が出来るんだぞ？」

男子生徒の言葉をレゼルは無感情に聞き流す。感想は、「ああ、そう」くらいものだ。

一度口を開けば長々と喋り続ける男子生徒にルイサのこめかみがピクツと震えた。

「あっさり不合格にしてやるよ、この身の程知ら」

「ルールは一对一の対人創造術戦。創造術による武器の使用及び、『能力』創造による格闘戦を許可する。だが相手を死・重症に至らしめる攻撃をすれば反則となる、くれぐれも注意しろ」

男子生徒の言葉を遮ってルール説明を始めたルイサは、ちら、とレゼルの方を一瞥した。

水色の眼鏡の奥の瞳は、言っている事とは裏腹に「ボコボコにし

てやれ」と語っていた。

レゼルの実力を知っているルイサは、既にどちらが勝つのか確信しているようだ。彼女は、レゼルがどうやって四年に勝つのかを楽しみにしている。

喋っていたのを制止させられた男子生徒はルイサを忌々し気に睨んだ。気持ち悪い視線が、対峙しているレゼルにまで届く。

ルイサは小さく眉を寄せたが殆ど無視して五メートル程後ろに下がった。

男子生徒がズボンのポケットに入れていた両手を出して胸まで上げ、腰を低くして構える。

対してレゼルは微かに半身になっただけで、両手はだらりと垂らし、姿勢の良い直立のまま佇む。

一見すると素人同然の構え方だと思っただろう。しかし見る者が見れば、隙の無い構え方だと思っただ筈だ。

男子生徒は、前者だった。レゼルを眺め、その口元に嘲笑の曲線を深く刻む。

実技棟に緊迫感と静寂が漂う。

そして、レゼルとルイサの耳にだけ、ルイサがすう、と息を吸う音が届いた。

「始め！」

ルイサの号令のほんの一瞬の余韻が終わらない内に、既に訓練場の風景は変わっていた。

レゼルの姿が何処にも無い。

それを認識出来た者は何人だっただろうか。彼の姿が消えたのはこれも一瞬だけ。

殆どの生徒が、消えたと認識出来ず、気付いたらレゼルは男子生徒のすぐ前にいて、青く光る透き通った剣を振り抜いていた。

ガクツ、と意識を手放した男子生徒は音も無く崩れ落ちた。

「殺した？ ……いや、気絶させただけか」

口調どころか声の質まで変わった声でミーナは言った。それが、

静まり返った実技棟の観覧席に意外に大きく響いた。

ルイサが、ゆっくりと右手を水平に上げる。

その時にはもう、レゼルは剣を一閃した体勢を解き、左手をコートのポケットに突っ込み、剣を握った右手は試合（レゼルから見れば試験）が始まる前と同じ様にだらんと垂らしていた。

そして、二人の教師と生徒達は気付く。

レゼルの髪は照明の光を反射して煌めく銀色に、瞳は濁りなど一切存在しない綺麗な青色に変わっている事に。

銀髪碧眼の少年は、その姿に《雲》の面影を全く感じさせなかった。

ポケットから左手を引き抜き、静かに元の場所に戻る。レゼルは小さく一礼した。

「勝者、レゼル・ソレイユ」

ルイサの声が滑らかに空間を渡っていった。

ミーファは、知らず知らずの内に観覧席から身を乗り出していた。彼女の頬は何か安堵したように緩んでいた。

凄い。

何をしたのかは、殆ど分からなかった。神童と言われるミーファだが、プロの創造術師に比べれば経験の差でまだまだ未熟だ。

しかし、彼が創造術を使った事は分かった。

彼は、約束を守ってくれた。

必ず創造術を使える様になってみせる、というミーファとの昔の約束を、ちゃんと守ってくれた。

彼はミーファの事を忘れてしまっている。それを思った時、悲しくも淋しくも感じた。だが同時に仕方ないとも思った。

ミーファとの約束の後に、彼は、姉を失ったのだから。シヨックで、記憶が飛んでいてもおかしくはない。

だからミーファは、無理矢理レゼルに思い出させる事もしないと決めた。ミーファの事を思い出させて、彼に嫌な事まで思い出させたくはなかった。

とても、綺麗な色。

銀髪碧眼の少年を見て、ミーファは眩しいものでも見るかの様に目を細めた。

「今の……創造術、よね……？」

「何が起こった……？」

「瞬間移動……？」

「ち、違う。『能力』創造で身体能力を上げたんだ……」

「は？ ……マジかよ、アイツ、本当に《雲》なのか？ 灰色の髪に漆黒の瞳は《雲》だったのは絶対だけど……」

「今、銀髪碧眼だし、どうなってるの？」

「何なんだ……？」

「当然だけどあの剣も、創造物だよ。つまりあの子、『能力』創造と『物』の創造を同時にこなしたんだ……」

「……並行創造、だね」

「プロなら当たり前の技術だけど、凄いよ彼」

「しかも、無光創造だった」

「これは合格だろ」

「……でも、謎だらけだ」

生徒達は訳が分からず、目を丸くしている。上級生の中には、驚き戸惑いながらも、冷静にレゼルを分析している者もいたが。

「……レゼル君」

観覧席からミーナが声を掛けてきた。

レゼルがそちらを振り向くと、彼女は笑って言った。それは、悪魔の笑みでは無かった。

「合格、おめでとう」

第4話 嘘（前書き）

今回もページ数がバラバラです……。ページ調節が出来そうには
ありませんorz。

第4話 嘘

創造術は、決して万能ではない。^{クリエイター}

例えば優秀な血筋に生まれても、努力は必要で、それは一般人が想像も出来ない程に血の滲むものだ。

創造術は、神様からの贈り物。けれど、神は決して甘くない。

少しでも使い方を誤れば、創造術は術者を死に追い込む事だってある。

人間を創造する事は創造術師の禁忌。^{クリエイター}

その理由は、人の命を人が創るといふ事が神への冒涇だから、という事もある。確かに、創造術宗教団体は人命創造は人間のすべき事ではないと定義している。

しかし、創造術医学の方面に詳しいものならば、知っているだろう。人が人の命を弄ぶ、それは神への冒涇だ。だが、人命創造が禁忌となっている裏の理由は、それが成功する訳がなく、今まで禁忌を冒してきた創造術師達が例外無く全員死んでいるからだ。

創造術で創った物、つまり創造物は、一度創造したらずっと留まり続けている訳ではない。世界に実体化している時間は人それぞれで実力にも関わってくるが、大体が五分も経たず消失してしまう。^{パニッシュ}

しかしそれは創造物を放って置いた場合で、創造術師が定期的に融合体を送れば創造物は実体化を維持出来る。

だからと言って、融合体を送り続ける事は容易な事ではない。エナジーが消費され続けるのは勿論のこと、星の光を取り込むのだけて体力と集中する為の精神力が必要なのである。

創造目的の最初の構築よりは創造物維持の為の融合体の方が少なくて済むのだが、無理に維持しようとすれば、エナジーの消費速度より早くエナジーを回復出来る生命力を持つていたりというあり得ない異能がない限り、死、という可能性もある。実際、それで命を落とす創造術師は毎年何十人といふのだ。

もし、人間を創造出来たとしても、その存在を維持し続ける事は不可能だ。

そして例外無く、禁忌を冒した者は構築が終わる前にエナジーを暴走させて死に至る。一瞬でも人間の命が人間に創られるという事はないのだ。

創造術には制限時間がある。

創造術が万能ではない理由はこのような事情からだが、他にも色々制約がある。

創造術師は創造術に頼り過ぎてはいけない。

そう言ったのは、白銀の輝きを纏う最強の創造術師だった。

編入試験が終わった後、レゼル、セレン、ミーファ、晴牙、ノイエラ、ミーナ、ルイサの七人は寮のロビーにいた。

壁に掛かる時計は既に十五分程今日に突入している。しかし眠たそうにしているのはセレン一人だけだ。

ロビーにある応接用だと思われるソファに座って、レゼルとセレン以外は今は晴牙が持っている剣を興味津々に見詰めている。

それは、レゼルが実技試験で男子生徒を気絶させた剣だった。実技棟からずっと、レゼルはそれを維持し続けている。手元を離れた創造物に融合体を供給するのはそれなりに高度な事なのだが、ここにはそれを驚くのはノイエラくらいしかない。彼女にしても、レゼルの実力は見えているからそれ程驚きはしなかった。

青く透き通る刀身は五十センチ程。柄の部分は完全な黒色で、装飾は一切無く、ただ握る為だけにあるような無骨さがあった。

ふと、左隣に座っているミーファがレゼルを上目遣いで見詰めてきた。

レゼルの髪と瞳は、今も銀髪に碧眼である。

「……何で、変わったの？」

ミーファが独り言の様に呟いた。

しかし、レゼルは答えなければならぬ雰囲気を感じ取った。剣を見ていた者達も、レゼルに視線を移してきたからだ。

「ああ、これは、創造術を使うと色が変わるんだ。理由は分からないけど」

「創造術を使うと？」

レゼルとテーブルを挟んで向かいに座るミーナが首を傾げる。

「はい。例えば……」

レゼルは右斜め向かい、つまりミーナの隣に座る晴牙に目を向けた。

正確には、彼が持つ剣に目を向けた。

一瞬で、その剣を構築していた融合体の二つの成分が引き離れる様をイメージする。

すると、晴牙の腕の中にあつた剣は、刀身と同じ色の光の粒子をばつと散らして消えた。

融合体の供給を止める事で創造物は薄れていくように消えていくが、今レゼルがやったように、一瞬で意図的に消す事も出来る。これが消失する、という行為だ。

そして、レゼルには変化があつた。

「あつ……」

ミーファが小さな声を上げた。セレン以外の者は等しく、まじまじとレゼルを見詰めている。

レゼルの髪と瞳の色は灰色と漆黒に戻っていた。

「ふむ……よく分からないが、興味深いな」

レゼルの左斜め向かいにいるルイサが顎に指を当てて考え込む。

「やっぱり……その、《雲》……の、髪と瞳ですよね……」

ミーファを挟んで、少し戸惑つたような声が聞こえてくる。ノイエラだ。（彼女のレゼルへの自己紹介は既に終わっている。）

《雲》、という名称は《雲》本人達にとって立派な蔑称だ。だから口調がつかえつつかえになったのだろうが、今の状況からしてその言葉を使うしかなかったのだろう。

そしてその証拠に、

「本当にレゼル君で《雲》なの？」

と、全く遠慮などせずにストレートに訊いてくる学院長がいる。

しかし、別にレゼルが気分を害す事はなかった。

《雲》と呼ばれるのにも蔑まれるのにも慣れていて。そして現実自分分は《雲》という存在なのだから、それを否定は出来ないしする気もない。

「はい、俺は真正正銘の《雲》ですよ」

だから、レゼルはあっさりと頷いた。

「……創造術が使えるのにか？」

「《雲》は創造術が使えないと誰が決めた？」

晴牙の質問に質問で返す。晴牙は、ポカンとした表情になった。

「それは……いや、創造術が使えないから《雲》と呼ばれる事になったんだ。誰かが決めた訳じゃない」

ルイサが答える。

レゼルは口調を敬語にして、言葉を続ける。

「はい。ですから、創造術が使えるという面から見ると俺は《雲》ではないのでしょうか。しかし、容姿の面から見ると俺は《雲》なんです」

「……えっと、つまり？」

ミーファが困惑顔で首を傾げる。その仕草が、やはり彼女とミーナは親子なのだと思わせた。

「普段は《雲》だけど、創造術師の時は《雲》でなくなる、という事」

レゼルは簡潔に言った。

「創造術師の時は創造術が使えてるんだから、それは当たり前だと思っんですけど……」

ノイエラの遠慮がちな指摘に、レゼルは思わず苦笑を漏らした。
「そう、なんだよな。……悪い、俺も自分の事がよく分かってないんだ。でも、確実に俺は《雲》だって、直感が言ってる」
しん、と寮のロビーに静寂が漂った。

しかし、それはすぐにミーナによって破られた。

「まあ、君が《雲》なのかどうかはもういいよ。さっきの剣だけど、試験の時の構築「コンストラクシオンメンシユ」と消失の速度が随分違うね？」

「え？ ……あ、そういえば」
ノイエラが呟いた。

他の者は全員ミーナの言った事に気付いていたのか、表情の変化などは無い。

「情けない事だけど、構築は何時したのか、私も分からなかった。でも、消失スピードは普通の速さだったよね」

ミーナは言いながら、心底不可解そうに眉を寄せる。

確かに彼女の言う通り、一つの創造物で構築と消失のスピードが全く違うというのは、あまり聞かない事だろう。そもそもが、その二つのスピードは、創造術師の実力によって左右されるものなのだから。

「まさか君、構築は得意だけど消失は苦手とか？ いや、さっき剣を消失させたのを見てた限り、苦手と表現するのは適切じゃないね。消失スピードもアマチュアの平均を大幅に上回ってたし、レゼル君、本気じゃなかったし」

「何だか少し話がずれてきている気がしないでもないな、とレゼルは思った。」

まだ「でも、構築に対して桁違いに簡単な消失が苦手な創造術師っているの？」とか「それはまあ、世界に一人……いや五人？ 人数なんてどうでも良いよ、とにかく世界を探せばそういう創造術師もいるだろうけど」などと呟いているミーナの言葉を止めたのはルイサだった。

「ミーナ、コイツが消失が苦手、という事はない」

「何で？」

ミーナが非常に子供っぽい口調で訊ねる。

さつきから、というか初めて見たその時から、学院長の性格にはちよつと問題があるのではないかとレゼルは感じていた。ミーファには悪いけれど、この親にしてこの子あり、とは天地が引っくり返っても肯定出来ない。

「猫」を被っているという事を多分わざとバレバレにしている所が、特に。

「実は私は、実技試験の前に少しだけだがレゼル君の実力を見ている。それで分かるが、彼は消失を苦手になどしてはいないよ。さつきの消失のときは試験でも何でもないんだから、手を抜いたんだろう……そうすると、構築が異常に速かったのが疑問だが」

ルイサは淡々と言った後、首を捻る。

レゼルは控えめに笑って、種明かしをしても良いかと考えた。

「エネデイス先生の言う通り、俺は消失が苦手とかいう訳ではありませんよ。消失に手を抜いたのは事実ですが」

別に戦闘中や試験中ではないのだから、真剣にやる人なんていない。消失は失敗する事が少ないし、失敗しても創造物が消失しなかつたりするだけで、身体に影響を与える事はない。

ふいに、右肩に小さな重みが乗った。ちら、と視線を向けるとセレンが寄っ掛かってきて安らかな寝息を立てている。眠気が限界を突破したらしい。

まるで子猫のような可愛らしい寝顔にレゼルは口元を綻ばせた。

彼の隣で、彼の表情を見て不機嫌そうな顔をする少女がいる事にも、全く気付かないまま。

だが、前に視線を戻したレゼルはルイサのニヤけた表情には気付いた。今となつては遅いが、セレンを彼女の補佐役にしてしまったのはかなりの判断ミス、としか言いようが無い。

ルイサの浮かべた笑顔（？）は、レゼルの微笑ましい笑顔とは方向性が全く違うもので、レゼルは危機感を抑えきれなかった。

「あの剣はですね」

ちよつと不意を突いてやろう、とレゼルはニコニコと笑いながら（但し、目は笑っていない）、ルイサに右拳を突き付けた。

セレンに釘付けだったルイサはぎよつとして水色眼鏡の奥の瞳を見開いた。

しかし、流石は学院教師の創造術師。すぐに立ち直り、レゼルの拳が顔にめり込む前に『物』の創造を行使。彼女の手かけらうに陽炎のような空気の揺らぎが生まれ、それが小型拳銃の形をとっていく。

が、レゼルの拳はルイサの顔に触れるどころか、彼女の顔から二十センチ程も距離がある所でピタツと止まった。

しかし、ルイサは拳銃の創造を断念し、掌の上の融合体を霧散させた。

「この剣、ライトセーバーは、構築スピードに特化した創造武器なんですよ」

ルイサの顔と、レゼルの拳。その間の距離、二十センチを埋めるのは、実技試験でレゼルが創造した青く透き通った剣だった。

但し、刀身はかなり短めになっている。

鼻先に迫る刃に、ルイサは創造術を諦めたのだった。実技試験では男子生徒を気絶にしか追い込まなかったが、この剣には殺傷力があるとルイサは一目見た時から分かっていた。だから、ミーナは男子生徒が倒れた時に一瞬だったが殺害を疑ったのだ。

「構築スピードに特化した……？」

訝し気な、けれど驚きは完全に消えたルイサの口調。

ルイサはレゼルの髪と瞳が銀色と青色に変わっているのを確認すると共に、彼の表情も読み取っていた。

彼の表情には、一欠片も殺意がない。目の笑っていない笑顔を浮かべてはいるものの、それは何処か演技チックだった。

レゼルを観察する目付きになったルイサ、無邪気な子供っぽい表情で愉しそうに笑うミーナ。（ミーナは童顔という訳では決してないので、その表情には少しだけギャップがあった。といっても、あ

くまで少しだけ、なのだが。」

そして、一様に驚きを表しているミーファ、晴牙、ノイエラ。彼らを眺め、レゼルは「光剣」をルイサの眼前から外した。

「君は本当に面白いね。奇襲、プラス、ルーちゃんが美少女の寝顔に気を取られていたといつても、《董》バイオレットに勝ってしまうなんて」

ミーナが心底上機嫌な様子で言った。

ルーちゃん、とはルイサの渾名あだなだろう。ルイサには果てしなく似合わないが、ミーナが口にするだけなら果てしなく似合う。

そして《董》とは、ルイサの二つ名、《董の創造術師》バイオレット・クリエイターの略称だ。

「いや、ミーナ、私は負けてなどいないぞ。確かに『物』の創造は諦めざるを得なかったが、あそこからどうにでも反撃に転じる事は出来」

「あそこから、ならね。それはレゼル君が剣を止めてくれたから、だよ」

ルイサの反論をミーナは容赦なくぶった切って捨てた。

「本当の実戦なら、ルーちゃんが『物』の創造をしようとする前に首が飛んでたね」

「じ、実戦ならば気を抜いたりはしない」

「今は、レゼル君だけが実戦の気分だった場合、って話をしてるんだよ」

言い合う二人を見てみると、彼女達は学院でも仲が良いのかもしれない、とレゼルに思わせた。

「お母さ……じゃない、学院長。それに、エネデイス先生。今はレゼル君の話を聞きましょう。レゼル君、その剣が構築スピードに特化してるって、どういう事？」

流石は一年代表、というべきか、ミーファが生徒の中で逸早く立ち直った。

レゼルは横で眠る小柄な少女を起こしていない事を確かめると、右手に握っていた「光剣」をテーブルの上に置いた。消えてしまわないように、レゼルは融合体を常に剣に送り込んでいる。

「構築スピードに特化している、ってというのは、理屈は簡単だ。まず、この剣の刀身は何でできてる？」

「何で、って……」

レゼルの質問に、先程まで「光剣」を興味深そうに眺めていた晴牙が考え込む。

「……見る限り、光、というか、レーザー光が剣の形になったみたいな」

「ああ、正解だ、晴牙。この剣 「光剣」は、刀身が光でできてる。光粒子の圧縮体、と言っても良い」

「……成程」

ぼそり、と低い声でミーナが呟く。どうやら彼女は剣の性質が分かったようだ。

しかし、レゼルは無視して説明を続ける。

「じゃあ、刀身の光は何の光だと思う？」

「それは一つしか無いだろう。星の光だ。エネルギーと同調させ、創造物の元となる融合体になる」

即答するルイサ。

だが途中で彼女も正解に辿り着いたのか、ハッと目を見開いた。

「はい、そうです。刀身は融合体の中にある光で構成されています

まあ、光だけというより融合体そのもの、ですね。つまり、普通の創造物の構築なら融合体を外に引つ張り出してから実体を持たせないといけないのに、「光剣」は刀身の部分に実体を持たせなくて良いんです」

ルイサからの発言があつた事で敬語になる。

レゼルはテーブルの上の青く輝き透き通る刀身を持った剣を見詰めて、更に言葉を紡いだ。

「柄の部分は握る為に実体を持たせる 触れるようにしないといけません、刀身は融合体を圧縮して剣の形を象るだけで良い。これで、構築工程を大幅に省略する事が出来ます。勿論、剣の性能を少しも劣らせずに」

「……あ、そつか。刀身は融合体そのものだから、普通の剣を創造するように鉄や合金の成分を創り出す必要が無いのね」

納得したわ、と付け足して頷くミーファ。

晴牙やノイエラも、疑問が解消された、といったような顔だ。

「……で、これは……」

レゼルの囁くように小さな声。

彼は「光剣」を再び手にすると、徐に腕おもむこを上あげていき

「っ!?」

「きゃ……!?!」

自分の首に、「光剣」の青く輝き透き通る刀身を突き刺した。ブスリ、という非現実的な擬音が聞こえてきそうな程、深く。ミーナとルイサは平然としているが、他の三人はぎょつとした。ノイエラに至っては縁無し眼鏡の奥でぎゅうつと目を瞑っている。

「……えと、そんなに驚くなよ。俺なら大丈夫だから」

「そんな事言っちゃってお前、剣に首が刺さって……」

「晴牙、落ち着け。逆だ。それに、言っただろ? この剣の刀

身は融合体なんだ。それも、俺の融合体だ」

「……あ……」

晴牙だけじゃなく、ミーファやノイエラも声を漏らした。

彼らは青い光の刀身に貫かれたレゼルの首を見る。血は一滴も流れていないし、勿論彼の体内に影響を与えている事も無い。

「俺の融合体が俺の身体の中に入っただけなんだ。ダメージを受ける訳ないだろ?」

レゼルは「光剣」を自身の首から引き抜きながら、そう言って笑った。

その光景を見て、ミーファが、

「で、でも、心臓に悪いわ。もう止めて欲しいわね」

本当に安堵したように胸を押さえる。

「そうですね……」

ノイエラも苦笑を浮かべている。

そんな少女達にレゼルは謝る事しか出来ない。

「あの、レゼルさん」

「ん？」

ノイエラが肩までの髪を揺らしてミーフア越しに視線を向けてきた。

「じゃあ、実技試験で男子生徒の先輩が倒れたのは……」

「ああ、それか。それも簡単だよ。俺の融合体をあの先輩のエネルギー脈に流し込んだだけだ」

エネルギーが暴走する、という程の量ではない。が、それはつまり、流し込む融合体の量や性質を調整すれば人を殺める事も十分可能である、という事に他ならない。

この、自分の融合体を相手のエネルギー脈に流し込む、という技術は刀身が融合体そのものの「光剣」だからこそのものである。

しかし、この「光剣」にも弱点がある。

まず、維持する為の融合体が、他の同じサイズの創造剣と比べて倍程も多い。それは、鉄や合金などの成分に構築する普通の創造剣に対して、刀身が融合体ままの「光剣」は、その融合体を圧縮して剣の形に抑え込むのに少々多めの融合体が必要になるからである。それ故に集中力や体力も欠かせない。

だからレゼルは「光剣」をあまり創造したままにして置かない。役目が終わったらすぐに消失させる。

次に、物は壊せない事。創造術で創った物なら融合体を流し込むという方法で壊せるが、他の物は無理だ。「光剣」は刀身がすり抜けるから、攻撃手段が融合体を流し込むという一つしか無いのである。エネルギー脈の無い物に使ったって効果は一切無い。

三つ目に、融合体を流し込む作業は思ったよりも難しい。特に、相手のエネルギー脈にピンポイントで流し込み、暴走させないよう量を抑える事が。

融合体は取り込む星の光の量・性質によってもその性質が変わる

が、エネルギーのそれを変える事でも同じ事が可能だ。

しかし、そのエネルギーによる融合体の性質改変・調整は一流の創造術師でも難しい。

融合体としてのエネルギー消費がばかにならない「光剣」を軽々と維持し続けてしまうレゼルは、やはり実力があると言わざるを得ないだろう。ただ、「光剣」のエネルギー消費が多い事は皆知らないの
でこの事は誰も認識出来ていない。

「融合体を流し込んでエネルギー脈を乱れさせる、ですか。凄いですね」

ノイエラが感嘆の声を上げた。

「使い方によつて危険度がかなり左右される創造武器だな、「光剣」は」

眼鏡の位置を直しながら、ルイサが言う。

「そうですね。でも、創造術師との戦闘はこれが一番便利なので」
レゼルは剣を胸の前に掲げた。

それを構成している融合体の二つの成分を分離させるイメージを考える。ぱっ、と剣は一瞬で消え失せた。

彼の銀髪碧眼が、《雲》の象徴 否、忌むべき特徴である灰色と漆黒に変わる。

「……それと、念の為聞きますが、実技試験の相手の先輩は大丈夫ですか？」

「それは問題無いよう、レゼル君。ちゃんと保健室に運んだし、ただ意識を失つてるだけ」

答えたのはミーナだった。彼女が、「光剣」に殺傷力がある事を知っているからだろう。

「……明日には、何時も通り授業に出られるよ」

「……」

「……レゼル君？」

「いえ、そうですね。それなら良かったです」

学院長にニコリと笑い掛ける。

流石、学院長とは名ばかりではない。

彼女は学院の中の事は全てを把握している。だから、当然のように気付いている。

ちよつとだけ動きづらくなるな、とレゼルは頭の片隅でどうでも良い事のように考え、隣で可愛らしい寝顔を晒す緋色の髪の少女セレンを見て、表情を弛ゆるませた。

ミーファが小さく頬を膨らませ、彼女の様子　　というか気持ち
を既に勘付いている晴牙、ノイエラ、ミーナ、ルイサは四人揃って
呆れた顔を浮かべた。

勿論(?)、レゼルは一切気付かない。

「ちよつとおかしいでしょ！　どうしてレゼル君とセレン……ちや
ん、が同室な訳!？」

リレイズ創造術師育成学院は全寮制だ。

だから、生徒達はこんな遅くまで実技棟で訓練が出来るのだ。

寮のロビーは五つの場所に繋がっている。

右に行けば女子寮、左に行けば男子寮。奥に進めば食堂と大浴場
大階段を上って二階にはかなり広い多目的ホール。

因みに、ロビーからではないが、寮に来るまでの渡り廊下は本校
舎、実技棟、講堂、図書館などの各施設にも繋がっている。リレイ
ズ創造術師育成学院は渡り廊下で殆どの施設が行き来出来ると考え
て良い、とミーナに教えてもらった。

教師も寮の部屋で生徒達と同じような生活をしているので、ロビ
ーでは必然的に右にはミーファ、ノイエラ、ミーナ、ルイサ、セレ
ン、左にはレゼル、晴牙と二つに別れるのだが

「まあまあ、別に良いだろう、ミーファ。レゼル君とセレンが同室
でも」

今は、右ではなく左にセレンがいた。正確には、彼女は今寝てい

るのでレゼルが抱えている状態だ。

訳あって一緒にいなければならぬ、という事を言っているルイサが何故か激怒しているミーファを宥めてくれている。だが、「別に良くないわよ！ おかしいわ、女の子が男子寮なんて！ よりにもよってレゼル君の部屋なんて！」

「ミーファ、とりあえず落ち着いてくれ。えつとだな、俺とセレンは極力近くにいななければならない、というか……」

レゼルも声を掛けるが、ミーファの様子は収まりそうもない。

一年代表として学院の風紀とかを気にしているのかもしれないが、その辺は心配無用だ。レゼルとセレンはそういう関係ではない。

「近くについて、セレンちゃんつてもしかして身体弱いのか？」

「え？ あ、ああ……うん、ちよつとな。だから誰かが傍にいないといけないし、それは俺が一番慣れて」

「傍にいれば良いのね？ じゃあ簡単よ、セレンちゃんは私の部屋にすれば……」

晴牙とレゼルの会話を聞いて、解決の糸口を見つけたように瞳を輝かせるミーファ。

「何言ってるの、ミーファ。この前、部屋が創造祭の備品で混沌カオスになってるって言ってたよね」

しかし、悪魔の笑みと共にミーファの言い分はあっさりと潰される。

学院長は娘にも甘くない、という事か。

「う……」

「し、仕方ないですよ、代表。今日はもう遅いですし、部屋に戻りましょう」

ノイエラがミーファの制服の袖を引っ張る。

「そうだよ、ミーファ。ノイエラちゃんの言う通り。それに、ミーファが心配しているような、所謂いわゆる？間違いつて奴は起こらないよ」「そうだな。レゼル君は鬼畜には見えないし」

「レゼルとセレンちゃんが恋人同士だったとしたら、まあ、そーい

う事もあるだろうけど、それはそもそも？間違い？ではなく？合意の上？だし」

ミーナとルイサと晴牙の言葉が火に油を注いでいるようにしか聞こえないのは、果たしてレゼルだけだろうか？

「ハルキ！ たとえ、ご、ごご合意の上でも、サンクチュアリ聖域と呼ばれる学院でそういう行為に及ぶのは退学ものよっ！」

「まあまあ、代表。今日はもう戻りましょう」

「え？ ちよつとノイエラ、押さないで！ 私はまだ話が……」

ノイエラに押されて、途中からは襟首を掴まれて引っ張られていくミーファ。

右の廊下に二人が消え、ミーナとルイサもレゼル達に軽く挨拶をして後に続く。

「あ、そうそう、レゼル君」

レゼルと晴牙も背を向けようとした時だ。

ミーナが足を止め、こちらを振り向いてきた。

「何ですか？」

「明日の朝、学院長室に来てくれるかな？ 編入生として色々話があるから。あつ、学院長室は本校舎の最上階だよ。本当は今日中に済ませたかったんだけど、元々遅い時間だし、さつきは皆がいて話もずれちゃったしね」

「はい。分かりました」

「うん。それじゃ改めて、お休みなさい」

学院長は踵を返して歩き出すと、後ろ手に手をヒラヒラと振った。

「代表、どうしたんですか？ 編入したばかりの殆ど初対面の男性ひとにそういう気持ちを抱くなんて」

女子寮側の階段を上りながら、ノイエラは幾らか落ち着いたミーファに声を掛けた。

「……初対面じゃないわ」

「え？」

「昔、レゼル君に助けってもらった事があるの。彼は覚えていないよ
うだけど」

不安気に金髪のポニーテールを揺らしながら付いて来るミーファ
を振り返って見下ろし、ノイエラは目を丸くした。

「そ、それ、まさか、前に言っていた初恋の男の子ですか……！？
こくん、とミーファが頷く。

「キヤーツ、凄いじゃないですか！ 再会したんですよねっ？ 運
命的です、とても！」

「……でも」

「……セレンちゃんの事ですか？」

「……仲、良さそうだったわよね」

「だ、大丈夫ですよ！ エネデイス先生が言っていましたけど、あの
二人は恋人って関係じゃないみたいだって」

「ほ、本当なの？」

「はい。レゼルさん本人が否定したようですよ」

「ぱあ、とミーファの表情が明るくなった。

「そ、そっか。ありがと、ノイエラ。心配掛けちゃったわね」

「ふふふ、どういたしまして」

そして、ノイエラもまた笑顔になるのだった。

「じゃ、ここがレゼルの部屋な」

男子寮の四階に上がってきたレゼルは、一フロアにある部屋の数
に既に驚かなくなっていた。

考えれば当然だ。階ごとに学年が違う構造なので一つの階に二百
五十以上も部屋があるのだから。

レゼルが晴牙に案内されたのは一番奥の部屋。勿論、かなり遠い。

「ま、仕方ないぜ。空いてるのは奥の方しか無いからな」

「ああ、うん。それは分かってる」

「慣れればそうでもないけどな、この距離も」

晴牙が廊下の先を眺める。女子寮との境界線は壁で塞がっていた。彼は副代表という事で入学時、一番奥の部屋にさせられたらしい。何か起こった時に状況を把握しやすい位置にしたのだろう。

つまり晴牙の部屋はレゼルの一つ手前だ。

「じゃ、何かあったら遠慮なく呼んでくれ。俺は部屋にいるから」
「ああ、ありがとな」

晴牙が自分の部屋に入ってしまったのを見送り、レゼルも自分の部屋に入った。

靴を脱ぎ、セレンのベージュ色ブーツも脱がせてやる。ブーツを床に置くとき、微かにカツンと音がした。

部屋の中は誰かが予め掃除をしてくれていたのか、綺麗だった。汚れている所など一切無い。

レゼルは腕に抱えたセレンをベットに降ろし、備え付けの毛布を掛けてやる。

寮の部屋は全て一人部屋。ベットも勿論一人用なので、セレンが使うとなるとレゼルはソファの上で寝るしかない。

「……いや、ベットが二人用でもベットで寝る気は無いが」
独り言を呟いて、レゼルはコートを脱いでソファの背に引っ掛ける。

部屋の一つ一つに風呂場があるのは嬉しい。今日はまだやることがあるので風呂に入る。というかシャワーを浴びるのは明日の朝にしよう、と考えながら、レゼルはソファに寝転がった。

「……レゼル」

鈴の音を転がすような声がレゼルの名を呼んだ。

「何だ？ セレン」

彼女が起きていたのはコートを脱いだ時から分かっていた。ソファに寝転がったまま、レゼルは応える。

「……良いんですか？」

「何が？」

「……」

セレンが言いたい事は分かっていた。それで、敢えてとぼけて見せた。良いのか、と言われても選択肢は一つしか無いのだから、ちやんと答えたとしても「これで良い」にしかならない。

「……本当の事を、言わなくて、良いんですか？」

今、セレンはどんな表情をしているのだろう。きつと何時も通り無表情な筈だ。そう思うのに、彼女の声に含まれた僅かな震えとレゼルへの気遣いが、彼女の悲しそうな顔を想像させてしまう。

「俺は自分の事がよく分かっている。レゼルはそう言いましたね」

「……聞いてたのか」

「はい。その時はまだ起きていましたから。……嘘を吐くには、もう躊躇いはありませんか？」

「当たり前だろ。今日だけで何回嘘吐いたと思ってるんだ。自分の事がよく分かっているじゃない、なんて嘘を当然のように吐けるくらいには、十分な覚悟をとくにしている」

「そうですね。それなら、良いです。私もここで頑張れます」

「それに、学院長も嘘吐いてたしな」

「学院長も、ですか？」

「ああ。実技試験の時の相手の先輩　先輩、なんて思っちゃいな
いかな　は、明日には退学だろう。なのに学院長は『明日には普通に授業に出られる』なんて言っていた」

「……退学？　では、あの男子生徒が……」

セレンが少し吃驚したような声を出す。いや、実際、吃驚したの
だろう。

「運が良いのか、悪いのか。あの先輩から見れば悪いだろうが」

皮肉っぽい口調でレゼルが呟く。

「あ、そうだ、セレン」

「何ですか？」

「エネデイス先生には気を付けるよ、頼むから」

「……？ はい、分かりました。何を気を付ければ良いのかは分かりませんが」

レゼルの背後でソファの背越しにセレンがベットのの中から出る音が聞こえた。

彼女はソファの背に手を掛け、レゼルを見下ろしてくる。

「お休みなさい、レゼル」

セレンは無表情。けれどその声は温かい。

レゼルは悪戯っぽく笑って、

「ああ、お休み。三十分後には起きるけどな」

セレンがベットの上に戻ったのを気配と音で確認して、瞼を閉じた。

第4話 嘘（後書き）

脱字・誤字等あったらご指摘下さい。感想も待ってます。

今回はモノローグ等で意味不明な所があったかもしれませんが…

…って、これは毎回ですね。

第5話 〈曆星座〉

瞼を閉じてから、ちょうど三十分後。

レゼル・ソレイユは、眠気により重くなっている瞼を無理矢理押し開けた。

静かに上半身を起こして、後ろのベッドに視線を向ける。

そこでは、緋色の髪の少女　セレンが慎ましい（小さい、とも言う）胸をゆっくりと上下させていた。

出来れば彼女を起こしたくはなかったが、これからやる事は今日中に終わらせておきたいので、そういう訳にもいかない。

「セレン、起きてくれ」

レゼルが一言声を掛けただけで彼女は目を覚ました。その目元には眠そうな感じは無い。

「悪いな、セレンはいつも早起きしているのに」

彼女は毎朝、レゼルの為に朝食を作ってくれる。（朝、と言ってもも外の様子は夜のままだ。）

だからセレンは早寝早起きで、眠くなる時間も彼女は早い。

「いえ、大丈夫です。早起きしているのも、私の勝手ですから」
ベッドから降り、セレンは首を横に振る。

その仕草にはやっぱりレゼルへの気遣いとか、そういう気持ちが表情は無いながらも含まれていて、それを感じ取ったレゼルは優しい気持ちになった。

「ありがとな、セレン。じゃ、行くか」

レゼルは立ち上がってソファの背に掛けたコートを手に取り、そのポケットに小さな四角い物が入っているのを確認した。

彼のその動作は一瞬だったが、セレンは見逃さなかった。

「あの衆人観衆の中で誰にもバレずに奪い取るなんて、流石レゼルです」

「それは、誉められているのか、貶されているのか……」

「誉めているんですよ。今日　いえ、もう昨日ですね　の引つ
たくり犯ですが、よっぽどレゼルの方が合ってます」

「俺には貶されているようにしか聞こえないが」

引つたくり犯が合っているってのは、性格とかそういう事じゃな
くて、物を掏^スる技術的につて意味だよな？　と、ちよつと不安を覚
えながら考えた。

だが、ノンビリと考えている時間は無いのだった。

「つたく、あの我が儘石屋め……」

レゼルは心底面倒臭そうに悪態を吐き出すと、静かに寮部屋を出
た。

創造術^{クリエイト}で要^{かなめ}となるのは融合体である。

では、融合体の要は何なのかと言うと、勿論終わり無き夜空に煌
めく星の光と人間の中を流れるエネルギーだ。

エネルギーを上手く制御出来るかどうかで創造術が上手くいくかが
決まる点を考えると、その二つの内でもエネルギーの方が融合体の要
と意識してしまいがちだが、どちらかと言うと要は星の光の方だっ
たりする。

勿論、融合体を創る為に星の光とエネルギーは同じ割合で同調^{シンクロ}させ
る事が望ましいので、どちらも大切、要だと十分言えるのだが。

星の光はエネルギーのように制御出来ない。エネルギーを上手く星の
光に同調出来るかは実力要素一つだけに左右されるのに対し、星の
光はその光の明るさや天候、星が雲に掛かっているかないかなどの運的
要素と、上手くエネルギー脈に光を取り込めるかの実力的要素の二つ
で決まる。

ここで大事なのが、運的要素である。

どれだけエネルギーの制御が上手でも、土砂降りや星の光が全く届
かなければ、創造術の効果は半減　否、それ以下になってしまう。

だから、殆どの実力ある創造術師クリエイターとはある保険を掛ける。

例え、星の光が全く届かない闇に包まれた日でも、安心して創造術を行使出来るように。

その保険。

それは、星と契約を結ぶ事。

いや、星座と契約を結ぶ、と言った方が正しいか。

神聖な儀式を経て、創造術師は自分に合った星座と契約する。

そうして契約した星座を《ガーデン星庭》と呼ぶ。

現在、世界にある星座の数は八十八個。その中から、ある程度実力を持った創造術師は、自分の《ガーデン星庭》を選ぶ事になる。

《ガーデン星庭》は、創造術師と結ばれる事で、創造術師に沢山のメリットを与える。

一つ目がまず単純に、創造術の効果が高くなる。『物』でも『能力』でも、どんな創造でも。

二つ目が、《ガーデン星庭》のそれぞれにある固有技や特殊な創造が出来るようになる事。例えばオリオン座と契約して《ガーデン星庭》としたら、同時に三つ以上の創造を行う多重創造マルチがやり易くなる、といったような効果が出る訳だ。

三つ目が、先程も述べた通り、星の光が全く届かない日・場所でも、《ガーデン星庭》としていている星座の星の光だけなら、契約した為の不可視の繋がりにより術者に届いて、星の光が届いている時と殆ど変わらずに創造術を行使出来るのである。しかしそれでも、晴れた日の方（雲が星を覆っていない方）が《ガーデン星庭》としていない星からも光を集められるので、《ガーデン星庭》さえ持っていれば真つ暗でも絶対安心という事は決して無いのだが。

そして大事なのが、《ガーデン星庭》は一人の創造術師に一つだけだという事。

これは、一つ一つの星座が特徴みたいなものを持っていて、複数の星座と契約すると反発する　というより、反発して契約出来ない。

相性の良い星座同士なら複数契約も可能なのではないか、と言われているが、まず相性の良い星座同士という奴が見付かっていない。星座は全部で八十八個しか無いのだから、既に沢山の創造術師が全ての組み合わせパターンで複数契約に挑戦して例外無く全て失敗に終わっている。そういう経歴があるから、複数契約については出来ない技術と定められている。

創造術師に《星庭》は一つまで。だが、星座の方はそうではない。例えば先程名前を出したオリオン座ならば、軽く一万人は超える契約者を有しているだろう。だから「あ、私と貴女の《星庭》同じだね」という事も十分起こり得る。

だが、契約者を一人に絞る特別な星座もあつた。それは《曆星座トユウェルブ》と呼ばれ、八十八の内十二個しか無い星座だ。

突然だが、この世界は一年に三十日ある月が十二個ある。冬で第十一の月である今月は、俗に 双子月ふたごつき と言われる。このように、一つ一つの月には星座の名前が付けられているのだが、この月に名前を刻まれた十二個の星座が《曆星座》なのだった。

《曆星座》は契約者をたった一人に限定する。更に、契約の儀式の際に契約者を星座の方が選ぶ。(ある程度実力が無ければどの星座でも駄目なのだが、《曆星座》には実力以外にも契約者になれる条件があるらしい。)

そうして、《曆星座》に選ばれた十二人しかいない創造術師の事もまた、《曆星座トユウェルブ》と言うのだった。

「まさか、編入試験の日から《曆星座》を三人も拝めるとはな」
レゼルは学院の門の近くにいる監守をどうやり過ごそうか思考しながら、ポツリと呟いた。

今、彼とセレンは気配を消して息を殺し、本校舎の昇降口から校門に伸びる幅広の石畳の道の両脇にある街路樹の陰に身を潜めてい

た。

セレンは監守の様子を窺うレゼルに向かって小声で問い掛けた。

「三人……ですか？ 学院長さんとミーファは分かりますが……あと一人は誰ですか？」

レゼル以外には基本的に人の名前には敬称を付けるセレンだが、何故かミーファの事は呼び捨てだった。

その事が少し気になったが、レゼルは詮索しない事にした。もしかしたらミーファの事が気に入ったのかもしれない。（その逆はレゼルでは気付けなかった。）

「エネデイス先生だ。まあ、あの人は俺も二つ名を聞くまで気付かなかったし、仕方ないな」

「エネデイス先生が、《暦星座》……」

「彼女は学院長やミーファ程有名じゃないからな。あの二人はリレイズってのもあるし」

天才の呼び声高い創造術師、ミーナ・リレイズ。

神童と言われ期待を一身に集める創造術師、ミーファ・リレイズ。

二人共、《暦星座》に選ばれた、普通の一流創造術師とは一線を画す優秀な創造術師である。

そして、彼女達程には名前が世間に出回っていないとは言え、ルイサ・エネデイスも《暦星座》の一人である。

その証拠に《暦星座》としての二つ名、《バイオレット・クリエイター董の創造術師》は有名過ぎる程有名だ。

《暦星座》の二つ名には色を表す言葉が入る。ルイサは董、バイオレットつまり紫の名を冠している。

もうこの世界にはいないけれど、レゼルの姉、レミル・ソレイユも、《シルバリー・クリエイター白銀の創造術師》、銀の名を冠する《暦星座》だった。

彼女の契約していた《暦星座》の星座は、彼女が死んでから空白のままだ。恐らく数え切れない人数の創造術師が契約儀式に挑戦しているのだろうが、成功したという話は一切聞かない。

だから現在、《暦星座》は十一人しかいないのである。

勿論、十二人目の《曆星座》が自分の事を隠している、という可能性もあるにはあるが。

「……で、監守だが、昏倒させるとかはしたくないんだよな」

監守に何も干渉しなくてもコッソリ学院の外に出られるならそうしたい。というか、後々面倒なので絶対しない。

セレンも同意見のようで、そうですね、と小声で囁いた。

「さて、じゃあまずは……」

レゼルは校門から視線を横にずらした。そこには、実技棟の壁と同じ強化素材で作られた壁が聳^{そび}えている。（こちらは実技棟のように無骨な感じではなくて、城壁のような雰囲気だ。流石に見目を気にしたのだろう。）

学院は高い壁に囲まれているのだ。外からでは本校舎の上部しか見えない程の高さがある。

「あれを越えるか」

レゼルは何でもない事のように言い、セレンも何でもない事のように頷いた。

二人は街路樹の陰から離れ、門の近くにある監守の為の宿舍を注意深く見ながら、壁に近付いた。

「警備員は？」

「この時間は外の警備は比較的疎かになるみたいです。大丈夫です」

「ありがとう、セレン」

レゼルはセレンの小柄な身体を抱き上げた。

「じゃ、行くぞ」

声を掛けると、腕の中の少女は自分の右手首を見た。そこには、ピンク色の可愛らしい腕時計。

「今、二時少し前です」

「ギリギリだな」

レゼルは学院の門の外で待っているだろう人を思って、眉を顰めた。

だが、ぐずぐずしている訳にはいかない。

彼の灰色の髪と漆黒の瞳が銀色と青色に変わる。
音も無く、彼は少女を抱えて地を蹴った。

学院の外。

駅に続く大通りの両脇に並ぶ店と店の間、その人気のない場所に
彼女はいた。

彼女を見てまず目を見張るのが鮮やかな水色の髪だ。勿論地毛で
はない。

背は低く、童顔なので精々十代になったばかりの少女にしか見え
ないが、彼女は十六歳のレゼルより十も歳上だったりする。歳の話
をすると「ロリで悪かったね? (怒)」と起こられるのでその話題
は禁止だ。

普通のロリなら「若く見えるでしょう?」とかも言えるのだが、
彼女の場合、背が低くて童顔の癖にプロポーションがかなり良いの
である。特に胸が。

彼女は栄養が背の高さではなく胸の大きさにいってしまった、中
途半端なロリなのである。(という表現が適切な容姿だとレゼルは
思っている。)

そんな可哀想(?)な見た目ロリの女性は、酷く不機嫌な顔でレ
ゼルとセレンを迎えた。(既にセレンはレゼルの腕の中から降りて
彼の隣に立っている。)

「……遅いよ、レー君?」

長い水色ツインテールの髪(この髪型がロリに拍車を掛けている
とレゼルはいつも思う)を弄りながら、彼女は低い声で言った。

因みに、レー君とはレゼルの事だ。精一杯抵抗した時期もあった
のだが、既に渾名の訂正をするのは諦めている。

「貴女が来るのが早いだけでしょう」

レゼルは彼女の前で止まると素っ気なく言い返した。

「ちよつとレー君、あたし女の子だよ？ 女の子の方が早く来ておおかしくないかな？ レディーファーストの意味、勘違いしてない？」

「集合時間は二時にしたと記憶してますが」

「……」

はあ、と女性（少女にしか見えないが）が溜め息を吐いた。

「まあ、いいよ？ あたしは優しいからね？ それじゃあレー君、奪った物、渡してくれる？ 三十分前くらいに赤毛ちゃんから連絡もらったけど、上手くゲット出来たんだよね？」

「セレン、緑さんと連絡取ってたのか？」

「はい。レゼルが眠った後に。その方が良いかと思って……余計な真似、でしたか？」

「いや、そんな事はない。ありがとう、セレン」

レゼルはセレンの頭を少し不器用に撫でた。彼女は相変わらず無表情だが、レゼルを見上げる緋色の瞳が嬉しそうに見えた。

「ちよつとー、そこのお二人さーん？ いちやつくなら他でやってもらえませんかねー？ つか何度も言ってるけど、レー君、あたしの名前『緑』じゃないよー？」

水色ツインテールの女性が白い目を向けてくる。

しかし、レゼルにもセレンにも、自分達がいちやついているという自覚は更々無かったので彼女の発言はスルーした。

「じゃあ緑さん、頼まれた物、持って」

「ちよつと？ 『緑』さんじゃないから、あたし？ そこはスルーしちゃ駄目じゃないの？」

来たんですけど、と言う前に女性が口を挟んできた。

余程『緑』さんと呼ばれるのが嫌らしい。まあ、そんな事はとっくに知っていたけれど。

「じゃあ何て呼べば良いんですか？」

「普通に名前で呼べば良いって発想はレー君には無いのかな？」

「いや、だって名前が『緑』でしょう」

「違うよ!?! ……レー君、あたしの本当の名前覚えていてくれるよね?」

「……」

「何、その沈黙? あたし大声で泣いちゃうよ? レー君の事、不審者扱いするからね?」

「そんな事をすれば今から貴女に渡す筈だった物を学院長に渡しませよ」

「……」

彼女は口を噤んだ。口の端が小さく震えている。

レゼルを上目遣いで見る瞳が小動物みたいに弱々しく揺れていて、泣きそうではないけど可哀想にはなってきた。

「冗談です、ちゃんと覚えていきますよ。ルチアーヌ・セヴェリウムさん」

彼女の本当の名前を呼んでやると、ルチアは蕾が花開くように笑顔になった。

性格は少し幼い感じがするがそれは外見にぴったりだし、幼いからこそ素直な所は彼女の良い点だとレゼルは思う。だから彼女の事を嫌いにはなれないのだと、表面上どう嫌いですって素振りをしても彼女の笑顔を可愛いなあ、と思ってしまうたレゼルは再認識した。しかしその感情を表に出すのは癪なので、レゼルはポーカーフェイスを保ったままだ。

彼は自分が羽織っているコートのポケットから小さな四角い物を取り出した。

それは立方体の形をした石 結晶、と言っても良いかもしれない。 だった。透き通った黄色の石はその中心で、とくん、とくんと光が瞬いている。

これは《融合結晶》とか《フューズ・クリスタル》とか言われる物だ。

その名の通り《融合結晶》は、星の光とエネルギーが同調した融合体が結晶に凝固した物。それは創造術師が人工的に創る物ではなく

て、完全な自然物だ。（創造術師も《融合結晶》を創る事がやれば出来るそうだが、自分の融合体を凝固させて一々融合体を供給しなくても半永久的にそこにあるものにするには、かなりのエナジー制御力が必要になる。）

人間に流れるエナジーとは少し違うが、それに似たような力が大地の下　地脈とか竜脈とか言われる場所を廻っているらしい。それが時間を掛けて星の光を取り込み低確率で同調する事があり、そうして出来た融合体が凝固したのが《融合結晶》である。

エナジーに似た地脈を流れる力　地力が星の光と同調するのも、融合体が凝固するのも稀な事だ。何万分の一、という確率だろう。だから《融合結晶》は希少で、それ故に値段は少し裕福な程度の貴族なら手が出せない程高い。

《融合結晶》とは一言で言ってしまうえば、融合体の結晶だ。その効果は、一度だけと限定される使い捨ての道具だが、創造術師でもない一般人が創造術を使えたり、創造術師なら自分の創造術をサポートする役目に使える。

だが何せ値段が高いので殆どの創造術師は《融合結晶》などに頼ったりはせず、自分の創造術を磨くのが普通だ。それが求められる創造学院の学生創造術師は、^{アマチュア}《融合結晶》を使う事自体がきつく禁止されている。

「これで良いんですね？」

レゼルが訊くと、ルチアはコクコクと頷いた。水色ツインテールがその動きに合わせてピョコピョコと跳ねる。

「とりあえず、ターゲットが持っていた分は全部取ってきましたけど」

レゼルは更にポケットの中から、同じ形と色をした《融合結晶》を十数個取り出した。

ターゲット　これらの《融合結晶》を持っていた、実技試験で相手をしたナイフ先輩の事だ。

「一、二……十三、十四、十五……うん、ちゃんと十五個あるね？」

「ありがとうレー君、依頼は完遂されましたよー?」

無駄に語尾にはてなマークが付きそうな口調で《融合結晶》の数を確認すると、ルチアはレゼルからそれを受け取ってジャケットの懐に隠した。

ほかほかした顔で笑顔を向けてくる彼女に、レゼルは呆れた顔を返す。

「全く……何で学生創造術師に《融合結晶》を売ったんですか?」

「あー……それはね、仕方ないと思うんだ? あんな大金見せられたら、例え《融合結晶》を学生創造術師に売るのが違法だと知っても、売っちゃうと思うのよね?」

「何が『思うのよね?』ですか。……学院長、この事に気付いてましたよ。まあ、ルチアさんが関わってるとは気付いていなさそうでしたが」

レゼルの言葉を聞いてセレンが「そうなのですか?」と言うように見上げてくるが、当のルチアは全く動揺しなかった。

「だろうね? 天才だから、彼女は……まあ、それでも二年間、コバード家のお坊ちゃんが《融合結晶》を使っていると気が付かなかつたけどね?」

「コバード家の……?」

レゼルは眉を顰めて、《融合結晶》を回収してきて欲しいとの依頼を受けた時にルチアに渡された写真をコートの懐から取り出した。そこには実技試験の相手だったナイフ先輩の姿が写っていた。

彼がカメラ目線になっていない事から、これは隠し撮りされた写真だと分かる。

「コバード家のお坊ちゃんってコイツの事ですよね?」

「うん、そうだよ? 今回の依頼のターゲット……ああ、言い忘れていたかな? 彼がコバード家の人間だって?」

コバード家。

優秀な創造術師を代々輩出する、創造術の世界の名門だ。且つ、コバード家は大金持ちの貴族でもある。

これで納得した。ただの学生創造術師が《融合結晶》を手に入れられる筈が無いから、あのナイフ先輩は何かしらのパイプを持っているのだろう、とは思っていたが、コバード家ならば馬鹿高い《融合結晶》にも手を出すのも簡単だろう。

ルチアーヌ・セヴェリウムは《融合結晶》を扱う闇商人である。《融合結晶》が一般人には手を出し難いという特色を持つ商品であるから、それを扱う商人はどうしても商品流通の闇ルートに行き着いてしまうのだ。

ある理由から国交間でも《融合結晶》は広く売買が行われているので、国は《融合結晶》を扱う闇商人を甘く見ているという背景がある。（それでも学生創造術師に《融合結晶》を売る事は違法だ。）創造術の名門出身の創造術師は例外無く、国境を越えて活躍する。国交貿易と深く関わる《融合結晶》に手を出すのは、コバード家ならば造作も無い。

「成程な……」
しかし、一方で納得はしたものの、レゼルは小さく呟きながら疑問に思っている事があった。

実技試験で戦う事になった男子生徒。四年の先輩。
彼はコバード家の創造術師にしては、あまりにも

「ルチアさん。さっき、学院長にも二年間気付かれなかったと言いました、それは……？」

レゼルの思考に被るようにして、セレンがルチアに訊ねる。
ルチアはばつが悪そうな顔をして言った。

「……実は、コバード家のお坊ちゃんにあたしのお得意さんなのね？ 二年前からの常連さん、だったり？」

「……それで二年間、貴女はそのコバード家のお坊ちゃんとやらに《融合結晶》を売り続けていたと？」

静かな、淡々としたセレンの声。彼女は無表情だが、声には確かに少しだけ非難の色が含まれていた。

ルチアは、そんな十も歳下の少女の様子に困ったような顔をした。

「あたしだって、闇商人やってるとはいえ、常識が無い訳じゃない。最初、あたしは断った。学生創造術師に《融合結晶》は売れないって。……だけど彼は、コバード家の落ち零れだった」

ルチアの口調から、疑問符が消えた。

「あたしに接触してきた時、彼はとても必死だったの」

「必死、ですか？」

セレンが首を傾げる。

「……もう、《融合結晶》しか頼れるものが無いんだ、って。彼は、あたしにそう言った。それで思わず、ね？ まあ、大金に目が眩くらんだって理由もあるんだけどさ？」

ルチアの口調が元に戻り、セレンに曖昧な笑みを向けた。笑っているのにその笑顔には違和感がある。まるで、無理矢理作って失敗したような、引き吊った表情。

「まあ、自業自得だね？ ついに学院の長にバレちゃって、慌ててレー君に依頼したって訳さ？ コバード家のお坊ちゃんが持っている《融合結晶》を誰にもバレないように回収して、あたしが関わっていた事までバレないようにする依頼をね？ ミーナ・リレイズの情報網があれば《融合結晶》を見ただけで誰が売った物か分かるだろうし？」

レー君が学院に編入するって聞いて助かったと思ったよ、本当に？ と、付け加えてルチアは歪だった表情を消した。

成程、確かに《融合結晶》回収の依頼はレゼルが適任かもしれない。学院は聖域サンクチュアリ。闇商人であるルチアが入る事は許されないし、そんな事をすれば学院長に《融合結晶》の件で関わっていたと勘付かれる。

回収した《融合結晶》の受け渡しが今日の午前中と無茶苦茶な条件にしたのも、彼女は分かっていたからだろう。早くしなければ、学院長に気付かれると。

「まあ、天才に気付かれた所で面倒なだけなんだけど、ね？」

天才、とは学院長ミーナ・リレイズの事だ。

彼女を敵に回すという事は、並みの創造術師ならば棘み上がった
しまう程の事態だ。

だが、ルチアは彼女の存在を脅威に思っていない。
それは、考えてみれば、当たり前かもしれない。

彼女、ルチアーヌ・セヴェリウムも緑の名を冠する《曆星座》
《なのだから》。

どれだけ幼い外見でも、彼女は《曆星座》。創造術師の頂点に立
つと言って良い十二人の中の一人。

しかし、レゼルにとってそれは既知の事実であり、どうでも良い
事だった。

彼の思考は、今、セレンを傷付けようとした（正確に言えばそれ
は結果的に、に過ぎないが）、実技試験で戦った男子生徒に向かっ
ていた。

先程も感じた事だ。

彼はコバード家の創造術師にしては、あまりにも
弱過ぎる。

落ち零れだと言ったって、仮にも創造学院に入学出来た最高学年
の創造術師が、あんなに弱い筈が無い。

ああ、成程な。

しかし、レゼルはその疑問の答えを既に打ち出していた。

二年前からの常連さん、だったり？

それは、ルチアが言った言葉。

俺は、二年の時から『能力』創造が出来るんだぞ？

それは、あの男子生徒の言葉。

今から二年前と叫びたら、あの男子生徒はちょうど二年の頃じゃ
ないだろうか。

そこまで推測出来れば、自然と分かる。

あの男子生徒が、弱い理由が。

「『能力』創造が出来た事に浮かれて、頼ってしまっただけでしょ
うね、《融合結晶》に。そして、手放せなくなってしまった。だから、

「コイツは弱い」

手に持っていた写真を片手で握り潰す。それは次の瞬間、ボツと炎と音を立てて消えた。

炎の創造術。

レゼルの髪と瞳の色に刹那の間だけ変化が訪れたが、すぐに元に戻った。

「コイツは弱い……って、レー君、何でそんな事分かるの？」

ルチアのその問いに答えたのはセレンだった。

「レゼルと彼が戦ったからですよ、実技試験で。戦い、どこるか試合とも呼べないものでしたが」

ルチアはけらけらと笑う。

「当たり前だよ、それは？ 赤毛ちゃんは学生創造術師に力を求め過ぎじゃないかな？」

「そうなのですか？」

「そうだよ？ 今まで君達のいた環境には優秀なのがいすぎただけだね？」

「例えばルチアさんとかですか？」

レゼルが悪戯な笑みを浮かべながら言うと、彼女は本気で照れているようだ。た。

「レー君が、ほほ誉めてくれた……！？」

動揺した瞳がゆらゆらと揺れる。

そんな彼女には悪いが、レゼルはルチアを誉めたつもりなど更々無かった。

冷めた顔でルチアを見詰めると、彼女はわざとらしく咳払いをした。

「じゃ、じゃあレー君はその実技試験の時に《融合結晶》を回収したのかな？」

「はい。相手への攻撃で「ライトセーバー光剣」を振り抜いた時にどさくさに紛れて。正直、写真を頼りにターゲットを捜すのも面倒だったし、助かりました」

「レー君、実技試験の時、彼が出てこなかったらあたしの依頼すっぱかすつもりだったでしょう?」

「当たり前でしょう。編入試験の日の翌日の午前中がタイムリミットなんて無茶振り依頼、無い事にしようと思いましたがよ」

「……まあ、良いよ? 今日の所は許してあげよう」

何だかんだ言って、無茶振り依頼だったとルチアも理解しているんだろう。

「それに二年間でかなり儲けさせてもらったからね、満足かな?」

ぱちっ、と音がしそうなウイंकをするルチア。

どれだけ儲けたのかは知らないが、《融合結晶》の商人（「石屋」と呼ばれる）の中でも色々大きな客を抱えている彼女が「お得意さん」と言うのだ、かなりの額を懐に入れられたのだろう。

「……さっきまでは、コバード家の息子の事、結構心配してるように見えましたか? 何だか急にドライになりましたね」

コバード家なんか知らないよ? とか言い出しそうな顔で笑うルチアを見て、レゼルは無表情に訊ねた。

「ああ……うん、あたしもちよつとは悪かったかなって思ったよ? あたしが《融合結晶》を売らなきゃ、彼は地道に努力して今頃は強くなつてたかもしれないし?」

そこで彼女は言葉を切った。

変わらない笑顔を幼い顔に浮かべたまま、レゼルをしつかりと見上げてきた。

レゼルは彼女より頭三つ分程も背が高い。見上げられると彼女は殆ど夜空を仰ぐようになり、ツインテールが、ぷらん、と寂しげに揺れた。

そして、再び口を開く。

「でもね、考えてみたら、あたしに接触してきたのはあつちだよ? あたしは最初に売るのもちゃんと断ったし、悪いのは全面的にあつちじゃないかな? そりゃ、金に釣られて最終的に違法だと知ってても売ったけど、金をあたしの前に積んだのはあつちだからね?

何か、あたしが反省するのも罪悪感に駆られるのも違う気がする、今回の事はあたし、関係無いと思うんだよねー？」

何時も通りの、何故か疑問系で軽い口調。

そして何時も通りのレゼルなら、少しくらいは不快に感じていたかもしれない。彼女が責任感の強い人間では無いと知っていても。

だが、今は、彼女の言う通りだと思った。

それは、その思考は、随分個人的で感情的なものだったが。

レゼルが一片も不快感を見せなかった事を、ルチアとセレンは疑問に思っただけ。

セレンが口を開く前に、ルチアが首を傾げ、彼に問う。

「どうしたの、レー君？ 何時もならちよつとは嫌な顔するのに… 今日ドライなのはレー君の方？」

「……コバード家の奴にはセレンを傷付けられそうになったんです。少しも庇う気は起きないし、ルチアさんにそう思われても彼に同情なんてしませんよ」

不機嫌な声音が抑えられている事は明白なレゼルの言葉。

彼の半歩後ろで、セレンがピクリと肩を震わせた。しかしそれは声に含まれた不機嫌さでは無く、レゼルの言葉の内容によるものだろう。嬉しかったのか、はたまた恥ずかしかったのか。

「おうおう、すっかり騎士ナイトだね、レー君？ でも、レー君なら赤毛ちゃんに攻撃が放たれる前、攻撃の予備動作の時点で殺す事も出来たんじゃ？」

ニヤニヤ、と嫌な笑みを張り付けながら未だに見上げてくるルチア。

「学院の実技試験で殺るのは駄目でしょう。まあ、攻撃を止めて掘じ伏せる事は出来ました。……最初から、セレンに敵意が向いていれば」

「どういう事？」

「いや、最初にコバード家の奴は俺に敵意を向けてきてたんです。だから放っておいたら、ソイツの放った投げナイフが俺じゃなくて

セレンに飛んだんですよ」

「外れちゃった訳ね、ナイフが……それは、ご愁傷さまだね？ どうせレー君、人一人殺せそうな眼で睨んだんでしょー？」

「……人一人殺せそうな眼ってどんな眼ですか」

「……射殺せそうな眼、かな？」

「表現が変わっただけです」

さらっとセレンがツツコンで、ルチアは拗ねたように唇を尖らせた。

彼女はセレンに対しては、何故か弱くなる、というか大人しくなる。まさか、《暦星座》の一人の百合教師みたいな理由ではないだろうが。いや、ない事を信じたい。

「で、レー君？」

「はい？」

「《暦星座》には会った？ ほら、リレイズの創造学院には《暦星座》が多いじゃない？」

五つある創造学院の中でも一番実力的に優れているのはリレイズ創造術師育成学院だと言われている。

未成年の《暦星座》も数人いて、プロの創造術師になるには創造学院卒業資格が必要となる為、そういう者はリレイズに集まるのだ。「三人会いましたよ。天才と神童と死神です」

天才「ミーナ・リレイズ。」

神童「ミーファ・リレイズ。」

死神「ルイサ・エネデイス。」

本当に、一日でこんなに多く有名人にお目に掛かれるとは思わなかった。

「あ、そっか、学院長だもんね、天才には会ってて当然だね？ で、彼女達の実力はどうだった？」

「……」

興味津々といった態で身を乗り出すルチアに、レゼルは呆れて言葉も出なかった。

いや、何とか、出た。

「……それをどうして俺が知ってる？ 貴女も《曆星座》だから気になるのは分かりますが」

「ええっ、知らないの？」

「当たり前ですよ。あの三人の実力なんて俺が知る訳ないじゃないですか。唯でさえ編入したばかりなのに」

そこまで言つて、レゼルは思い出した。

実力を確かめる為、という意図では無かったが、自分は一度ルイサに刃を突き付けていた事を。

「……あ、でも、死神の実力なら、少しだけですけど」

「本当？」

「はい。ライトセーバー「光剣」を突き付けました」

「おお、やるう？」

ルチアが相も変わらずワクワクした笑みを向けて話の先を促してくる。

「で？」

「他の事に気を取られてたりしたり、元々彼女は近接戦闘向きの創造術師じゃありませんから、俺が一応勝った感じです。でも攻撃が来ると判断した瞬間に無光創造で、剣を突き付けられている事を考慮して手回しが利き易いように小型拳銃を創造しようとしたのは流石だと思いますよ」

「成程ね、貴重な情報ありがとう？ っと、話が長くなっちゃったね？ 今回の依頼の報酬は飛空艇の方に送つといたよ？」

送つといた、と過去形になっている事に少し疑問を覚えたが、考えてみれば、ルチアに会う三十分前にセレンが彼女と依頼を成功させた旨の連絡を取っているのだった。

「それで話は終わりですか？」

「待つて待つて、レー君、まだだよ？」

「まだあるんですか？」

その声に小さな苛立ちが混ざったのは、仕方の無い事だろう。

レゼルは、『能力』創造の際に融合体を細胞などにも吸収させて身体を強化しているように、同じやり方で身体を活性化させる事が出来る。

彼ほどの創造術師なら、一ヶ月以上も一睡しないで過ごす事が可能だ。(その後、一週間くらいはベットのの上にいるしかなくなるが)

だから一夜の徹夜くらいは何て事ないが、今は彼は学院の生徒である身。夜間外出は出来るだけ避けたい。ミーナを敵に回すのは厄介だし、敵対する理由もない。

ルチアの《融合結晶》回収の依頼を受けた事で、ミーナとは壁を作ってしまったに等しいのだが、彼女はレゼルがこの件に関わっている確証までは掴めない筈だ。不審な目を向けられても、明確な敵にならないければ別に良い。

しかし、夜間外出している事に気付かれば、必ずミーナに敵視されてしまう。

だから、レゼルは早く学院に帰りたいかった。声に小さな苛立ちが混ざったのはその為だ。

「すぐ終わるよ、レー君？ だから怒らないで、ね？」

レゼルの声に含まれた苛立ちに気付いていない訳でもないだろうに、ルチアはそう言って無邪気な笑顔を浮かべた。

思わずレゼルは溜め息を吐いたが、次の瞬間、彼女の笑顔は最初から無かったように消えていた。

一転した、真剣そのものの、顔。

彼女のルチア・ヌ・セヴェリウムの、創造術師としての、顔。レゼルも、一瞬で表情を引き締めた。

セレンは表情が変わらない代わりにびん、と背筋を正す。

「司令官より報告です。日付変更直後、リレイズの街・北側戦闘区域上空の《結界》に歪みが発生、観測致しました。《墮天使^{だてんし}》の顕現予測時刻は本日20時47分。歪みの範囲から数は少数と思われるますが、歪みの激しさからかなりの上位個体だと推測されます。

その他、《墮天使》に関する詳細は未だ不明、現在調査中です」

緑の名を冠した女性はそこで言葉を一度止め、大きく息を吸った。静かに吐いて、淀みのない、はっきりとした声で続ける。

「飛空艇は現在、西の大國上空を飛空中。20時には間に合いません。本官も今、この街では派手に動けません。適任者はコードネーム『ブラッディ血塗れ』、つまり貴方だけです」

ルチアとレゼルの間に静寂と張り詰めた空気と終わる事の無い夜の闇が漂う。

「レゼル・ソレイユに命じます。20時迄に北側戦闘区域に向かい、単独で《墮天使》を殲滅しなさい」

「了解」

リレイズ創造術師育成学院の学院長であり、創造術師の頂点に立つ十二人の《曆星座》の一人、ミーナ・リレイズは、少しだけ苛立っていた。

ロナウド・コバード　コバード家の長男　が《融合結晶》を使用しているのを彼女が勘付いたのは三日前の事。

創造学院は、現在世界的に必須な創造術師を育成する為の場所。

学院に所属する学生創造術師は、当たり前的事だが、《融合結晶》になど頼ってはならない。

その事から、石屋が学生創造術師に《融合結晶》を売る事は違法行為と定められている。今、この世界は、創造術師が何人いても多過ぎるという事の無い状況にある。だから創造術師を育成する創造学院の生徒が《融合結晶》などに頼って弱くなってしまふなど言語道断なのだ。

だから、ミーナは気まぐれに足を運んだ第二実技棟でロナウド・コバードが《融合結晶》を使用していると分かった時、思わず頭を抱えなくなった。主に、自分の学院長としての自覚の無さと不甲斐

なさに。

それでも彼女は十年以上学院長の座を勤めているのだが。いや、だからこそ余裕と油断が出てきてしまったのだ。

どうして《融合結晶》をロナウドが使っている事をミーナが分かったかと言つと、《融合結晶》にあるのはメリットばかりでは無いからだ。

まず高価だという事が挙げられるが、その他にも、必ず創造光クリエイトフラッシュが発生してしまうというデメリットがある。

結晶に凝縮・凝固した融合体が《融合結晶》だ。そして、その融合体は創造術師のものでも自分のものでも無い。従つて《融合結晶》の融合体を使用者が操るのはどうやったつて無理な話で、結果、創造光を抑える無光創造は出来ない。

実技棟で彼の創造術をしっかりと見て、その時に発された光が《融合結晶》のものだと気付いたのである。（誰にでも出来る事ではなく、彼女が優秀、加えて視力を創造術で強化していたから分かった事である。）

四年の中でも成績優秀者（実技の）の部類に入るロナウド・コバードが無光創造が出来ない事はかなり前から疑問に思つてはいたが、真剣に考える事はしなかった。言い訳を言わせてもらつと、他の業務で忙しくてそれどころじゃ無かつたからだ。

しかし、それは本当に言い訳にしかならない。

ミーナはロナウド・コバードに対し、もう一つ疑問を抱いていたのだから。

四年になると、殆どの生徒が自分の《ガーデン星庭》を持つ。プロの創造術師の一步手前という場所にいるのだから当たり前だ。

だが、それなのにロナウド・コバードは自分の《プロ星庭》を持っていなかった。今は冬、後四ヶ月もすれば正規創造術師の資格を取る為の試験があるというのに、だ。

おかしい、と思つて調査をするのが普通だった。だというのに、ロナウド・コバードが《融合結晶》を使っていると気付いたのは偶

然だった。

「本当、学院長失格だなあ……」

一部の者しか存在する事を知らない寮の地下、学院長の為だけの書齋で、ミーナは深い溜め息を吐いた。

全体的にレトロな雰囲気のある部屋で、壁に掛かる振り子時計は二時少し前を示している。ちょうど編入生の少年とその連れの子が学院の高壁を越えている頃だったが、そんな事(?)をミーナは知らない。

マホガニーの机の上の書類から目を外し、革張りの椅子の背^{せむた}凭れに身体を預ける。

創造術の『能力』創造と同一のやり方で眠気をシャットアウトしているものの、彼女は学院長の仕事以外にもある諸々のあれやこれやで昨日も一昨日もその前の晩も徹夜している。眠気は無くても、創造術を使っている疲労と寝たいという欲求は抑えられない。

ロナウド・コバードの事は後悔して反省もした。

彼女が今、苛立っているのは早く寝たいからだだった。

ぼんやりと天井を見詰めていると、書齋の扉が二回ノックされた。

「どござ」

ミーナは姿勢を正して声を掛けた。

「失礼します」

ハキハキとした口調で言いながら入ってきたのは、分かっていた事だがスーツ姿の青年だった。

青年は机の前まで歩み寄ると、まるで執事のように恭しく一礼した。いや、彼は真正正銘、リレイズ家に仕える本物の執事だった。

切れ長の瞳でミーナを見詰め、青年は口を開く。

「奥様、ロナウド・コバードの身からも部屋からも《融合結晶》は発見出来ませんでした」

「なんですって?」

思わず、ミーナの猫被りの口調が剥がれた。

青年の言葉を信じたからだ。

彼はリレイズ家が学院に潜り込ませた、リレイズ家に仕える執事であり一人の教師だ。そして、ミーナの腹心でもある。

ジェイク・ギーツ。

彼の言葉を、ミーナは信用している。信用出来る。

「どういう事？ ロナウドは確かに《融合結晶》を所持しているはずよ」

しかし、信用出来ても、声に責めるような響きが混じってしまうのは止められなかった。

「しかし奥様、《融合結晶》は見付かりませんでした……」

ジェイクの顔に狼狽が浮かぶ。

因みに、奥様、と呼ばせるのは学院ではこの地下書斎だけだ。何時もは彼も普通に、学院長、と呼ぶ。

「……はあ……」

ミーナは再び天井を仰いだ。ジェイクのせいでは無いと分かっていたが、八つ当たりつばい溜め息が口から漏れた。

「……やられたわ」

「はい？」

「やられたって言ったのよ。石屋に証拠品である《融合結晶》を回収されたんだわ。これで、ロナウドに《融合結晶》を売った奴は分からなくなってしまうた」

「……」

ジェイクが黙り込む。

ミーナも黙りを決め込みたい気分だった。

「違法者を逃がすなんて、屈辱だわ。くそ、どうやって《融合結晶》を回収したのよ？ 学院の中に侵入はいするなんてそうそう出来る訳が無いのに」

今以上にセキュリティの嚴重さを引き上げるとなると腰が折れそうだ。

学院のセキュリティは最新技術を使用している。その為、打つ手は警備員を増やすくらいしか無いのだが、人が関わる以上、色々な

書類とか人件費とかが面倒なのだ。はつきり言うと、もう仕事を増やさないで欲しい。

「……奥様」

「何よ？」

ミーナの不機嫌極まりない声にたじろいだジェイクだが、それは一瞬の事だった。

「僭越ながら発言させて頂きます。……ロナウド・コバードが《融合結晶》を使用しているとお気付きになられたのは三日前でしたよね？」

「そうだけど、何？」

「何故、もつと早く手を打たなかったのですか？」

「……それは」

ミーナが苦虫を噛み潰したような顔をして口籠もった。

「それは、何ですか？」

静かに、話の先を促す教師兼リレイズの執事。

「……証拠品を掴む為よ。ロナウドに《融合結晶》の事を詰問してもはぐらかされるだけだもの。プライバシーっていうものを私も一応弁えてるからね、部屋を漁ったりは出来なかった訳。で、考えたのよ」

「……何をですか？」

「ロナウドに創造術を大勢の前で使わせて、その創造光が《融合結晶》によるものだとばらすの。そうしたら、優秀な生徒が確かめようとするでしょう？　ロナウドは後に退けなくなつて創造術を行使。そして皆にはれて抗弁も出来ないまま、速やかに退学。という素晴らしい計画だったのよ」

「……彼がその時《融合結晶》を使わなかったら？」

「それは無理よ。彼は《融合結晶》のお陰とはいえ成績優秀者に入っているのだから。急に創造術が上手くいかなくなつたら、それこそ《融合結晶》使用の線を疑われるわ」

「成程」

ジェイクが感心したような、少し呆れているような声を出した。
「それにね、《融合結晶》を使わなければ恥をかく状況に追い込んだもの」

「え？」

「まあ、偶然だったんだけど。彼がレゼル君と対立していて、実技試験の相手になってくれたのは」

「《融合結晶》を使わなければ恥をかく……」

「ええ、かくでしょうね。思いっきり」

「レゼル・ソレイユは、《融合結晶》を使わなければ勝てない相手だったと分かっていたのですか？　いくらロナウドが弱かったとはいえ、彼は四年ですよ？」

ジェイクは訝し気に眉を顰める。

「分かっていたわよ。ああ、ギーツは実技試験を見てないんだっただわね。結果として、ロナウドを気絶させたのはレゼル君よ」

「……編入生が、四年を倒したのですか？　てっきり、ロナウドは拘束する為に奥様が気絶させたのだとばかり」

「いいえ、レゼル君よ。実技試験でね」

「……レゼル・ソレイユは、強いのですか？　創造術の使える《雲クラウド》だと聞きましたか？」

ジェイクの張り詰めた質問にミーナは答えなかった。

当然。なんたってあの《白銀》の弟だもの。

口の中だけで転がした言葉は、腹心の青年には聞こえなかった。

「だけどレゼル君ったら、ロナウドに創造術を使わせる前にあつさり倒しちゃうんだもの。私の素晴らしい計画は破綻して、結局、プライバシーなんかそっちのけで部屋漁りを敢行した訳」

「それを私わたしにさせた訳ですね」

ジェイクの声音は嫌味っぽくなっていた。

時々「コイツは私の執事っていう自覚があるのかしら？」とミーナは思う。

「だから最初から、今日の編入試験でロナウドの事は終わらせるつ

もりだったのよ」

「……彼と編入生が実技試験で対峙する事になったのは殆ど偶然ではなかったのですか？ それに、やるうとすれば三日前、それこそ《融合結晶》の事に気付いた時、打つ手は幾らでもあった筈では？」

「……それは」

再び、ミーナが口籠もる。

だが、彼女は子供っぽい仕草でジェイクからふいつと目を逸らすと、小さな声で言った。

「仕方がないでしょ。私は昨日も一昨日もその前も徹夜だったのよ。」

忙しかったの」

「ロナウドの《融合結晶》の件を三日も後回しにしたのはそれが本当の理由ですね」

「……」

凶星だった。

何故かは分からないが彼相手だと黙ってしまったり口籠もってしまふ事が多い。

腹心としてある程度は心を許しているからだろうか。口先で人を誤魔化すのは得意だとミーナは自負しているのだが。

「……まあ、いいです。ロナウド・コバードはどうします？」

「強制退学」

短い、即答。

「畏まりました。では、彼や彼の親族には私の方から伝えておきます」

「宜しく。悪いわね、コバード家の相手なんかさせちゃって」

「いえ、どうという事ありません。……では」

ジェイクは深く一礼して、書齋を出ていった。

しん、と静まった空間に振り子時計の音だけが響く。

ミーナは顔だけで振り返って背後の窓の外を見た。

冬の澄んだ夜空に輝く無数の星達。

だが、月はまだ、雲に隠れたままだった。

第5話 〈曆星座〉 (後書き)

会話が多くなってしまふのは駄目な癖ですよ。申し訳ないです。今回は意味が分かりにくかったかも、と自分自身思ってます(と
いつか何時も?)。色々とご指摘下さると嬉しいです。

第6話 姉弟愛

編入試験の翌日の朝。

編入生レゼル・ソレイユの噂は、瞬く間に広がっていた。

曰く、創造術クリエイトの使える《雲》クラウド。

曰く、《白銀シルバリーの創造術師》レミル・ソレイユの隠されていた弟。

その話題は創造祭ソレイユさいが近付き少々浮き立つ創造学院を一夜にして震わせたのだ。

だから、ロナウド・コバードが退学になったというニュースは、全く話題に上らなかった。

リレイズクリエイター創造術師育成学院、男子寮の最奥の部屋。

灰色の髪と漆黒の瞳という《雲》の少年と、緋色の髪の少女は、
具材たつぷりのベーグルを頬張っていた。

セレンが作った朝食だ。

ハム、トマト、レタス、卵、セレンお手製のソースが真ん中に穴の空いた丸いパンに挟まれている。

時間的、ではなく、空間的に朝の無くなった世界では、野菜などは地下栽培室ジオプラントで栽培されている。

ソファに座っている二人は、創造学院の制服を来ていた。起きたら、部屋のドアノブに制服の入った紙袋が掛かっていたのだ。おそらくルイサが持ってきてくれたんだろう。

黒を基調とした男子制服と、白を基調とした女子制服。

二人はそれを、既に着こなしていた。全く違和感がないのは、二人が制服というものに慣れているからだ。

何時も通りに美味しい朝食を食べていた時、レゼルは部屋の前に誰かの気配を感じた。

彼の部屋は最奥。だから彼の部屋の前を通り過ぎるといふ人は滅多にいない筈だ。

ベーグルを皿の上に戻して扉を注視する。隣を一瞥してみれば、セレンも食べる手を止めていた。

結果、そんなに身構える必要は無かった。

部屋にノックも無しに入って来たのは晴牙だった。

身構えてしまったのは、これも癖だ。

「おっす、レゼル。セレンちゃん」

軽く手を上げて軽い挨拶をする晴牙。

「おはよう、ハルキ。ノックぐらいしろ」

「おはようございます、ハルキさん。ノックぐらいして下さい」

「……」

二人から同じ事を言われて晴牙は困惑した様子だった。

しかし、勝手に部屋に上がってきて、テーブルの上のベーグルに目を留めた。

「何それ？ 朝食？」

「そうだけど？」

「滅茶苦茶美味そう！ つーか、ベーグルなんて食堂にも購買にも無いよな。もしかして、手作りか？」

「ああ。セレンの、な」

「ま、マジで？ セレンちゃんって料理出来るの？」

晴牙が吃驚した顔でセレンをまじまじと見詰めた。

「何か文句でも？」

ベーグルを両手に持ったセレンは、晴牙を見上げて無表情に首を傾げた。仕草だけ見れば可愛いものだったが、放たれた台詞はキツめだ。

「いや、そんな事はねえけど……」

「けど、何ですか？」

「な、何か意外だなんて。セレンちゃん、小さいし」

「何処が小さいって？」

セレンの声が三オクターブくらい低くなった。敬語も消えている。「あ、ち、違う違う！ そっちじゃ無くて、背！ 背丈！」
馬鹿だ、とレゼルは思った。

食べ掛けのベーグルに再び手を伸ばし、セレンと晴牙を眺める。「そっち、とは一体どっちでしょう？ 貴方は何を思い浮かべたのですか？」

「あ、いや……」

「しかも、背が低いという発言も気にしている人には暴言に等しいですよ。チビ、と言われるのと同じ事ですから」

「す、すまん……」

口先の勝負はセレンの完勝だった。

「で、何か用があるんだろ？」

残り少なかったベーグルを食べ終え、レゼルは晴牙にそう訊ねた。晴牙は食べるのを再開したセレン（のベーグル）に物欲しそうな顔を向けていたが、彼はすぐに表情を改めた。

「ああ、大した事じゃないが。昨日、色々あつて訊けなかったけど、お前ってレミル様の弟なんだよな？」

「……レミル様？」

自分の姉の妙な呼称にレゼルは眉を寄せた。

「あ、言つてなかったっけか？ 俺、レミル・ソレイユのファンなんだよ。だからリレイズの創造学院に来たんだし」

「ああ、成程」

レゼルは納得して一つ頷いた。

晴牙は極東の生まれでそこにも創造学院はあるのにリレイズに来た理由が分かったのだ。

レミル・ソレイユは、十六歳の時にリレイズ創造術師育成学院の入学試験を受けているのだ。

結果は、筆記試験・実技試験共に受験生のトップ。どころか、学院創始以来最優秀の出来だったらしい。

だが、彼女は入学しなかった。それは、存在を隠し続けている

雲》の弟の為。

十代半ばにしてフリーの傭兵であった彼女は、弟を守る為、弟の隣にずっといる為にどんな組織にも属さなかった。

創造学院の入学試験を受けたのは、学院長ミーナ・リレイズに強制されたから。入学する事もしつこく勧められたが、彼女の「弟を守る」という覚悟は全く揺るがなかった。

最強と名高い彼女は、当たり前のように色々な組織・団体からスカウトがあった。一日に一回あると言ってもいい程。だが、その全てを彼女は断っていた。当時は彼女とレゼルにしか知る由がなかったが、それは、弟を守る為。

そんな彼女が、初めて許容したのがリレイズ創造術師育成学院の入学試験を受ける事だった。

創造術師、一般人を問わず世界に数多いレミル・ソレイユのファン。

その中で創造術の才能がある者は、リレイズ創造術師育成学院に来たがる、というのは、レゼルも知っている事だった。

「で、本当に弟なんだよな？」

「ああ、そうだ」

レゼルが頷くと、晴牙は興味津々といったようにテーブルに身を乗り出してくる。

「じゃあさ、レミル様って普段どんな感じだったんだ？」

「ふ、普段？ レミ姉の？」

姉の普段の様子、と言われても言葉に詰まる。

「そうだな……優しかった、な。それで、強かった。レミ姉は、誰よりも」

晴牙は、レゼルのその言葉を聞いて満足したらしい。顔に年相応の少年らしい笑顔を浮かべて、嬉しそうに笑う。

「だよな、やっぱり。レミル様は最強だから」

晴牙の発言に、レゼルも同意を示した。

朝食は食堂で済ませたらしい晴牙と、一緒に皿洗いを済ませたセレンと共に本校舎へ向かった。

セレンはルイサの補佐役という事で、職員棟に繋がる渡り廊下に歩いていった。

そしてレゼルは本校舎最上階にある学院長室にミーナから呼ばれている。一年の教室がある四階で晴牙と別れ、階段を上り続ける。

五階は空き教室となっており、学院長室のある最上階は六階だった。

最後の階段を上ると（正確には屋上へ行く為の階段がまだあるのだが）、目の前に両開きの大きな扉が現れる。

驚いた事に、六階のフロア全体が学院長室らしい。

扉の横に設置されたセキュリティサーバーに近づく。すると、女性の声に似せた合成音声 flowed。

『サーバーの画面に掌を押し付けるがいい！』

ウザい。とか思っていたら対応しきれないんだろう、あの学院長には。

レゼルは我知らず溜め息を漏らした後、合成音声の言う通りにした。

すると、画面にミーナの顔が映った。画面に置かれていた手を離す。

『レゼル君で間違い無いね。……はい、扉を開けたよ。入ってきて』

彼女の言葉が画面越し。この場合、扉越しかもしれないに聞こえたと同時に、ピー、という電子鍵キの開く軽い音が響いた。

一見木製の扉だが、よく見れば実技棟の壁と同じ強化素材で作られている。あたかも重厚そうな、押し開けば、ギィ、と音が鳴りそな感じは、ミーナの趣味だろうか。

実際は、電子音が鳴った後、自動で左右にスライドした。音を立てるところか、押して開く形式でもない。

「失礼します」

入室して浅く一礼する。

シックというか少しレトロな雰囲気の学院長室では、ミーナがニコニコと笑顔を浮かべてレゼルを迎えた。

埃一つ無い高そうな（値段的に）絨毯と、大きな業務机、壁際に並んだ蔵書の詰め込まれた本棚。

昨日と変わらないスーツ姿の彼女は、椅子に腰を下ろし机に頬杖を付けていた。

もしレゼルが女子寮の地下にある学院長の為だけの書斎を見た事があるならば、この部屋はそこと似ている、と感じただろう。

レゼルには知る由もない事だが、こういう雰囲気、ミーナの嗜好だった。

レゼルが室内中央まで進み出ると、ミーナは姿勢を正した。

「おはよう、レゼル君」

「おはようございます」

いきなり（とも思える）挨拶に、戸惑う事も不自然な間を空ける事も無く、レゼルは言葉を返した。

ミーナの口元が、僅かに弛んだ気がした。

「改めて見てみると、レゼル君ってレミルに似てるよね。何か、雰囲気か」

「そうですか？」

一瞬、姉に会った事があるのか、と思ったのだが、姉が創造学院の入学試験を受けたのは学院長に強制されたからだったな、と思いつ出した。

「うん。似てる似てる」

レゼルの顔を凝視して何度も頷くミーナ。

そんな彼女を見て、レゼルは少なからず違和感を覚えた。

「……学院長は信じられるんですか？ 俺が本当にレミ姉……レミル・ソレイユの弟だって」

ルイサも晴牙も、最初は「本当なのか？」という顔をして、実際、

それを訊ねてきた。

だがミーナは、レゼルがレミルに似ているとまで言う程、信じきっている。そこには一片の疑いも無かった。

その事に、レゼルは違和感を抱いたのだ。

するとミーナは目を丸くして首を傾げた。(多分わざとやっている。)

「え？　もしかして、弟っていうの嘘なの？」

「いえ、本当ですけど。でも突然弟なんて出てきたら、普通、少しは疑いませんか？」

「ああ、うん、かもね。でも私の場合、突然じゃないんだよ」

ニヤニヤと悪戯っぽい笑みを浮かべるミーナに、次はレゼルが首を傾げる番だった。(わざとでは無い。)

「私がレミルに無理矢理入学試験を受けさせたのは知ってるよね？」

「はい」

無理矢理って自覚はあったんだな、と本気でどうでも良い事を考えながら返事をする。

「で、結局、レミルは入学しなかったじゃない？　正規創造術師プロの資格を取った方が色々と明らかに有利なのに。まあ、フリーの傭兵で資格が無かったとはいえ、レミルは人一倍稼いでたけど　ううん、違う。あれだけの強さを持ってあれだけ万人に認められていたのだから、人の三倍も四倍も稼いでいてもおかしくなかった。それが、人一倍しか稼げなかったのは、何処の組織・団体にも加盟しないで、何より、正規創造術師プロの資格を持っていなかったから」

「……そうですね」

「そこに疑問を持って、訊いてみた事があるの。』どうして、正規創造術師プロの資格を取らないの？』って」

それは初耳だった。姉からは、聞いていない。

レゼルは少なからず気になった。姉は、レミ姉は、何と答えたんだろう、と。

「そしたらね、笑顔で言われちゃったよ」

ミーナは、クスクスと何が面白いのか笑っている。まるで子供が見せるような無邪気で無垢な笑顔。

何時もの彼女が浮かべる、悪魔の笑みではなかった。

「『弟を守る為よ』って」

レゼルは少し驚いた表情をしてみまうのを抑えきれなかった。姉が自分という存在を他人に話していた事が意外だったのだ。

そんなレゼルを、ミーナは遠くを見るような目で見詰めた。

「愛されていたんだね、レゼル君は」

「はい。俺も愛されていたと思います」

「……さらっと言うんだね。普通、ちよっとは照れる所じゃないかな」

「そうですね？ 別に姉弟ですし、これが普通では？」

頭の上に疑問符を浮かべるレゼルを、ミーナは生暖かい目で眺めた。

ちよっとしスコンの気があるみたい、と思っていると、レゼルが口を開いた。

「でも、姉が俺の事を話したんですか。学院長は姉に信頼されていたみたいですね」

バレバレな猫被りをしている事といい、食えない人だなと感じていたが、姉が信頼していたならば、レゼルも信頼出来る。

まあ、今の話が全て嘘という可能性も低いだろうがなきにしもあらずなので、油断ならないが。

「まあね。なんたって私は、レミルに先生って呼ばれてたんだよ。

……残念ながら、創造術師クリエイターとしては彼女の方が上だったけど」

「当たり前でしょう」

さも当然という表情と声でのたま言うレゼルに、ミーナは低い声で、

「……このシスコンが」

「え？ 何ですか？」

この台詞は、嘘だ。ばつちりしつかり聞こえていて、敢えてすとぼけた。

自分が（結構な）シスコンだという事は、ちゃんと自覚していた。それで開き直っていたから、別にシスコンと言われても「それが何か？」という感じなのだ。

「何でもないよ。それでレゼル君、ここからは大事な話に入るね」

「……分かりました」

口調には何ら変わり無いのに、スツと表情を消してそう言われれば、否やは無い。

「まず、レゼル君は学院が聖域サンクチュアリと言われている事は知っているかな」

「はい、知ってます」

「そっか。なら分かると思うけど、聖域である学院には、どんな組織も団体も国家も干渉する事は出来ない。それは、創造術宗教団体も同じだよ。私が言いたい事、分かるかな？」

「……それは、学院に生徒として所属する俺にも干渉出来ない事を意味する」

「はい、正解。良く出来ました」

ニツコリ、と笑ってから、ミーナは語を続けた。

「君は謎だらけだよ。君自身は自分を《雲》だと言っけれど、創造術が使える。それは《雲》とは言わない、という人だっているだろうし、君の外見で《雲》だと見做す人もいるだろう。まあ、そこらへんは深く詮索はしないよ。私もプライバシーって言葉は弁えてるし、正直に言っと、君から編入希望届が届いた時、散々君の事は調査したんだよ」

「……プライバシーを弁えてるって、矛盾してないですか？」
白い目でミーナに指摘するレゼル。

しかしミーナは彼が空気だと言わんばかりにスルーした。

「だけど、君が存在していたという記録レコードも情報データも全く出てこなかったよ。レミルは余程警戒していたんだね」

「……まあ、そうでしょうね。今まで隠れて生きてきましたし」

「お陰で、私は君の事を何も知らない。あ、言うておくけど、君を調査したのは個人的な好奇心という訳ではなく、それも少しはあるけど、殆どは、学院長としてだからね？ 生徒の事を知るのは、プライベートとか関係無くなるの」

「いや、少しは考慮して下さい」

レゼルの発言は、勿論（？）、スルーされた。

「だから、私は君の事を詮索しない。これは、約束する。レミルの可愛い弟さんでもあるしね」

じー、っとミーナがレゼルの漆黒の瞳を覗き込む。

ミーファと同じ（正確にはミーファがミーナと同じ）翠色の瞳は、真摯な光を湛えていた。

「……俺としても、それは助かります」

レゼルのこの台詞は、暗に「自分には秘密がある」と言うのと同義だったが、ミーナが「詮索しない」などという約束を持ち掛けてきた時点で、レゼルに秘密がある事はミーナには既に勘付かかっているのだ。

今更、「何を詮索するんですか？」などととぼけた所で意味は無い。

だからレゼルは、素直にそう言ったのだ。

「ところで、学院長」

「ん、何かな？」

「何時までそんな、猫を被った気持ちの悪い喋り方をしているんですか？」

「き、気持ちの悪い喋り方とは失礼だね……」

ミーナは結構深くショックを受けているようだった。

メンタルの強い人だと思っていたが、どうやら彼女は女性としての繊細さも持ち合わせているようだ。

レゼルは少しだけ罪悪感が芽生えるのを感じて、咄嗟に言った。

「いえ、気持ちの悪い、というのは学院長には合わないという意味

です」

そして実際、彼女自身の喋り方が気持ち悪かったのでは無いから、言い訳では無い、と思う。

「……じゃあ、素でいくよ?」

上目遣いで見上げてくるミーナ。

「どうぞ」

「OK。じゃ、遠慮無くいかせてもらうわね。……ってこの言葉、ちよつとエロ……」

「……は?」

「いえ、何でもないわ」

澄まし顔で首を振る。ふんわりとした柔らかな金髪が揺れた。

それにしても、本来の口調に戻ったミーナは、見た目と口調の子供っぽさのギャップが消えてかなり自然体になったなと感じた。やはり、ミーナとミーファは似ている、と改めて思う。口調が似ているのだ。

「それでレゼル君、話が戻るのだけど、良いかしら?」

「はい、勿論」

レゼルが言いながら頷く。

「創造術宗教団体は、学院の生徒である君には手を出せない。つまり、《雲狩り(クラウド・ハント)》では君は処刑の対象外になるわ」

そんな事は、最初から分かっていた。それが分かっていたから、学院に入ったのだから。

ミーナは真剣な表情で、声音で、話を続けた。

「けれど、学院の中にも創造術宗教団体のメンバーはいるわ。今分かっている中で最低でも、教師・生徒を合わせた数の半数はいる」
半数。

思ったより少なかったな、というのがレゼルの感想だった。

元々ここには、セレン以外全員が敵になる事も覚悟して来ているのだ。

そしてミーナの話によると、彼女とミーファと晴牙とノイエラとルイサは創造術宗教団体でない事がはっきりしているから、安心してくれ、との事だった。

「ま、そんな事は覚悟して来ているのでしようし、学院内ではちょっと辛くなるかもしれないけど頑張つて。私にはそれしか言えないわ」

「覚悟の上です」

「その調子よ。それで、問題は学院の外に出る時ね。君の噂は多分今日中に街に広まるわ。学院内では既に全校生徒に広まっているんだもの。いくら創造術宗教団体が君に干渉出来ないと云っても、それが守られる保証は無いわ。街に出る時は今まで通り髪と瞳を隠しなさい」

「そのつもりです」

学院の生徒という身分があつても、一見《雲》のレゼルがそのまま街に出たりすればパニックになる。

それだけでなく、《雲》が創造学院に編入したというニュースで既にパニック勃発寸前だろうに。創造術宗教団体はもしかしたら、「動く」かもしれない。それくらいは想定済みだ。

「……なら、良いわ。そうね、大事な話はこれくらいかしら」

「え？ あの、俺つてこれからどうすれば？」

「あ、そうだったそうだった。レゼル君のクラスはルーちゃんが担任のA組。ミーファも晴牙もノイエラもA組だから細かい事は三人に教えてもらつて」

分かりました、と短く答えて退室する為に頭を下げようとする。

だが、その前に、

「ねえ、レゼル君」

ミーナに名前を呼ばれてしまった。結構、真面目な感じで。

「……何でしょう？」

カタン、とミーナが椅子を引く小さな音を立てて立ち上がった。

業務机に両手を付き、しっかりと目の前の謎だらけの少年を見据

える。

「……昨日の実技試験で彼と戦った時、君、何かした？」

彼、とはコバード家の息子の事だ。

ここでやっと探りが来た、とレゼルは慌てるどころか安堵した。

少しでもレゼルを疑わなければ、逆に心配になっってしまう。

もしかしたらレゼルと《融合結晶》を学生創造術師アマチュアに売った違法者は繋がっているのかもしれない、と至少くは訝ってくれなければ、本当に彼女には学院長としての器うぐわがあるのか、と思っってしまうのだ。

「……何か、とは？」

眉を寄せ、何も知らない風を装う。

ルチアーヌ・セヴェリウムと昨日の夜に接触した事は見抜かれていないと分かったので、ポーカーフェイスを作るのは簡単だった。

「……そう。何でもないわ、変な事を訊いてごめんなさい」

「いえ。……では俺は、これで」

立ち上がったままのミーナに一礼し、レゼルは彼女に背を向けた。ミーナが機の引き出しの裏辺りに手を伸ばし、何かを操作したのをレゼルは確認した。

目の前に現れた、小さな鏡を通して。

ミーナはその事に気付いていない。

学院長室の扉が横にスライドしていく。彼女が操作したのは扉の開閉スイッチだった。

レゼルが一步、部屋の外に出た。

「レゼル君」

背中に、先程までとは異なる楽しげな声が掛けられた。

レゼルが完全に、学院長室から外に出た。

扉が音も無く閉まり始める。

「制服、似合ってるよ」

戻った猫被りの口調で言われた、お世辞や冗談では無さそうな響きのある言葉に、レゼルは肩越しに後ろを一瞥した。

だが、扉は既に閉まりきり、ミーナの表情も姿も見えなかった。
レゼルは、ふと自分を見下ろした。

「……似合ってるか？」

かなり不思議そうな声で呟く。

創造術を使って目の前に浮遊する姿見サイズの鏡を構築コンストラクションしてみても、自分に創造学院の制服が似合っているとはどうしても思えなかった。

第6話 姉弟愛（後書き）

更新を毎週日曜日、夜9時に定期化しようと思います。

遅れたり更新出来なかったりする事も多々あるでしょうが、宜しくお願いします。

第7話 THE WORLD SYSTEM・(前書き)

今回はちょっとモノローグが多いです。すみません。

第7話 THE WORLD SYSTEM .

創造学院本校舎四階、一年生のフロア。

レゼルが自分のクラスになったA組に行く為に廊下を歩いていると、当たり前かもしれないが注目されまくった。

しかし、それは良い意味での注目では決して無い。

向けられる視線は様々だ。灰色の髪と漆黒の瞳という、忌々しさの象徴である容姿に対する嫌悪感を含んだ視線。本当に創造術クリエイトが使えるのかと訝る視線。未知のものに困惑し、畏れている視線。好奇心が隠しきれない粘つくような視線。

気分の良いものでは、無かった。

勿論、こんな視線はどうって事はない。覚悟だとして学院に来ている。

だがどうしても、苛々してしまう。気になってしまう。

向けられる視線の中に含まれるであろう沢山の感情から、悲しさや怒りといったものは起こらない。ただ、視線を向けられているという事実があるのが落ち着かない。これも癖さか、というか性である。

窺い見るだけで話し掛けては来ないのだから、放って置いてくれれば良いのに、と思っていると、何時の間にかA組の前まで来ていた。

廊下に生徒達が出てきていたし、教室内も騒がしい雰囲気があるから、多分今は授業前の朝の自由時間という奴だろう。

学院長室から来て、一時限目くらいは始まっているかもしれないと思っていたのだが、そんな事はなかったようだ。

学院長室とは違ってこちらは自動ではないが、一切音を立てない扉を横に引く。

音が無かったから、生徒達がレゼルに気付くのは遅かった。というか、気付いたのは窓際の席に座っていたミーファがレゼルの名を呼んだ時だった。

何故か慌てたように走り寄ってくるミーファは、周りの視線など気にしていなかった。

「おはよ、レゼル君」

「おはよう」

朝の挨拶を交わして、ミーファはやつと落ち着いたようだった。

「中々来ないから心配してたのよ。何してたの？」

「いや、学院長に呼ばれてて……ミーファ、聞いてなかったのか？」

「聞いてないわ。お母さん、昨日忙しかったみたいで」

ミーファの台詞に、それはそうだろうな、と思ったが勿論口には出さなかった。

「ハルキも何も言っていなかったのか？ アイツは知ってる筈だけどレゼルが問うと、ミーファは見て、という風に顎を動かした。

その動きと彼女の視線を追うと、一番後ろの真ん中の席で机に突っ伏し爆睡している晴牙の姿。

「創造祭の準備、遅くまで頑張ってるのよ。最近は何時もあるの？」

「ああ、成程」

「私もハルキに負けず頑張らなきゃね」

気合いの入った顔で頷くミーファ。

「ところで、俺の席とかが決まってるのか？」

「私の隣よ」

ミーファは即答し、笑顔でレゼルを手招いた。

彼女の席は窓際の後ろから二番目。その右隣の席に座らされ、ミーファも自分の席に腰を下ろした。

彼女はレゼルの方を向いて座り、椅子の背凭れに右腕を乗せている。

彼女の背後には窓。それを通して見える景色は暗い。朝、という時間だというのに、空には星々とやつと雲から抜け出した月が瞬いている。

世界では、当たり前前の光景。誰も、本物の「朝」というものを知らないのだから。

そこでミーファはチラチラと教室内に窺う。何だ、と思っていると彼女は小さな声で囁いてきた。

「……何か、私達、見られてない？」

「……今頃気付いたのか？」

見られるのは当然、という考えは無いのだろうか。

編入生など珍しいどころかいらないに等しい創造学院に編入生が来たってだけでも、編入生が注目されるのは自明の理だろう。ましてや、その編入生が《雲》^{クラウド}の容姿をしているというのに創造術が使えるともなれば、生徒達の意識が編入生に向くのも、仕方の無い事。

こんな事が分からない程、ミーファは脳的能力が乏しい訳ではない筈なのだが。そうでなければ、一年代表にはなれないだろう。

レゼルが眉を顰^{ひそ}めていると、彼女は視線を彼に固定したままかぶりを振った。

「違うわ、レゼル君が注目される事は私だって納得出来る。でも、何か私まで見られてない？」

そういえば、確かにミーファもジロジロと見られていた。レゼルと話をしているから、にしては少し彼女に向けられる視線の量は異常に多い。

ハルキならその理由を知っているかもしれない、と右後ろを振り返る、が、彼は未だにスリープ中だ。

前に顔を戻すと、ミーファの前の席にストレートショート^{ショート}の髪、縁無し眼鏡を掛けた女子生徒が座ろうとしているところだった。

「おはよう、ノイエラ」

レゼルが、まるで彼女が教室に入ってきた事をつくづく知っていたように挨拶する。

レゼルと同じように晴牙を見ていたミーファが、彼の声に顔の向きを元に戻した。

「おはよ、ノイエラ。今日は遅かったわね」

「おはようございます、代表。レゼルさん。今日はちょっと、

寝過ぎしてしまって」

「ノイエラが寝坊？ 珍しい事もあるものね」

ミーファは少し目を丸くした後、先程感じた疑問をノイエラに話して聞かせた。

すると彼女は可笑しそうに口に手を当ててクスクスと笑った。

「昨日、代表が実技試験でキレたじゃないですか。それで、色々噂が広がっているみたいですよ？」

「噂って、どんな？」

レゼルのこの質問は、ただ単に話を広げる為のものだった。

だが、ノイエラからの答えは、レゼルが予想もしていないもので、ミーファを驚愕、後何故か赤面させるものでもあった。

「そうですね。例えば、代表がレゼルさんに一目惚れした、とか。だから代表はキレたんだったって」

「……！？」

「……」

ミーファが声にならない悲鳴を上げ、レゼルが呆れ返ったような、うんざりしたような表情をした。

レゼルにとつて予想外ではあったが、ただそれだけだ。彼の眼前で耳まで真っ赤にしているミーファを、実に少女らしい初心^{ウツ}な反応だなと感じながら、彼は口を開いた。

「ありもしない事を、よくもまあ……」

溜め息混じりの言葉を発した途端、女子二人から、レゼルよりも深い溜め息が返ってきた。

ミーファに至っては、顔の赤色を一瞬で消し去っていた。

「……何だ？」

「いえ、何でもないわ」

「何でもありません」

次々に首を振る二人を珍しく困惑してレゼルが眺めていると、教室前方の入口からルイサが入ってきた。それと同時にチャイムが鳴る。（因みにレゼルは後方の扉から入った。）

昨日と同じパンツスーツ姿で、顔には水色の眼鏡。髪型も変わら

ず、白い項を晒した。ピンで留めたもの。

そして彼女の後ろから、トテトテと小柄な少女が付いて来ている。緋色の長髪に瞳、誰もが目を奪われる絶世の美少女。

美人教師と美少女補佐は教壇に上がって教室を見渡した。

その時には既にレゼルもミーファもノイエラも椅子にきちんと座り直し、レゼルやミーファを見ていた生徒達も自分の席に戻っている。

「おい、副代表、眠いのは分かるが起きろ！」

チャイムの音も意に介さず睡眠継続中だった晴牙を目敏く発見したルイサが怒鳴る。

彼が机から顔を上げたのを確認して、彼女は話出した。

「皆知っていると思うが、今日からこのA組に編入生が入る事になる。ソレイユ、前に出て来い」

名字で、有無を言わせない口調で呼ばれ、レゼルは席を立って教壇に上がる。

「彼が編入生のレゼル・ソレイユだ」

ルイサが視線は前を向いたまま紹介してくれる。

レゼルは生徒達の方に向き直り、数々の視線を受け止めた。

ミーファ、晴牙、ノイエラ以外のそれは全て、悪意か嫌悪か恐怖か好奇心の含まれた、探るようなものだった。

もう気にしない事に全力で努めようと決めたレゼルは、それらの視線を意識からシャットアウトした。

「レゼル・ソレイユです。宜しくお願ひします」

極めて事務的な言い方で自己紹介を済ませ、口を噤む。

ルイサが「それだけか？」と言うような表情を向けてきたが、気付かない振りをした。

「ソレイユは、ちゃんと創造術が使える。お前達にそれだけは言うておく」

ルイサは、近くにいたレゼルにしか分からない、小さな溜め息を漏らした後、そう言った。

「お前達、とは生徒達の事だ。」

「……」

生徒達が、無言で顔を見合わせる。戸惑いや困惑、そして嫌悪や不安も透けて見える様子だった。

「それと、こつちにいるのはセレン。今日付で私の補佐役として働いてくれる事になった」

ルイサは自分のクラスの生徒達の様子に構わず話を続ける。

紹介されたセレンは、ぺこりと可愛らしく頭を下げた。

男子の間にも女子の間にも、ほんわかとした空気が漂うが、それも一瞬だった。すぐに、ピリピリした雰囲気に戻る。

「ソレイユ、席に戻って良いぞ」

レゼルはルイサのその言葉に素直に従って席に戻った。粘つく視線が背中に刺さるのを感じながら。

彼の隣の席では、ミーファが不機嫌そうな顔をして窓の外に目を向けていた。

「……ミーファ？ どうした？」

レゼルが不思議に思って囁くと、

「……別に。皆の態度が気に入らないだけよ」

苛々して棘がある声で、彼女は呟いた。

「では、授業を始める。皆、^{みな}机の個人サーバーに電源を入れる」

ルイサの言葉を聞き、学院の外とは大き過ぎる差のある持ち前の科学技術を使用して机に設置された情報端末^{サーバー}に、慣れた手付きで電源を入れて空中投影ディスプレイを立ち上げながら、レゼルは隣の席に座る金髪ポニーテールの少女を眺めた。

窓に、美少女の不機嫌な顔が映り込んでいた。

今日の創造学院の授業は午前中だけになった。

勿論、それには理由がある。

レイズの街・北側戦闘区域に、上位の《墮天使》^{だてんし}が墮ちるとい
う情報が学院に舞い込んできたからだ。

《墮天使》。

それは、この世界に神様が創造術を贈り、それが発達し始めた頃
に空から墮ちてきた異形の怪物だ。

空から墮ちてきた、バケモノ。

その姿形は様々だが、どれも吐き気を誘うような造形をしている。
そんなモノが元は天使だったと言っている《墮天使》という名称を
付けた人間は余程皮肉なネーミングセンスを持っていたに違いない。
そして、そんなバケモノが空から時間も場所も全てランダムに墮
ちてくるのだから、地上で暮らしている人間にはひとたまりもない
出来事であり災厄だ。

しかし、人間も無抵抗だった訳ではない。そうだったら人間はと
つくの昔に絶滅している。日の昇る朝が来なくなつて世界から消え
ていった植物や昆虫、魚、動物のように。

《墮天使》に対抗したのは、今よりもつと数が少ないながら世界の
中心的存在だった創造術師^{クリエーター}達だった。

結果としてそれは正解で、《墮天使》に対抗するには創造術が一
番だった。というより、怪物には創造術しか効かなかった。

創造術師達は『能力』創造や創造武器を使い、《墮天使》との戦
闘技術を体系化した。

即ち、己を強化し創造武器を振れ、というもの。一言で言つてし
まえば、それが《墮天使》に創造術師が挑む時の戦術（は言い過ぎ
だが）であり、定石^{セオリー}なのだ。

そして次に創造術師達は、街の上空から《墮天使》が墮ちてきて
街が壊滅、なんて事のないようにする為、街の四方（北、南、西、
東）に戦闘区域という、創造術師以外は立ち入り禁止の、《墮天使
》と戦い滅する目的の領域を設けた。

戦闘区域の上空には、創造術師達が《誘導結界》^{ゆうどうけっかい}という結界を創

造する。

これは堕ちてくる《墮天使》の場所を戦闘区域だけに誘導するというもので、現在、創造術師が何人いても足りないという状況は、《誘導結界》を創造し維持する事の出来る創造術師が圧倒的に不足している事による。

《誘導結界》を創造する事だけを生業とした創造術師もいる程で、彼らは創造術師の中でも結界師けっかいしと呼ばれる。学院にも結界師を育てる「防衛科」ディフェンスなるものがあり、戦闘を引き受ける「前衛科」ヴァンガードや、サポート担当の「後衛科」リアガードに二年になると分かれるシステムになっている。

つまり、全ての街の周囲には戦闘する為の場所がある訳だ。

防衛担当の結界師による《誘導結界》によって強制的にそこに現れる《墮天使》を、前衛である創造術師が攻め、前衛を後衛がサポートする。

無論、その「戦場」に出るのは正規創造術師の資格を持った者達の中でも、三つの役割のどれかの熟練者エキスパートだけだ。

そういう反撃システムがある事で人間は生き延びてきたのだ。

だから、戦闘区域を作れないような、古代語では村とか集落とか呼ばれるであろう小さな街は、《墮天使》にとっくの昔に壊滅させられている。現在、小さな街などはないのだ。

しかし、戦闘区域があったとしても、創造術師が負けてしまえば街は終わりだ。そんな事は普通に起こる現象で、人間は死と隣り合わせという事実を実感しないまま、日々を過ごしているだけにすぎない。

ただ、《誘導結界》というより、街には《墮天使》があまり堕ちてこない。平均して一年に一回が精々、それも強くない下位個体で群れで堕ちてくる事も稀。

その代わりなのか、街も戦闘区域も無い、街と街の間の荒野のよ
うな場所には、結構な頻度で怪物が堕ちてくる。

そうなれば、街と街の間を《墮天使》が跋扈はつこする事になり、国家

間どころか街同士の貿易・交流も出来ない事態になるが、一流の正規創造術師の中でも熟練者エキスパートの中でも一線を画す創造術師のみで構成された組織が存在し、荒野に墮ちる《墮天使》を殲滅して世界を廻る。その為、今は何とか、国家間や街同士の貿易・交流は続けられているのだ。

話は戻るが、本日、創造学院が午前中だけになったのは、滅多に街には墮ちて来ない《墮天使》の、しかも上位個体が《誘導結界》の歪みによって「墮ちて来る」事が観測されたからだだった。

編入早々、こんな事になったレゼルは、他の生徒と同じように寮に戻って来ていた。

現在の時刻は正午を少し過ぎた所。

という訳で、彼はセレンや友人達と共に寮の食堂に来ていた。

友人というのは、ミーファ、晴牙、ノイエラの三人。

彼らは周りの視線や態度など気にせずレゼルに接してくれている。それはちよつとだけ、レゼルに温かいものを与えていた。

セレンは、ルイサに「レゼル君の所に戻っている」と言われて、ここにいる。多分、ルイサは北側戦闘区域に向かっているのだろう。学院長で《曆星座》トユウェルブのミーナと連れ立って。

本来、寮の食堂は昼には開かない。（本校舎の隣に大食堂やカフェなどが入った建物があるからで、昼はそっちを使う決まりだ。）しかし、生徒に「外出はするな」と命じたミーナが手を回し、生徒達をすぐさま寮に叩き帰した後、寮からも出なくて済むようにしたらしいのだ。

レゼルとしては大袈裟だと思うのだが、他の寮食堂に集まる生徒も、友人達も、「当然」といった顔をしている。

それを見て改めて、自分が学院に来るまでいた場所がどれだけ《墮天使》に慣れているのかを思い知った。

寮食堂に足を踏み入れたレゼルを、もう何度目ともしれない無数の視線の砲弾が襲った。

既にレゼルはそれを意識する事を止めている。見事とすら思える無表情で悠々と食堂のテーブルの間の通路を歩く。

セレンは言わずもがな、それはミーファや晴牙も同じで全く気にしていない。ノイエラは少し居心地悪そうにしているが、それは彼女のしつかりした性格が不躰な視線を許せないからだだろう。

メニューを注文するサーバーの画面前で止まったミーファが、「何にする？」と背中を向けながら皆に訊く。

レゼルは、晴牙から教えてもらった冬に食堂で一番美味しいというクリームシチューと珈琲コーヒーを頼む。

晴牙は天麩羅蕎麦てんぷらそばに緑茶。流石（？）は極東日本国の人間だ。

女性陣は皆少食で、量が少ないパスタにサラダ、紅茶を注文した。ミーファがサーバーの画面に手を置いてぱつと操作する間に、レゼルは食堂の天井を見上げた。正確には、そのちよつと下を。

生徒達でこつた返す食堂の上空、天井に近い場所では、十数個の空中投影ディスプレイが瞬いていた。

そこに表示されているのは、日替わりや本日のオススメメニューだ。他にも、天麩羅蕎麦に使った海老えびは日本国産だとか、カロリーや栄養バランスの情報、等々。

学院の科学技術 というより設備 は本当に凄いな、と感心しながら、注文したメニューを取りに行く為食堂奥のカウンターへ。学院の科学技術は、「外」とはかなり差がある。そしてその事を、「外」の人 一般人は殆ど知らない。

学院の科学技術の事は、創造術師達の暗黙の了解で秘匿されているのだ。

理由は、国家間の争いの為。

と言つても、世界の脅威である《墮天使》だけで殆どの国が手一杯で、国同士戦争なんて事は、ここ五、六世紀は起こってないだろう。

ディブレイク王国も、西の大国や日本国と一応不可侵条約は結んでいるものの、それが有っても無くても大して何も変わらない。

だが、他の国家の影響は何処の国も考えてしまうものだ。

だから万が一、国家間で戦争になった時の為、秘匿した技術を用意しておく。それが、学院の中の科学技術な訳だ。

ところで、創造術は秘匿技術には成り得ない。《墮天使》を倒す為に創造術が必要な以上、国家で秘匿など出来る訳が無く、従って秘匿技術は創造術とは一切関係の無い「科学」になるのである。

しかし、いくら国同士の戦争の為に創造術以外の技術（即ち、科学技術）を用意しておくといっても、それを使いたくなってしまうのが人間の性さがという奴だ。

では、科学技術の効率的な使用場所とは何処で、何の為に使うのかと言えば、それは創造学院で、学生創造術師アマチュアの育成の為に、だった。

現状として、世界的に創造術師が不足しているのは国の上層部を長らく悩ませている案件だ。レイズ創造術師育成学院も、正式には「ディブレイク王立レイズ創造術師育成学院」となり、国の頂上ツラである王族が、色々な面で学院を援助、支えているのだ。

国は、学生創造術師の育成に力を入れている。

その事実は、創造学院を、発達した科学技術の利用場所にも秘匿場所にもびつたりにしたのだ。

そういう、少しだけ黒い裏事情があつて、学院と「外」ではとても大きな技術差があるのだった。

だが、いくら学院の技術が発達していると言っても、食堂の料理は調理師のおばちゃんてまひが手間隙と心を込めて手作りしてくれている。

まあ、その調理師のおばちゃんてまひの人数も多いので、然程待たずに料理は出てくるのだが。

カウンターで、まず晴牙が注文した料理をおばちゃんから受け取った。

「ありゃ？　なあ、食堂のおばちゃん。今日マズルカさんは？　い

ないのか？」

「ああ、何かねえ、今日は用事があるらしいんだわあ」

晴牙とおばちゃんの話聞いて、レゼルは首を傾げる。

「マズルカさん？」

独り言のような彼の質問に答えたのは、レゼルの後ろにいたミーファだった。

「二年にいるディブレイク王国の王女様のメイドさんよ。食事時は王女様のお付きをもう一人のメイドさんに任せて、食堂の手伝いをしているの」

「へえ……」

レゼルが肩越しに顔だけ振り向くと、彼女は唇を小さく尖らせていた。

「何よ、レゼル君。メイドさんが好きなの？」

「いや、そんな嗜好は全く無いが」

無い。無いのだが、今、酷く既視感デジャビュを感じたのは気の所為だろうか。

レゼルは顔の向きを戻し、カウンターに肘を付いておばちゃんに「貴女の笑顔、百円」とか訳の分からん事（ちよつと失礼な言葉に聞こえる）をほざいている晴牙を押し退け、嫌そうな顔を隠し切れず苦笑いしているおばちゃんからシチューと珈琲の乗ったトレーと、パスタにサラダ、紅茶の乗ったトレーの二つを素早く受け取る。

ところで、「円」とは日本の金銭の単位だ。因みにディブレイク王国は「ソル」、西の大国は「\$（ドル）」、大陸の南の小国家群は「ユーロ」である。

「あ、レゼル、大丈夫です。それくらい、自分で運びます」

左隣にいるセレンが手を伸ばしてくる。

それをやんわりと制して、レゼルは彼女に向かって微笑んだ。

「セレンはエネディス先生の補佐役で疲れてるだろ。俺が運ぶ」

「別に、彼女の寮の部屋（という名の研究室）を掃除した程度です
が……」

「いいから、俺が運ぶ」

尚も無表情で渋るセレンに苦笑しながら歩き出す。

何故か睨んでくる金髪ポニーテールの少女と、それを見て溜め息を漏らす眼鏡を掛けた少女に、先に行つて五人が座れるテーブルを探す旨を伝え、レゼルは晴牙と共に周囲に目を向けた。

第7話 THE WORLD SYSTEM・(後書き)

やっと！ やっと世界観を放出出来ました！
ずっと溜めていた設定です。……説明、モノログ分かりづらかったらごめん下さい。

ところで、昔(という程昔ではありませんが)、マクド ルドで友人が「笑顔下さい」とカウンターで注文(?)していました。店員のお姉さんは最高のスマイルをくれました。タダでした。ちょっと気分が良くなりました。

そして思った事と言えば

友人、勇気あるなあ。

と、いう事です。

それは置いといて、今私は「皆さんのアクセス下さい！」と言いたいです。切実な願いですね。

と、それも置いといて、更新時間ですが、朝の方が良いのでしょうか？ ご希望の時間などありましたら、感想とかに書いてもらえると、できるだけご希望にそえるように致します。

それ以外にも、感想・ご指摘、お待ちしております！

第8話 不安と恐怖と無感情（前書き）

今回はタイトルに反してシリアスではない話です。
では、どうぞ！

第8話 不安と恐怖と無感情

幸い、五人が座れるテーブルはそれ程苦勞せずに見付かった。

レゼル達が座った窓際の席の周りには、全く生徒が寄つて来ない窓際、といつても壁一面硝子になっていて、校門から本校舎の昇降口を繋ぐ路みち 学院通りを見渡せて、何時もは人気席らしいのだが、それを教えてくれた晴牙は、レゼルの向かいで、意外に品のある所作で天麩羅蕎麦てんぷらそばを口に運んでいる。

レゼルも自分の周りだけがぼっかりと空虚になつていている事など気にせず、ほかほかと湯気を立ち上らせるクリームシチューをスプーンで掬う。

「あ、美味い」

滑らかな口当たりと、クリームのまるやかさはかなり美味しかった。冬に食べるべし、と言つた晴牙の言葉は少しも嘘ではなく、身体がぼかぼかしてくる。 まあ、セレンの料理には負けるのだが。

「ところでレゼルさん、学院の授業はどうでしたか？」

晴牙の隣に座るノイエラが、パスタをフォークに巻きながら訊ねてきた。

巻き方の美しさに感心しそうになったが、左隣のミーファに「シユガーポット取つて」と言われてテーブルの端にあつたそれを渡しながら、ノイエラの質問に答える。

「うーん、とりあえず、数学が問題だな……」

理科はまだ授業をしていないが、数学は二時限目にやった。正直、訳が分からなかった事しか印象に残らない授業だった。

理系は本当に駄目なんだと、これから何度思い知らされるのだろうか。

ノイエラはクスクスと可笑しそうに笑う。

「語学や世界史は凄かったですけど」

「エネデイス先生に聞いたけど、筆記試験、理系以外は完璧なんだ

つて？」

晴牙が緑茶の湯呑みに手を伸ばしながら問う。

「完璧って訳じゃないが……まあ、理系はかなり苦手だ」

「最早、出来なさ過ぎて苦手という域では無いですが」

紅茶　　ハーブティーらしい　　のカップをソーサーに戻しながら、右隣のセレンが呟く。

勿論、聞こえなかった振りをしたレゼルは、ミーフアが角砂糖を紅茶に次々と落としていく光景を見ながら、砂糖の入っていないブラックコーヒーを口を含む。

因みに、食堂の飲み物は珈琲や紅茶一つとってみても、それなりに種類がある。レゼルの珈琲はエスプレッソ、ミーフアとノイエラの紅茶はピーチティーだ。味の方は、本校舎横の建物の中のカフェに劣るらしいが。

「創造術科目の方は、気味悪いぐらい天才だしさ。レゼル、どんな勉強法してんだよ」

「そりゃ、もうひたすら勉強？　特別な事は何もしてないな」

「何だよその天才気質はあ……」

眉を顰めて唸った晴牙に、レゼルは思わず苦笑してしまった。

「まあ、努力はしたし、俺は皆より半年以上も学習時間があつたからな。筆記試験はそれなりの点数取らなきゃ駄目だろ」

「筆記試験はそうとしても、理系以外の今の授業に楽々付いてきてるんだからレゼル君は凄いわよ。　あ、蜂蜜^{はちみつ}取って」

レゼルは「理系以外、な」と苦々しく呟きながら、ミーフアからシュガーポットを受け取り、蜂蜜の入った瓶を彼女に渡す。

「でも、一番凄かったのは創造術無しの格闘訓練ですね。一瞬で教官を倒しちゃったんですもん」

ノイエラが少し興奮した表情で言う。

「あー、あれな。レゼルお前、どうやったんだ？　そんな細身の身体で」

「細身か？　俺って」

「俺からしてみれば充分な」

体格の良い晴牙が箸で蕎麦を汁じゆに投入しながら頷く。

「クラスの女子達、皆密かにキヤアキヤア言っていましたよ。もう《
雲クラウド》の容姿なんて気にしていないのかもかもしれません」

ノイエラの言葉に、緋色の髪の少女がサラダを頬張りながら、金髪の少女が紅茶に蜂蜜のスプーン四杯目を入れてかき混ぜながら、一斉にレゼルに視線を送った。

「……な、何だ？」

四つの瞳に宿った眼光に少し怯む。が、少女二人のそれはすぐに消えた。

「ま、まあ、女子達はレゼルさんに話し掛けたり出来なさそうですけど」

慌てて付け加えられた、ノイエラの台詞によって。

何だったんだ、と思いつながら、レゼルは食事を再開した。

「創造術の実技授業は午後だったからなあ。レゼルの創造術、色々を見せてもらいたかったんだけど……」

「中止になったな。つーか、俺は見世物か」

晴牙に突っ込んだところで眼前に蜂蜜瓶を突き付けられた。

「レゼル君、何度もごめんね。シロップ取ってもらって良いかしら？」

「ああ、分かった」

ミーファの手から蜂蜜瓶を受け取り、元の場所に戻す。

レゼルは彼女に言われた通り、シロップ瓶に指先を伸ばした。

が、そこでピタッと停止。

「ミーファ、シロップも紅茶に入れるつもりか？」

「何を言っているの、レゼル君？ シロップって、飲み物に入れる物よ？」

きょとんとした顔で首を傾げるミーファ。その際にポニーテールが揺れて可愛いのだが、それよりも言いたい事がある。

「いや、紅茶に砂糖と蜂蜜、かなり入れてたよな？」

「砂糖八個と蜂蜜スプーン五杯よ」

正確な数量を聞いて、うっ、と眉を顰めるレゼル。それだけでも舌が痺れそうなくらいの甘さになっていると思うのだが、ミーファは更にシロップも入れるつもりらしい。

もう、彼女のピーチティーはドロドロになって飲むのに苦勞しそうな感じだ。明らかに砂糖が溶けきっていない。

「……甘くないか？」

短く、簡潔に訊ねると、

「これにシロップを足せばちょうど良いわ」

即答されて、真顔で頷かれてしまった。

のろのろとシロップ瓶をミーファに手渡しながら周りを見てみれば、セレンは気にしていないらしくパスタを小さな口に運んでいる。晴牙やノイエラはと言えば、呆れていたり苦笑していたり。どうやら、ミーファの（レゼルから見れば）異常な甘党は、もうお馴染みの事となっているようだ。

自分も気にしない事にしよう、と心に刻み込みながら、レゼルは天井近くに浮かぶ空中投影ディスプレイを眺めた。

カラフルなフォントの言葉が流れる沢山のディスプレイの中、食堂の真ん中にある一際大きなそれに目を留める。

そこには、可愛い水色の文字で、

『今日のサラダは学院の地下栽培室ジオラントで育ったものです！ 園芸部が心を込めて……』

学院に地下栽培室があったのか、とレゼルは思いながらシチューを食べる。

サラダなら、テーブルの上に三つある。ちょっと、味が気になる。

「……セレン」

「はい？ 何ですか？」

好奇心という細やかな欲オウに負けたレゼルが声を掛けると、セレンはフォークを握る手を止めた。

「サラダ、少しだけ食わし」

「レゼル君、私のサラダ食べて良いわよ」

て欲しいんだけど良いか、と言う前に、ミーファの声が被った。

左を向くと、蜂蜜瓶ではなくフォークが突き付けられていた。その先には瑞々（みずみず）しい野菜が。

「……何だ？」

「た、食べて良いって言ってるの。ほら、早く」

小刻みに野菜の突き刺さったフォークを動かしながら、ミーファはそっぽを向いて早口で言う。

表情は見えないが、耳が真っ赤になっていた。

再び、「何だ？」と思うが、食べて良いなら遠慮無く食べるまでだ。

「ありがとな」

礼を言つてフォークを受け取るうとする。

「って待ちなさい！」

フォークをミーファの手から抜き取る寸前、彼女が高速で振り返ってきた。

その顔が赤い　　が、レゼルはそんな事より、彼女の剣幕にぎよつとしてフォークから手を離れた。

「な、何だよ」

「何だよじゃ無いでしょ！？　普通、こ、ここのう時は、あ、あーん……じゃないの？」

ほれ、食べ！　とばかり野菜付きフォークを近付けてくるミーファ。

熱があるんじゃないかと心配するくらい顔が赤面し、翠色みどりいろの瞳は少し濡れているように見える。

恥ずかしいならやらなければ良いものを、と不思議に思いながら、レゼルは口を開けた。ここでレゼルが食べなければ收拾がつかないと思つたからだ。

「あ、あーん……」

囁くような小さな声が聞こえた。

野菜を口に含み、シャクシャクと咀嚼する。

「ん、美味しいな」

どうやら学院の園芸部は野菜を育てるのが上手みたいだ、と心のメモ帳に記す。

満足して、隣で手に持ったフォークを凝視するミアファは気にしない事にし、珈琲カップに手を伸ばした、その時。

「レゼル、こっちを向いて下さい」

今度は右から、心なしか苛ついた声が出た。

セレンの言葉だ。それに拒否権は無いと考えているレゼルは、素直に振り向く。

そして、眼前にあったのは野菜の突き刺さったフォークだった。

「……え？」

訳が分からないのは、レゼルだけなのだろうか。

横目で見てみれば、晴牙は面白く無さそうな目でセレンの持つフォークを見詰め、ノイエラは困惑顔でミアファとセレンを交互に見ている。

「食べて下さい」

「えっと」

「食べなさい」

「……はい」

一ミリたりとも変わらないセレンの無表情に押されて、レゼルは彼女のサラダを俗に言う「あーん」でパクツと食べた。

「……んっ、美味しいよ。ありがとな」

それでも食べさせてくれたのは嬉しいので、レゼルは笑顔になる。「どういたしまして」

するとセレンの声音も柔らかくなった。さっきまで、何が不満だったんだらうか。

そして、何だかセレンとミアファに挟まれたこの席は居心地が悪い気がする。ここだけ重力が倍になっているような感じがするのだ。

しかも離れたテーブルから途切れず突き刺さる視線が鋭くなった。主に男子から、一部女子から。

まあ、何となく理由は分かる。今日見た限りでは、一年代表で美少女のミーファは生徒に人気があるっぽいし、セレンは生徒ではなくルイサの美少女補佐という特殊な立場から、生徒達に（良い意味で）注目されている。ノイエラも頭脳明晰でしっかりした性格の美少女だし、晴牙は何処にいてもムードメーカー的な存在だ。そんな四人が《雲》^{クラウド}の容姿をして学院に入ってきた未確認生物と一緒に楽しく食事をしているのだから、睨みたい気持ちもあるだろう。

それは分かるのだが、レゼルは自分の自虐的な思考にうんざりした。

「未確認生物って……俺はUMAか」

しかし、他の生徒達には自分がそう見えるのだという事も理解していた。

口の中だけで呟いた台詞は、彼の耳だけにしか届かず霧散していった。

「レゼル」

ふいに向かいから声が掛けられた。

「はい、あーん」

晴牙がこれ以上無いくらい良い笑顔で、刻み葱^{ねぎ}を大量に搗んだ箸を差し出してきた。

レゼルは思いつきり鬱陶しそうな目で彼を見やってから、

「キモい」

そう言って一蹴した。

というか、刻み葱^{ねぎ}だけって、普通に要らないんだが。

がはあっ、とか言って葱^{ねぎ}を汁^{じゆ}の中に投入しながら仰^のげ反^そった晴牙だが、すぐに復活した。

「っーかレゼル、サラダ食いたいなら注文すれば良かったのに」

葱^{ねぎ}の浮いた汁に蕎麦^{そば}（麵）と天麩羅^{てんぷら}を浸しながら、そう言ってくる。

「いや、さつきディスプレイ見て、サラダの野菜が学院の地下栽培室^{ント}で育ったものだっていうから、どんな味かなあ、と」

「えっ、そうなの？」

レゼルの言葉に反応を示したのはミーファだった。しかし、彼女の質問はノイエラに向かっていた。

レゼルがノイエラに顔を向けると、彼女は少し吃驚した様子でパスタに伸ばした手を止めた。

「あ、そうです。レタスは私が育てたものです。今日の朝、収穫出来たんですよ」

ミーファにそう答えてから、ノイエラはレゼルを見た。

「レゼルさん、私、園芸部なんです。さつき、サラダ美味しいって言うってくれましたよね。とても嬉しかったです」

眼鏡の奥で細められた瞳が、優しい光を帯びていた。きっと、植物や野菜などの栽培が本当に好きなんだろう。

因みに、地下栽培室^{ジオフロント}では季節など関係なく栽培出来る。この設備は立派な科学技術なのだが、食べ物が無いと人間は生きていけないので、地下栽培室^{ジオフロント}の技術だけは詳しい事が説明されていないだけで秘匿はされていない。

「レゼル、朝に食べたベーグルの具の野菜も購買に売っている園芸部のものです」

セレンが付け足すように教えてくれる。

「へえ。そうなのか。あれ、美味かったな」

レゼルが言うと、ノイエラは少し気恥ずかしそうに、けれどかなり嬉しそうに微笑んだ。

「……ベーグル？ この食堂にそんなメニューは無いはずだけど。購買にも売って無いわよね？」

ミーファが、もう何か異物という表現が正しい気のする紅茶の入ったカップをソーサーに戻しながら首を捻る。

「セレンちゃんの手作りだよ」

晴牙の言葉に彼女は、

「……セレンって、料理出来たの？」
何時からセレンを呼び捨てで呼ぶようになったのだろうか、と考
えるレゼルの両脇で、朝のセレンと晴牙の間で交わされたような会
話が再現された。

五人共に食べ終わり、空の皿とそれを乗せたトレーを持って立ち
上がったレゼルの耳に、

「……ねえ、大丈夫かな、《墮天使》たてんし。かなりの上位個体なんだし
よ？」

そんな、不安そうな声が聞こえてきた。

それはあつという間に食堂全体に伝わり、生徒達の不安や怯えを
煽る結果となってしまう。

「リレイズの街、壊滅したりしないよね？」

「……こんなところで死ぬ訳ないよな……」

「学院長やエネディス先生も北側戦闘区域に向かったって」

「……ヤバインじゃないの？」

「一度も《墮天使》と戦った事のない俺達が、今日急に戦う事にな
ったら……」

「戦えるのかな、僕達」

《墮天使》が墮ちてくるという報告は一般人には伝わるものの、そ
れに関する詳しい事は、創造術師クリエイターでなければ教えられない。

そしてその創造術師の中には、学生創造術師アシチユアも含まれる為、学院
には正確な情報が伝わる。それは生徒達の将来を考えると大切に重
要な事だが、逆に不安を齎もたらす事にもなるのだ。

特に、《墮天使》は上位個体だとか、《曆星座》トユウエルプである学院長や
ルイサが学院には不在だという情報は。

「……なあ、晴牙」

「何だ？」

生徒達の不安そうな声を聞きながら皿&トレー返却カウンターに向かう途中、レゼルは晴牙に声を掛けた。

「今、不安か？」

「……そりゃまた、ストレートな質問だな。まあ、正直不安だ。《墮天使》なんて街には滅多に落ちて来ないし」

「……やっぱ、そうだよな」

「……まあ、俺はそれなりに創造術が出来ると自負してるから、他の一年程じゃないけどな。《曆星座》だってリレイズには四人もいるし」

四人　そう、四人だ。

ミーナ、ルイサ、ミーファ、そして「歌姫」と言われるディブレイク王国の王女様である。

「ミーファは？　不安か？」

ちよつと気になって、《曆星座》の一人であるミーファにも聞いてみる事にした。

「ん、私？　……まあ、誰でも少しは不安に思うし、怖いんじゃないかしら？　私は何回か戦場に出てるから、それが他の人よりまだマシってだけで」

「にしては落ち着いてますけどね、代表」

流石です、と付け加えて控え目な笑みを浮かべるノイエラに、ミーファは気恥ずかしそうな表情になった。

戦場　《墮天使》との戦いの場。

血に塗れる、殆どの創造術師の存在する場所。

「で、レゼルは？」

晴牙が返却カウンターに皿とトレーを戻しながら訊いてくる。

「え？」

「怖いかな？　《墮天使》」

「……少しだけな」

嘘だった。

学院に来るまで彼がいた場所は、《墮天使》が怖いなんて甘った

れた事を言うどころか感じる事も出来ない　　否、感じてはいけない場所だった。

いや、学院に来るまで、ではない。今もレゼルは、その立場にいる。

そして実際、レゼルは《墮天使》に対して、何の感情も持っていないなかった。

「まあ、今回は大丈夫だと思うわよ。お母さんに聞いたけど、あのエヌ・エル・エラNLFのエースがリレイズに来るらしいから
「ブラッディ様が!？」

ミーファが軽い口調で言った台詞に、ノイエラが眼鏡の奥の瞳を見開いて叫んだ。

ブラッディ、の名前にセレンの肩がピクツと震えたが、気付いたのはレゼルだけだった。

「本当にノイエラは、ブラッディ様が好きね」

「だ、だってNLFの正体不明のエースですよ！　顔も本名も不明、NLFの中だけの最重要機密事項に指定されているとまで言われている創造術師なんですよ！　格好良いじゃないですか！」

興奮して叫ぶノイエラに、食堂中から視線が集まる。

生徒達の話題が編入生の事から《墮天使》の事にシフトしたと思っただのに、彼女に視線が集まると同時、レゼルにも再び視線が突き刺さる。

ノイエラの言葉にもその視線にも居心地が悪くなったレゼルは、そそくさと返却カウンターに向かうのだった。

その後、今回の《墮天使》との戦争にはあのNLFのエース「ブラッディ」が出るという情報が広まり、生徒達の不安は少なからず払拭されたのだった。

レゼルはセレンと共に寮の部屋に戻ってきた。

生徒寮の個室には、学院長室のようなセキュリティサーバーは無く、扉にはロックが掛かる程度だ。だが、そのロックにしてもかなり厳重で、エナジー感知システムが組み込まれている。

人間の身体に流れるエナジーは、十人十色。全く同じものは一組も無いと言われている。何せ、現在世界は深刻な創造術師不足。子供が生まれればすぐにエナジーを検査をし、創造術師としての適性があるか調べる事になる折に、同じ質のエナジーは発見されていないのだ。

エナジー感知システムも科学技術だが、一般人は創造術の技術だと認識している。否、させられている。

レゼルが強化素材できている、見た目はそうと思わせない扉の前に立つ。

すると、音も立てずにスライドした。

エナジー感知システムを作動させるには、本来扉に触れないといけない。

エナジー登録は、最初に扉に触れた時に学院のメインサーバーにアクセスされ、自動で行われる。のだが、レゼルはちょっと、いやかなり細工をして自分のエナジーをサーバーに誤認させていた。それをしたのはセレンで、だからレゼルは心配など一切していない。心配しなくて良い証拠は、扉に触れなくてもあっさりと横に滑った扉が証拠だろう。

何食わぬ顔をして自室に入り、昨日、部屋には監視カメラや盗聴機が無いのを確認したが、もう一度確認して、レゼルはセレンに申し訳なさそうに言った。

「セレン、司令官と連絡取れるか？」

「はい。勿論です」

ベットにちよこんと座ったセレンが頷く。

「……悪いな。あまり、それは使いたくないんだが……学院に来たからには、頻繁に使うようになると思う」

「やっぱり、レゼルは優しいですね。でも私は、貴方の為なら何で

もします」

そう、キツパリと言い切ってくれる事は、レゼルにとってとても嬉しい事であり、彼の中の罪悪感や不安を多少なりとも消す事だ。

だが、その代わりに　　と言つて良いのか分からないが　　自分に、怒りが沸いてしまう。

しかし、八つ当たりなんて事をしたら本末転倒だ。セレンには、負の感情を表に出した表情は見られたくない。

「……司令官と、繋いでくれ」

自分への怒りを押し殺した所為で少し声が震えた。幸いにしてセレンは気付かなかつたようで、頷いて瞼を下ろした。

ベットに腰を下ろす緋色の髪の少女の前に立つ。

それから五秒程経ち、セレンが口を開いた。

「お久し振りですね、レゼル君」

しかし、彼女の口から聞こえてきたのは、彼女のものは全く違う、落ち着いた大人の女性のものだった。

「……まだ、飛空艇を離れてから四日しか経ってませんけど」

「私わたくしにとっては久し振りですよ。レゼル君の声を四日も聞かないなんて、寂しかったんですから」

その声音は本当に寂しそうだ。それがセレンの口から発されている事に、レゼルはむず痒そうな顔をした。勿論、相手に表情が見えていないから出来た所業だ。

「ところで、今回の任務の事ですが」

「レゼル君がリレイズの街・北側戦闘区域で《墮天使》を単独で殲滅する任務ですね？」

「はい。その任務に俺以外のNLF隊員が関与出来ないのは分かりませんが、そもそもNLFが出る必要があるのですか？　今、リレイズの街には十二人しかいない《曆星座》が四人もいるのですよ。他にも、正規プロ創造術師は大勢います。いくら《墮天使》が上位個体だといつても、リレイズの創造術師に任せておけば良いのでは？」

一気にレゼルが言うと、セレンの口からは多少困つたような声が

聞こえてきた。

『それがですね、今回の任務は創造術師協会クリエーターきょうかいからのものなんですよ』
「協会の？」

『はい。リレイズの街で近々、創造祭そうぞうまつりがあるでしょう？ 協会はそれを中止したくない、という事です』

「街には決して被害が及ばないように、NLFの創造術師に《墮天使》討伐の任務を与えたという事ですか。まあ、それが一番、最適とは思いますが」

『そういう事ですよ、レゼル君。協会とは無駄な争いをしたくないので、今回の任務、頼めますか？』

相手には見えない、と分かっているながら、レゼルはしっかりと頷いた。

「分かりました。情報規制は、そちらで？」

『ええ、勿論。レゼル君の事は戦闘区域の司令室のモニターにも映せないようジャミングを掛けますよ』

「何時もの事ですが、徹底していますね」

『そうする理由は、レゼル君の方がよく分かっていますよね？』

「……そうですね」

レゼルは思わず苦笑してから、セレンを通じて話している女性に本題を問い掛けた。

「それで、《墮天使》の詳細な情報は手に入りましたか？」

『ああ、そうでしたね。ルチアちゃんに君に任務を言い渡した時は、調査中でした』

危ない、伝え忘れる所でした、と女性が嘘を言う。

『《墮天使》は上位個体一体、下位個体一体です。どちらも飛行タイプのようです。まあ、他にも色々な情報はありますが……レゼル君なら、要らないでしょう。普通なら全体フクロで正規創造術師約六十人程で当たる戦闘です。……レゼル君、頑張ってください』

最後に付け足されたエールにレゼルは力強く返事をして、女性との通信を終わらせた。

「レゼル。任務に行くのですね？」

「顔を開けて訊いてきたセレンの声は、元の彼女のものに戻っていた。」

「ああ。……時間になったら、セレン、留守番頼むぞ。すぐに終わらせて帰ってくるから」

「……はい」

相変わらず、その少女は無表情だ。けれど、声には力が無かった。

「大丈夫だ、セレン。俺はお前を守り続けるんだから。 20時

迄に北側戦闘区域だから、俺は少し仮眠するぞ」

「はい。お休みなさい、レゼル」

一転して嬉しそうな声を受け、レゼルは身体をソファに横たえた。

第8話 不安と恐怖と無感情（後書き）

感想・ご指摘、お待ちしております。

第9話 夜空の要塞（前書き）

第4話にある男子寮のレゼルの自室描写を改稿しました。シャワールームがある、というところを風呂場がある、にしました。

それ以外も大幅に（というか1〜8話全部）編集しましたが、4話ほどの編集は行っていません。

誠に勝手に申し訳ございません。尚、この改稿に因るストーリーの変更などは全くありません。読み直す必要も無い……です。多分。（す、すみませんっ）

第9話 夜空の要塞

想像と、創造は、表裏一体である。

イメージイメージしたものを、創造する。クリエーション

想像する。

彼女が笑顔になれる未来を。

創造する。

ただ、彼女の為だけに。

リレイズの街・北側戦闘区域、司令室。

半円形のその部屋では、十数人のオペレーターがタッチボード上で忙しく手を動かしていた。

半円の弧の部分にある大型モニターに視線を送りながら、先程からオペレーター達は戸惑っていた。

理由は、唯一つ。

モニターが、何をしても起動しないのだ。

モニター自体が故障しているのではない事は確認済みだった。となれば、原因は何処からかの妨害である。

しかしオペレーター達は、どうして妨害などが行われるのか分からなかった。考えてみれば、当たり前だ。妨害をしたって、ディブレイク王国には何一つメリットなど無いのだから。

他の国からの妨害なら理解出来るが、この妨害電波は国内ジャミングからのものだ。戦闘区域司令室のモニターにハッキングするなど、国内の上層部でしか出来ないという認識は、油断や余裕ではなく事実だからだ。

「これはどういう事だ!」

苛ついた男性司令官の怒号が飛ぶ。

しかし、八つ当たりしたいのはオペレーター達も同じで、司令室の雰囲気は悪くなるばかりだ。

その重い空気が最高潮に達しようとした、正にその時だった。何をしてもピクリとも反応を示さなかったモニターが、起動したのだ。

一瞬、オペレーター達や司令官の表情に希望が戻る。が、それは本当に一瞬だった。すぐに彼らは、訝し気な顔をする。

モニターに映っていたのは、若い男だった。綺麗な黒髪、茶色の瞳。人の良さそうな、優しそうな顔をした東洋人の青年だ。

『初めまして。ではない人もいるかと思いますが、この場ではそう言っておきますね』

モニターの中の人物が、見た目に違わぬ丁寧な口調でそう挨拶した。

『僕はNLFの創造術師クリエイターで、榎倉えくらと言います。申し訳ありませんが、今回の《墮天使》討伐作戦に於いて、作戦指揮はNLFの方で行わせて頂きます。その為、モニターを起動不能にさせて頂きました。ご了承下さい』

モニターの向こう側で深く頭を下げられ、司令室を沈黙が包んだ。NLFの名を聞いた時、司令官は勿論、オペレーター達も怯んだ表情をしたのは仕方無い事だろう。

NLF 世界を回り、《墮天使》を殲滅し続ける最強の創造術師達の組織。

どの国家にも属さず、あの創造術師協会とも協力関係という対等な立場を維持する、自治組織。

戦闘区域は、創造術師以外は立ち入り禁止の区域。当然オペレーター達も、司令官も、創造術師である。NLFの名前がどれだけ創造術クリエイターの世界に影響があるか、彼らが知らない訳はなかった。

創造術師なら、誰でも知っている。

NLF。

Night Langgit Fortress .

夜空の要塞。

その、名前の意味を。

オペレーター達や司令官は、妨害電波を掛けてきているのは国の上層部だと思っていた。

しかし、実際は、違った。

国の上層部も逆らえない、創造術師協会ですえ大きな態度は取れない相手　NLFだった。

NLFは、《墮天使》を殲滅する為だけに存在する組織。国と国の間、街と街の間の境を《墮天使》から守る者達の、戦闘部隊。

NLFという組織が存在しなければ、世界は《墮天使》によって壊滅していたとまで言われているのだ。例えNLFが様々な国家や団体の支援を受けているといっても、それに託けて逆らう、なんて事をするには、NLFに恩がありすぎる。それは、何処の国家も組織も団体も同じ。

恩がある、という事だけではなく、NLFの背後には沢山の勢力が控えている。外見では中立を保ちながら　いや、実際保っているのだが　NLFに支援をする国家や団体が、NLFの背後にいるのだ。だから、NLFには逆らえない。これは何を示すか。

答えは明白。

NLFに敵対した国はNLFという守護神に見棄てられ、他の国家や団体とも敵対してしまう。

つまりは、そういう事。

NLFには逆らえない。

それは正規創造術師達の常識であり、掟であり、暗黙の了解だった。

戦闘区域司令室のモニターにあっさりハッキング出来たのも、それをしたのがNLFというならば、納得出来る。出来過ぎて、しま

う。
だが、どうして今回の《墮天使》との戦争に、NLFが関わってくるのか。

その理由くらいは訊ねなければ、司令官もオペレーター達も納得は出来なかった。

NLFは戦闘区域など関係なく、《墮天使》の現れたその場所で戦争を始める。その殆どが、国や街の境である荒廃した土地や人間の影などある筈もない密林などの上空、だ。

NLFは《墮天使》を地に着かせない。

空で、戦う。

だから、NLFは、正しく

夜空の要塞。

そついう名前のあるNLFだからこそ、何故地上の戦いに介入してくるのか、分からなかった。

司令官が僅かに震える声で、NLFの創造術師だと言う、榎倉と名乗った青年にそれを問うた。

『貴方は、今回の討伐作戦　いえ、殲滅作戦にNLFの創造術師が出る事を知っていますね？』

モニターから帰ってきたのは、質問だった。しかし、司令官はそれに不満を覚えられる筈もなく、頷いた。

「はっ、勿論です。ブラッディ殿が参加されるとの朗報を承つけたまわっております」

『参加される、ですか？　おや……何処かで食い違いでもあったのでしょうか？』

「……と、言つと？」

『いえ、今回は創造術師協会の方からの頼みでブラッディ君をそちらに行かせるのですが……』

創造術師協会の頼み。

その言葉に司令室がざわついたが、それはすぐに収まった。

榎倉の、驚愕すべき一言の影響で。

『しかし頼みを受けるに当たり、ブラッディ君を単独で戦場に出す、

という条件をNLFは提示したのですが」

「……単独、ですか？ ブラッディ殿は《墮天使》と一人で戦われると？」

信じられない、という響きを含んだ司令官の声に、あっさりと榎倉は頷いた。

「ええ。ですから、作戦指揮はNLFの一存という事で宜しくお願い致します」

「で、ですが、今回はプロが六十人は動員されてもおかしくない戦争です！ いくらNLFの創造術師と言っても、《結界》を張る結界師の防衛班もいなければサポートをする後衛班もいないなんて！ とても一人では……」

声を上げたのは司令官ではなかった。ここにいるオペレーター達の中で一番創造術師としての実力がある男だ。（司令官は含まない）

「何を言っているのですか、貴方は？」

しかし、返ってきたのは冷めた青年の声と表情だった。

「そこは戦闘区域でしょう？ 我々NLFの戦場である空に比べれば、そこは大して強い《墮天使》は落ちて来ない筈です。今回は上位個体が墮ちるそうですが、それにしただったかが一体。ブラッディ君なら一瞬ですよ」

何て事も無さそうに言う榎倉に、司令室にいる人間は何も言えない。

「では、僕はこれで失礼させていただきます。今回はNLFにお任せあれ」

榎倉が一礼する。

プツン、と微かな音を立てて電源を落としたモニターは、やっぱり何をしても起動しなかった。

広大な荒れ地に、一人の少年が立っていた。

細身で中背。漆黒の戦闘服に身を包み、耳には大型の通信機インカム。これは少年が創造術で創造したものだ。よく見ると、少しだけ発光していた。ただそれは、黒い光だ。

吹き荒ぶ砂すまの混じった風が少年の灰色の髪を靡なびかせる。

少年 レゼル・ソレイユは、リレイズの街・北側戦闘区域の《墮天使》迎撃区域 戦場で星の瞬く夜空を仰いでいた。

五分前とは違い、しつかりと、この場所には星光が降り注いでいた。空も何処か、透き通って見える。

「……《誘導結界》が解除されたか」

そんな空の様子を見て、レゼルはポツリと呟いた。

頭上に広がる夜空よりも深く綺麗な漆黒の瞳は、空から視線をずらした。

右耳の通信機インカムから若い男の声が聞こえたからだ。

『ブラッディ君、準備は出来ましたか？』

「はい、俺は何時でも行けます。 榎倉さんは作戦指揮権を奪えたんですね？」

戦闘区域から《誘導結界》が消えたという事はつまり、NLFが今回の戦争の作戦指揮権を手に入れたという事だ。

『またまた、奪うなんて物騒な。貰ったんですよ、正当な手段で』
と、榎倉は言うが、その正当な手段とはつまり脅おどしである。

それはレゼルも分かっていたし、だから奪えたか、なんて言い方をしたのだ。ただ、それくらいの事は何でもないので、彼は深く突っ込まない事にした。

『ちょっと食い違いがあったみたいで、司令部の皆さんはブラッディ君が一人で戦う事を知らなかったですけどね。誰かが情報伝達を妨害した可能性があります』

「え？ 大丈夫なんですか？ 顔を見られるなら俺、今回の任務、放棄しますよ」

『ああ、大丈夫ですよ。ちゃんと伝えましたから。貴方方の戦力は

金輪際要らないですって。だから他の創造術師は戦場には出て来ません
せん いえ、出て来れませんよ」

「……うわあ、ストリートに言いますね」

『だって本当の事でしよう?』

「……俺はそこまで自分を評価してはいませんが、確かに助けは要りません」

そう言つて、レゼルは再び夜空を見上げた。

「……来ました」

彼が呟いた直後、それは起こった。

星の浮かぶ空に、波紋が広がった。

湖に大きな石を投げ入れた時のように、それは何処までも続く夜空を歪ませていく。

その、中心。

世界が震え、怯え、恐怖した、その瞬間。

ゆっくりと、「それ」は姿を現す。

空から、天から、遥か彼方から。

世界の脅威は、堕ちてくる。

「どつという事だ!」

戦闘区域、創造術師達の控え室。

そこにはこれから《墮天使》との戦争に臨む筈だった創造術師達が集まっていた。

総勢四十人程の創造術師の中に、《曆星座》^{トユウェルブ}が二人いた。

天才、ミーナ・レイズと、死神、ルイサ・エネデイスである。

学院からここに駆け付けた二人は、NLFのエース「ブラッディ」が戦争に参加する事を知っていながら、いや、知ったからこそ、普段は戦闘区域で《墮天使》と戦う事が本業である正規創造術師達に任せる戦争に出てきたのである。

正体不明のNLFのエースとやらの顔を見てやろう、と。勿論、今回墮ちてきたのが上位個体だと言う事もあるが。

NLFのエース、そして《曆星座》が二人もいるとなれば、彼らを抜いて他の創造術師など四十人程度で十分だ。この中から援護サポートに当たる後衛班や《墮天使》を弱体化させる《結界》を張る防衛班に行く創造術師もいるから、戦いメインの前衛班はミーナやルイサ、NLFのエースも含め十人にも及ばない。四十人の中の半数は結界師だからだ。

だが、これで《墮天使》は倒せただろう。あっさりと。なのに。それなのに。

どうして、何故、NLFのエース以外には出動の禁止が命じられるのか？

もう、《墮天使》が現れる時刻が目前に迫っているのに。

何故、戦場に出る事が出来ないのか？

何故、NLFのエースだけが単独で戦う、という情報が伝えられるのか？

どういう事だ、そう言葉を漏らしたルイサは困惑していた。

「ルーちゃん、ちょっと落ち着いて。冷静に状況を整理しよう」

そんな彼女に、白い戦闘服を着たミーナがそう声を掛けた。

「……ああ、すまない、ミーナ。そうだな、落ち着かなければ」

こんな時でもバレバレの猫被りを続ける学院の長に、ルイサは素直に頭を下げた。

ルイサとミーナは同じ《曆星座》という事もあって仲が良い。親友、と言っても憚はばかられない間柄だった。

「まず、NLFのエースが今回の戦争に介入して来たのは、創造術師協会からの要請だったね。創造祭を中止したくないって理由で」

「ああ。創造術師不足の問題は深刻だ。創造術師の才能がある者が創造祭で創造術に興味を持ってくれるかもしれない。中止したくないのは同意だから、NLFのエースが来てくれるなら文句などある筈もない」

「私達の実力が協会に信頼されてないのは気に障るけど、私達は本職教師だからね。《墮天使》も墮ちて来たのは一年振りで、私はもうここ二年は戦場に出てないし。協会は確実性が欲しかったみたいだから、私達じゃなくてNLFに要請が行くのは納得出来るね」

「そうだな。……だが、戦うのはNLFのエース一人。エースに自殺願望があるとしたら、思えない」

苦虫を噛み潰したような顔でルイサが言う。

ミーナはそれに頷いた。《墮天使》と一人で戦うなど、無茶だ。

一体NLFは何を考えている。いや、何を考えているかは分かる。

正体不明の、NLFのエース。

彼（もしくは彼女）の正体を公開したくないのだろう。どんな理由があるのかは分からないが。

しかし、いくらNLFと言えど《暦星座》を二人も押し伏せてまで頑なに隠すエースの正体とは、一体？

エースの正体を掴めば、NLFという守護神を完全な味方に付ける事も可能かもしれない。

だから、ミーナやルイサは戦場に出てきたというのに。

戦場に出る事を禁止されてしまえば、NLFの正体を掴めない。

「……司令室」

紫色の戦闘服に身を包んだルイサがポツリと呟いた。

「……は、駄目か。司令室には《墮天使》との戦いを援助・記録するモニターがあるが、そこはもう機能不能になっているだろうな」

「そうだね。NLFによって北側戦闘区域の監視システムは全て麻痺したと考えて良いよ」

「しかし、NLFのエースが一人で戦う、という情報が来るのが遅かったよな……」

「それは、私が情報伝達をちょっとだけ妨害したからです」

音も無く開いた控え室の入り口からそう言って入って来たのは、メイド服を着た背の高い女性だった。

金茶色の髪に瞳。お母さんとかお姉さんが持つような暖かい雰囲気

気を纏う彼女は、美人と形容しても良い容姿をしている。戦場の一歩手前である控え室に、少しほんわかとした空気が漂った。

ミーナやルイサも目を見張るような美人だが、それは人を安心させるような類たぐいの美しさではない。

「マズルカさん？ 何故貴女が戦闘区域に？」

そう首を傾げるミーナだが、彼女 マズルカがここにいる事に驚いたような様子は全く無かった。恐らくミーナは、マズルカがここにいる理由をある程度予想しているのだろう。

ルイサに至っても、よく考えてみれば彼女がここにおいてもおかしくはない、という結論に到っていた。

マズルカは苦笑気味にクスリと笑って、

「姫様に頼まれてしまったのですよ。NLFエースの顔を見てこいと」

「……やはり、そうか。生徒は全員、学院寮に閉じ込めたからな」

「《暦星座》であるミーファと歌姫ちゃんは連れてきても良かったんだけど、それじゃ他の生徒が不安を覚えるかもしれないかったんだよね。マズルカさん、歌姫ちゃんにはそう伝えてくれるかな」

ルイサとミーナが口々に言う。

ディブレイク王国のあの聡明な王女様なら、今回の事態に黙って学院寮に引き籠っている筈はない。自分が動けないなら自分の腹心のメイドを動かす、という訳だ。確かに、外出規制は生徒だけに命じたものだった。

「大丈夫ですよ。姫様はミーナ様の外出規制めいの命に納得していらっしやいましたから」

ニコツ、と優しく笑ってから、マズルカは真面目な顔になった。

「話が元に戻りますが、NLFが創造術師協会の要請を受けた時、NLFは単独での戦闘を提示していました。しかし、その事の創造術師協会からの伝達を私が妨害しました。姫様の命令であるNLFエースの顔を見る為です」

「王族権限を使ったな？」

「正解です、エネデイス様。姫様の、ですけど。NLFに睨まれるのは好ましくありませんが、NLFエースの正体を知ってしまったこちらのもの。守護神（NLF）はディブレイク王国の味方に付かざるを得ません」

肩までの髪を揺らして先程と変わらない笑顔で笑う彼女は、何処か妖しく見えた。

流星は王族御用達のメイドさんと言う事だろうか。

「しかし、先程NLFに司令室のモニターをハッキングされてしまい、結局、NLFのエースが一人で戦う事になってしまいました」
声を潜めたマズルカの言葉にミーナとルイサがぎよっとする。

「……それは、伝達妨害をした事がNLFにバレたという事？」

メイド服を着た「創造術師」に、ミーナは声を小さくして訊ねた。「そうですね。でも、ハッキングした榎倉という方は、あまり気にしていないようでしたし、何処の誰が妨害したかなんて確証は取れないでしょうから大丈夫だと思いますよ」

その回答に、ルイサは安堵したような息を小さく吐いた。

マズルカの表情は真顔だったが、そこにも少しだけ焦ったような色が浮かんでいた。

NLFを敵に回せば、ディブレイク王国は終わりだ。

だが、敵に回してしまう前にNLFエースの正体を暴^{あは}ければ、どうだろうか。

これ程、頑なになって隠す人物を知られたら、NLFはディブレイク王国を見棄てられなくなる。

今は、チャンスだった。

NLFのエースと共に戦場に出る事を禁止され、監視システムをダウンさせられ、司令室のモニターで《墮天使》とNLFエースの戦闘データが取れなくされても、諦める訳には行かなかった。

だから

この時、三人の創造術師　ミーナ、ルイサ、マズルカのこれからの行動予定は決まっていた。

だから

こっそり戦場に忍び込んで、NLFのエースとやらの顔を見てやるうではないか。

その戦いを、しっかりと眼に刻んでやるうではないか。

三人の女性は気配を消すと、そっと（こっそりと、とも言つ）控え室を後にした。

空から、異形の怪物が墮ちてくる。

レゼルはそれを見上げながら、意識の集中を始めた。

その集中は一秒もしない内に形になり、彼に力を与える。

創造術、という形で。

灰色の髪が煌めく銀色に変わる。

夜空よりも深かった漆黒の瞳が、雲が晴れるように蒼穹の青に変わる。それはもう、世界から失われてしまった色。

彼は『能力』の創造をしながら、無表情にその場に佇む。

それは、真上にいる怪物になど何一つ恐怖を感じていない態度だった。

砂嵐が巻き起こり、レゼルの姿を覆い隠す。

その代わり、のようなタイミングで。

やっと、『墮天使』が姿を現した。

全長は五十メートル程だろうか。流石（？）、上位个体だ。街の戦闘区域に現れるには大きい。

その姿は、あれに似ている、とレゼルは思った。

古代 世界に朝があつた頃に棲息していたという昆虫。

「かまきり蟪蛄」。

だが、背中の羽は左右三つずつで六枚。その羽は目一杯広がり、

ぶつぶつぶと耳障りな音を戦場に響かせている。障害物の無い荒野に、羽音は己の存在を誇示するように空気を震わせる。

大きな一つ眼には光が無く、しかし生々しい艶を持つ眼球がぎょろりと動いてレゼルを捉えた。

硬そうな体表は、人間の力では絶対に傷一つ付かない事を窺わせる。

足はざつと数えて十本程。今はぶらん、と垂らしているが、その関節は力強い筈だ。それをレゼルは経験則で知っている。

そして、前足の二本にはギラリと光沢を放つ鎌が付いていた。もしその鎌の斬撃が街に放たれたなら、人間は言うまでもなく建物ごとリレイズの街は刈り取られるだろう。

戦場に螻蛄型の《墮天使》の影が落ちる。

レゼルは身体の中で練った融合体を脚の筋肉に吸収させ、それに耐えられるように身体全体の細胞にも融合体を送り込み、強化した。五月蠅い羽音を不快に思いながら、上空を飛ぶ螻蛄に跳躍して肉薄しようと脚に力を込め

止めた。

右耳の黒い大型通信機インカムから、微かなノイズが聞こえたからだ。NLFの創造術師である榎倉とは未だに通信が繋がっている。まだ何か伝える事があったのだろうか、と思ったのだが、通信機インカムの向こうから響いてきたのは女性の声だった。

『はあい、レ……つと、間違えたあ？ はあい、ブラッディ君？』

「ルチアさん？」

相手は中途半端口りのルチア・ヌ・セヴェリウムだった。

『むっ、今、失礼な事を考えたでしょ？』

「いえ、特にそんな事はありませんが」

『いえ、特にそんな事はありませんが』

レゼルと榎倉の声が被った。

『……………』

「……………」

「……………」
「……………」
それぞれインカムの通信機を通して、三人は沈黙する。

この間、レゼルは《墮天使》を完全無視していた。キイヤアアアア、と赤子の泣き声のような咆哮を上げての威嚇動作も、まるで視界に、耳に入っていないかの如く、無視。

「……………」えっと、それでルチアさん、何ですか？」

「そうですね、急に通信割り込みしてきました。貴女はこの街であまり派手に動けない筈では？」

「……………」これだから男はッ……………」！」

疑問符の付く口調が消えた声は怒りに震えていた。

レゼルは「男に手酷く振られた経験でもあるのだろうか」と、かなり失礼な事を考える。

「ま、まあ……………」あたしは優しいからね？　こんな見た目でも貴方達より断然大人だから、許してあげようじゃないの？」

自分が外見ロリ子供だって事、自覚していたのか。

思わず口に出しそうになった台詞をレゼルは何とか喉のどで食い止める。

「……………」ところで本題だよ？　あのね、諦めが悪いというか何と云うか……………」創造術師三人がブラッディ君の顔を見たくて戦場に忍び込むつばい？　全く怪けしからんね、ブラッディ君はあたしのものなのにい？」

「何時から俺はルチアさんのものに？」

正直、嫌である。

「……………」だつて、レ……………」じゃない、ブラッディ君、赤毛ちゃんの事しか見ないんだもん？　妬ねたいちゃうよ？」

彼女がさつきから途中で口籠もっているのは、レー君、と呼びそうになっているからである。

この通信を傍受なんて出来る訳が無いのだが、この三人は全員慎重派だった。ただ、仮に傍受されたとしてレゼルの名前を隠す事がどれだけ役に立つのかは怪しいものだったが。

「何でルチアさんが妬ねたくんですか？」

『……潰れてしまえ、鈍感男』

「は？ ……それは、俺にこの戦いで死ねと？」

『……』

「……」

『あの、二人とも、良いですか？』

沈黙を破ったのは、珍しく困惑したような声を割り込ませた榎倉だった。

「あ、すみません、榎倉さん」

そう言っつてレゼルは強化した脚力を使っつて右に飛んだ。

戦場を飛ぶ《墮天使》が無理矢理引き裂くように口を開けて鋭い牙を覗かせ、そこから粘着質な唾液と思われる気持ちの悪い塊かたまりを放つてきたのだ。

びちゃびちゃっ、と音を立てて唾液の塊は地面に着地。ただその場所は、今レゼルがいる場所から遠く離れていた。

飛行蟻螂の影から一回の跳躍で抜け出た彼は、再び通信機インカムに意識を戻す。

『それでルチアー又さん、三人の創造術師とは？』

『天才と死神、後は女の創造術師が一人だよ？』

『……それはまた、面倒臭いですねえ……』

インカム通信機の向こう側で会話が交わされ、榎倉が溜め息を漏らした。

感情的に弱くなつていゝる所を彼はあまり見せないなので、ちよつと驚く。

「……榎倉さん、疲れてますか？」

『そうですね。ルチアー又さんや君達二人が今、飛空艇には不在だから』

声の雰囲気から榎倉が苦笑したのが分かった。

君達二人、とはレゼルとセレンの事だ。ちよつとだけ申し訳無くなつてくる。

『それで、どうしましょう？ ルチアー又さん、追い払えますか？』

『無理に決まつてるよ？』

ルチアの答えは即答だった。

『まあ、そうですね』

榎倉もそれが分かっていたようだ。

ルチアも《曆星座》とは言え、あちらは《曆星座》が二人＋。
この戦力差は幾ら何でも厳し過ぎる。

そもそも、ルチアが三人を追い払うなんて派手な行動が出来るなら、レゼルはここにいない。戦場には彼女が出ていた筈だから。

「まあ……大丈夫ですよ、榎倉さん。俺の方で何とかしますから」
『本当ですか？ ……すみません、余計な労力を掛けさせてしまつて』

「いえ。元と言えば、俺が《雲》^{クラウド}なのがいけないんですから」
真摯にすまなさそうにする榎倉にちよつと軽い口調で言う。

NLFのエース、コードネーム「^{ブラッディ}血塗れ」の正体がレゼル・ソレイユだという事を隠す理由。

それは、レゼルが《雲》だからだ。

世界の守護神NLFに《雲》がいると知られればパニックが起こつてしまう。それは、誰もが避けたい事態だ。

『……ブラッディ君、では、宜しくお願いしますね』
少し間があつて、榎倉の声がした。

『……天才と死神ともう一人は肉眼でブラッディ君の戦いを見るみたいだね？ 戦場に忍び込んでくるまで、後一分て所かな？』

「ありがとうございます、ルチアさん」

と、ここまで唾液塊を避けながら会話をしていたレゼルだが、^{インカム}通信機に向かつて「静かにして下さい」と伝えると、立ち止まった。^{インカム}通信機からは、何も聞こえなくなる。

部外者 戦場に忍び込んでくるという三人 の目に触れないようにするには、早い話、壁を削ってしまえば良い。

部外者を徹底的に拒み、それでいて中の《墮天使》にも有効的な壁を。

「あれをやるか……」

ポツリ、と眩く。

全長五十メートルの《墮天使》を囲む壁を創造するなどという広域創造は疲れるのであまりやりたくはないのだが、仕方無い。

身体の中で渦巻いていた膨大な融合体を一気に体外に放出。

送り込むのは、荒廃した大地の下。

地面が隆起し、地震が起きた。ゴゴゴゴツ、という重低音が蟻螂型《墮天使》の羽音を掻き消す。

その瞬間。

レゼルと《墮天使》を囲む柵のように、柱のように、巨大な火柱が幾つも噴き上がった。

第9話 夜空の要塞（後書き）

Night 英語で「夜」。

Langit フィリピン語で「空」。

Fortress フィリピン語で「要塞」。

あ、要塞（fortress）は英語でも変わりませぬね。
バラバラですみません。

空は「sky」でも良かったんですが、何と云うか、字面？
すっ、すみません！（今回2回目……）

第10話 一瞬戦争（前書き）

第9話がかなり「続くよ!」的な所で終わってしまったので、日曜日を待たずに投稿します。勝手に申し訳ありません。

この第10話が物語の一つの区切りになっております。
では、どうぞ!

*何か色々と編集していますが、ストーリーに変更は全くありません。

第10話 一瞬戦争

「インフェルノ火焰地獄」。

レゼルが大地の下に送り込んだ融合体は、巨大な火柱となって《墮天使》を取り囲んだ。

大地の下で創造したマグマが、サークル状に噴火して壁になり、戦場を灼熱の地獄と化す。

勿論、そんな場所の中心に人間が居られる訳はないのだが、レゼルは涼しい顔をしていた。

コントラクション構築したマグマの熱が自分の身体に届く前にその熱をバニッシュ消失させているのだ。

しかし、言葉では簡単に聞こえても、その技術は驚嘆すべきものだ。まず、現存する創造術師達クリエイターの誰も、そんな事は出来ないのだから。

例えば、掌の上に炎を創造するとする。それで物を燃やすと、当然出てくるものがある。炭素と酸素が燃焼によって化合した二酸化炭素だ。そうして放出された二酸化炭素は厳密には「創造物」ではない。炎は「創造物」だが、それで物を燃やした結果発生した二酸化炭素は、創造術師が構築したもので、ではない。つまり、二酸化炭素を創造術師が消失させる事など普通は出来ないのだ。

だから、マグマを創造した結果発生した熱も、「創造物」ではない。それを消失させる事なんて、どう考えても無理なのだ。だが。

レゼルは、それをしていた。彼にはそれが、奇跡とも言って良い技が、出来た。

これも言葉にしてみれば簡単である。

レゼル・ソレイユが創造術師として優れている点とさえいえば、それは第一に融合体の操作技術が飛び抜けている事だ。それだって努力に裏打ちされた技量だが。

エナジーとは違って、星の光と同調させた融合体は操作が難しくなってくる。

融合体を体外に放出して創造武器を創り手に握る、という「物の創造は、自分からゼロ距離の創造で、融合体の操作はあまり難度の高くない創造と言える（距離だけを考えた場合）。だが、「火焰地獄」は《墮天使》を囲む為に自分から三十メートルは離れた創造しかもサークル状という広域創造。融合体の操作難度は最高値に近いだろう。学生創造術師でしかも本来、創造術が使えない筈の少年がそれを創造したなど、普通に考えれば有り得ない事だった。

そこから、少年　レゼル・ソレイユの圧倒的な融合体操作技術の高さが窺える。

彼は今、その技量を奮い、発生した熱に融合体を注ぎ込んでいるのだ。熱、という曖昧な実体のないものに融合体を注ぎ込むという事はどれ程の難度なのか。それを訊かれれば、大半の創造術師は震え上がってしまうだろう。

熱に融合体を注ぎ込み、その瞬間、炎から発生した熱諸共、消失させているのだ。注ぎ込んだ融合体を消失する過程で無理矢理熱も消してしまっているのである。

しかも、熱は「一つ」という枠組みに囚われない。今、レゼルがやっている熱消失は、「広域創造&多重創造」ならぬ、大規模な「広域消失&多重消失」だった。

この壁がある限り、外からレゼルの姿を見る事は出来ない。例え、《曆星座》であろうとも。

火焰の壁は《墮天使》にも有効だ。熱をモロに受けた蠅螂は、苦しそくに咆哮を上げている。

「熱に弱いのか」

言葉に出して確認して、レゼルは予定を変更する事にした。

最初は取り敢えず力押しで行こうと思っていたのだが、あの硬そうな体表を貫くのは骨が折れそうだし、そうと分かれば熱に弱いという弱点を利用しない訳にはいかない。

炎の壁に急速に消費されていく空気中の酸素の代わりに自分の肺の中に酸素を創造し、煙や二酸化炭素も熱消失ヒート・パニッシュのように消し去りながら、レゼルはそう考えた。

蟻螂が唾液塊を飛ばしてくる。それを避ける為に跳躍。唾液塊もやるうと思えば融合体を送り込んで消失パニッシュしてしまえるのだが、熱消失ヒート・パニッシュを並行して行っている今は素直に避けた方が賢明だ。

まるで重力の鎖から解き放たれたように空中を舞うレゼルは、放物線の頂点で既に武器を抱えていた。

それは、レゼルの身長を越す大きさを持つ、巨大な機関銃マシンガン。いや、機関銃というには口径が大き過ぎる。差し詰め、機関砲マシンキャノンといった所か。それも、円筒型に束ねた多数の銃身を回転させながら次々と弾丸を発射する仕組みの機関砲。ガトリング砲だった。

熱に弱いなら、火力で勝負。つまりは、そういう事だった。

対《墮天使》用の創造武器。ガトリング機関砲デストラクション・ライト「滅光」が火を噴いた。

対人用創造武器である「闇夜ヤミヨ」、「霞刀かすみとう」、「光剣ライトセーバー」などは比べ物にならない大きさを持つ漆黒のガトリング砲は、レゼルが創造して装填した弾丸を止まる事なく射出していく。

ドドドドドドドドドドドドドドッ！！と。

怒濤いかたけのような轟音が、戦場を、世界を震わせる。

空中に留まる身体の周りには密度の高い空気の層を形成。勿論これも、創造術によるもの。

発射の衝撃で身体が後ろに吹っ飛ばされる事もなければ、轟音に耳がやられる事もない。高密度の空気がレゼルの身体を受け止め、音は空気を震わせて伝わるから今のレゼルの周囲の空気は密度が高過ぎて震えない為、音が伝わらない。

毎分10000発以上という弾丸が《墮天使》の硬い体表を貫き蜂の巣にしていく。

幾ら何でも無理のある射出スピードが「滅光」の銃身をギチギチと軋きしませる。だが、創造武器は使い捨てだ。耐えられなくなっても、

再度創れば良い。ただ、構築を最初からやり直すのにはそれなりの労力が必要だが。

レゼルの創造武器の強度はトップクラス。少しくらいの無茶は平然と受け止めてくれる。

ガトリング砲の銃身の回転は止まらない。弾丸を創造し続け、銃身には融合体を供給し続ける。

再装填動作が無いのは創造銃器の一番のメリットだろう。まあ、弾丸を創造する為には当然だが生命力を消費するので、今のレゼルのように連発しまくるとかなり危険な状態になる。彼のようにエナジーの量に恵まれた創造術師でなければ、とてもガトリング砲を創造しようとは思わないものだ。

眼球や腹、羽に穴を空けられながら、蟻螂は悲鳴のような苦鳴のような咆哮を上げた。

前足の鎌を物凄い速さで横薙ぎに振ってくる。その鎌の攻撃線上にはレゼルの脇腹があった。だが。

彼の身体が呆気なく二等分される事はなかった。

その前に、二つの鎌は落下を始めていた。

右腕でホールドするように抱えていたガトリング砲「滅光」を消失させたレゼルは、巨大な双剣で前足の付け根を貫いていた。

赤く、紅く、朱く、緋い、両刃の双剣。

対《墮天使》用の創造武器 双剣「灼光」が、無慈悲に《墮天使》の躰まで届いていた。

長さが二十メートルはある刃を両手に握り、高密度空気層を消失させたレゼルは、音も立てず地面に着地した。

ドオオオン、という地響きと共に鎌も地面に着地し、砂を巻き上げる。その上空では前足を失った《墮天使》が六枚の羽を激しく震わせている。

ギィイヤアアア！ と甲高く鳴く蟻螂は、穴を大量に空けた眼球でレゼルを捉え

一閃が、奔る。

銀髪碧眼の少年は、左手に握っていた紅く輝く巨剣を消し、右手の剣で《墮天使》の躰を真つ二つに割った。

羽を殆ど使い物にならなくさせられていた為、《墮天使》の飛行高度が低くなり、空中から攻撃する必要が無くなったのだった。

本来、「灼光」は双剣として使用する対《墮天使》用創造武器だが、勿論片方だけでも使える。

ズズツ、と蠨螂の躰がずれる。左下から右上に剣を振り上げた為、斜めに切れた躰の下部が、地面に落下した。直後、羽の動きを停止した上部も落ちる。

何故、長さ二十メートルの「灼光」で全長五十メートルの蠨螂型《墮天使》を真つ二つに出来たかと言えば、それは剣の長さを増長したからである。

物理的には何も無い所からあらゆるものを創造する創造術師だ。剣の長さを増長する事が出来なければおかしい。

だから今「灼光」は六十メートル近い長さを誇っている。ガトリング砲の「滅光」にしても巨剣の「灼光」にしても、人間の力ではとても持ち上げられるものではないが、創造術師には関係ない。筋力を創造してしまえば良いのだから。というより、『能力』創造がある程度出来なければ、『墮天使』とは戦えない。

前足の二本と躰を切断された《墮天使》は、断末魔の悲鳴を上げる事も無いまま、その体躯を光の塵に変えた。まるで、創造物を消失させる時のように。

砂を含んだ風が、幾つかの光の塵を運び、「火焰地獄」の火壁に当たって儂く消える。

『ブラッディ君、《墮天使》は二匹いる筈です』
右耳の通信機インカムから榎倉の冷静な声が届いた。

「分かっています」

素っ気なく答え、レゼルは「灼光」の長さを十五メートル程に変えた。

螭螂型《墮天使》は間違いなく上位個体。だが、最初から姿を現していない下位個体の方が、厄介な能力を持つていたらしい。

夜空を見据える。

光を身体に エナジー脈に取り込み、全身に融合体を行き渡らせる。

ザッ！

大きく踏み込んだ左足が、砂と擦り合っつて音を立てる。

右腕を振りかぶり、握っていた紅い巨剣を投擲した。

夜空をバツクに一直線に飛んでいった剣は、ステルス性能を持っていたらしい下位個体の《墮天使》を、易々と貫いた。

『お疲れ様だね？ ブラッディ君？』

相変わらず疑問符をくっつけた口調で、ルチアが^{ウチ}労いの言葉を掛けてきた。

巨剣に貫かれた、螭螂型と比べれば明らかに小さい蜂に似た《墮天使》は、儚く散っていく。

「灼光」も消え、レゼルは「火焰地獄」に融合体を供給するのを止めた。

『ブラッディ君、早くそこから離れて下さいね。「火焰地獄」が消えてしまつて姿を見られる前に』

創造物は融合体の供給を止めても少しの間は消えない。

^{パニッシュ}消失、というのは、創造術師が創造物の元となる融合体の二つの

成分 星の光とエナジーを引き剥がす事で意識的・瞬間的に消す行為を言う。

因みに、何故糧倉がレゼルが「火焰地獄」を使っている事を知っていたのかと言うと、超能力 などではなく、^{インカム}通信機が小型のカメラを搭載しているからだ。

「分かつてますよ、糧倉さん。それに、セレンが待ってますから」
そう答えて小型カメラ付き通信機を^{パニッシュ}消失させ、レゼルは強化した

身体能力を使って戦場からの離脱を開始した。

『それに、セレンが待ってますから』

創造した通信機インカムから聞こえてきた少年の言葉に、ルチアーヌ・セヴェリウムは唇を尖らせた。

何か、何でも良いから話をしようと思ったのに、通信機からはブツツという無骨な音。

「あつ……」

思わず漏れる声。

『ルチアーヌさん？ どうしました？』

「何でもない！」

何時もの口調を止めて榎倉に怒鳴り、ルチアは通信機を消失させた。

「昨日 いや、今日だけど は、《融合結晶》の事とかレー君の任務とかがあってあまり楽しく話せなかったし……」

はぁ、と溜め息を吐く。

「鈍感にも程があるよ、この鈍感男……」

リレイズの街の一角にある宿屋の一室で、恋する女性の沈鬱な声が響いた。

「……どういう事だ」

創造術で視力・聴力を強化したルイサは、数分前と同じ言葉を、今度は啞然としたように漏らした。

彼女の隣にいるミーナやマズルカも、目の前 視力強化で「目の前」のように感じている の光景を、信じられないという顔で見詰めていた。

驚愕する三人の創造術師の顔は、仄かに赤く染まっている。しかし、それは恥ずかしいからとか、そんな理由ではない。夕日、というものも、世界にはもう存在しない。

彼女らの顔は、リレイズの街・北側戦闘区域の《墮天使》迎撃区域　つまり戦場に、火柱が噴き上がっている事に因るものだ。

いや、それは火柱というより、炎の柵。円状に広がった炎が、その中の戦いを三人に見せるのを拒んでいた。

「凄い……広域創造ワイドをしながら、《墮天使》と戦えるなんて。それも一人で……」

「一人で戦えるかは、まだ分からないけどね」

金茶色の髪を揺らして呟くマズルカの言葉を、ミーナがやんわりと訂正する。

「ルーちゃん、あの炎の中に監視カメラ的な物、創造出来る？」

ミーナは既に驚きから立ち直っていた。さすがはリレイズの街領主にして学院長、という所だろう。

「……いや、無理だな。距離は問題ないが、炎の熱にやられて機械類は使い物にならないだろう」

少しの間があった後、ルイサはかぶりを振った。

「そっか。ルーちゃんが無理なら私達も無理だね」

「そうですね。しかし、エネデイス様の創造物の強度を超える熱量ですと、あの炎の中では人間は即死の筈ですが……」

ミーナが同意を求め、求められたマズルカが頷き、新たな疑問を提示する。

「……どうやって熱から身体を守っている？　身体の周りに水のヴェールでも創造しているのか？」

「それは駄目、水なんて創造したら熱で沸騰して火傷だよ。あの中、百度は軽く超えているだろうし」

ルイサの発言をあっさりと否定し、ミーナは視力を更に上げた。聴力は切り捨て、眼だけに意識を集中する。

そうして見えるのは、やはり炎の壁だけだった。

「……はあ。今回は、NLFのエースの正体を確かめるのは、諦めるしかないみたいだね」

「そうですね……姫様には申し訳ありませんが……」

マズルカが悔しそうな、落胆したような表情を見せる。

それから三人は、再び炎の壁の方に目を向けた。

「やっぱり、NLFのエースは格が違うって事なのかな。《曆星座^{トユウェルブ}》に劣らないどころか、もしかしたら《曆星座》よりも……」

ポツリ、と呟いた「天才」にマズルカがぶんぶんと首を振る。

「それはありません。創造術師の世界の頂点^{トツブ}は、変わる事なく貴女達《曆星座》なのですから」

彼女　マズルカの仕える^{つか}ディブレイク王国の王女も《曆星座》の一人である。ミーナの言葉は、王女を尊敬するマズルカにとって到底受け入れ難いものだった。

そして彼女の主張にルイサが大きく頷く。

「NLFは《墮天使》と戦い続ける組織だ。仮にNLFのエースが《曆星座》より強くても、それは経験の差で《墮天使》相手の時だけだろう　もしくは、エースも《曆星座》である場合だ」

「確か……『緑』はNLFだと記憶していますが……まさか、彼女が？」

ハッ、としたようにマズルカが長身のルイサを見上げる。

「いや、それは無いな。彼女　ルチャーヌ・セヴェリウムは、炎の広域創造なんて出来ないし、彼女がNLFエースだとしたら正体を隠す必要など無い」

ルイサが水色の眼鏡の位置を指で直しながら言う。

結局、NLFエースの正体は分からないという事だった。

「……とにかく、NLFエースの創造術は謎だらけだね。どうやってら一人で《墮天使》と戦うなんて事が……」

と、そこでミーナの言葉が途切れた。

不思議に思っ、ルイサとマズルカが彼女を見、彼女の視線を辿る。

そこには、段々光の粒子となって消えていつている炎の壁があった。火力もかなり弱まってきている。

「……もう、正体を隠す必要が無い、という事？ まさか……《墮天使》が現れたのは20時47分、まだ五分も経ってないのよ」

元の口調に戻ったミーナの声は震えていた。

例え創造術師が百人いてもその中に《曆星座》がいても、五分で《墮天使》を倒すなんて無理だ。絶対に。

しかも、今回は上位個体+下位個体。一人で、しかも五分いや、ミーナ達の目に触れない為に戦場から離れる時間を考えれば、それ以下の時間で《墮天使》を殲滅した事になる。

「人間じゃ、無いわ……」

神の贈り物たる創造術を使える創造術師は人間なのか。ミーナは偶たまにその事に疑問を持つ。しかし、創造術師も人間だと思ってきた。創造術は神から人間が受け取った技術。そう、認識していたから。

しかし

NLFのエースとは、本当に人間なのか？

もしかしたら。

もしかしたら、NLFのエースは

ミーナは頭を振って、馬鹿馬鹿しい考えを意識から追い出した。

ふんわりとした金髪が揺れたのを見て疑問に思ったのだらう、ルイサが消えていく炎の壁を見ながら訊いてきた。

「ミーナ？ どうかしたのか？」

「……いえ、何でも無いわ」

世界の脅威、《墮天使》と一人で戦う。

それくらいなら、かなりの無茶だが、全力の全力になれば《曆星座》だって出来るかもしれない。

実際、レゼル・ソレイユの姉 シルバリー・クリエイター 《白銀の創造術師》レミル・ソ

レイユは、単独で《墮天使》を倒した記録を持っている。

だが、最強と言われた彼女にしたって、とても五分では倒せない。

「……考えるのは、止めましょう」

ミーナのその言葉は、ルイサやマズルカに、というより、自分に言い聞かせるものだった。

「……そうだな」

「……そうですね」

しかし、それが分かかっていても、二人は炎の消えた戦場を見ながら、そう返した。

荒廃した大地の上には、何も無かった。

人影も、《墮天使》も、無い。

ただ、地面が抉れた、戦闘の痕だけが残っていた。

本当に倒したのだ、NLFのEースは。世界の脅威を。一人で。

まさに炎の地獄とも思える光景が溶けるように消え、彼女達は一様にある感情を抱いていた。

「恐れ」だ。

他の創造術師から、自分も恐れられる事がある彼女達だが、そんな事は柵の上で上げていた。

彼女達は、司令室や創造術師の控え室のある作戦本部から抜け出した直後、体長五十メートルはあるうかという、間違いなく上位个体だろう《墮天使》の姿を見ている。

その下にいる筈の人間を求め、彼女達は戦場に入り込んだ。しかし、視力を強化してやっとその人間が見える、という場所にまで来た時には、既に戦場は炎の地獄と化していた。

馬鹿でかい《墮天使》をすっぱりと覆い、姿を隠してしまう程の広域創造。

「……収穫は無し、か。こんな事なら学院でセレンと遊んでいたかつたな」

「黙れ同性愛者」

ミーナが少し(?)苛ついた声でルイサの言葉を一蹴する。

「……帰りましょうか。私達がNLFの意向を無視して戦場に入り

込んだ事が知られないようにしなければなりません」
マズルカの沈んだ声に、ミーナもルイサものろのろと頷いた。

彼女達は、気付いていなかった。

自分達の行動がNLFにとっくに知られている事を。

知られていたから、「火焰地獄」^{インフェルノ}は創造されたのだという事を。
そして、何より。

NLFのエース、コードネーム「ブラッディ」は、ルチアや榎倉との会話プラス戦場からの離脱時間の事もあって

を。
《墮天使》との戦闘時間は、一分にも満たなかったという事

時間が少しだけ巻き戻る。

空調の効いた暖かい女子寮の自室で、一人の少女が窓の外を眺めていた。

外は暗い。だが、それは何時になっても変わらない事だ。今は時間的に「夜」だが、時計の針が「朝」と言われる時間を指しても、外は暗く、夜空で星と月は輝き続ける。

しかし、今のその暗さは何時もと違っていた。
窓の外。

遠く離れた、レイズの街・北側戦闘区域の《墮天使》迎撃区域が見える。

創造術師達が《墮天使》と戦う為の広大な荒地。 戦場が、見える。

創造学院の寮から少女が見詰めるその場所で、真っ赤な炎が燃え

上がっていた。

その高さは六階建ての学院の本校舎よりあるだろう。まるで壁のように炎は戦場の空間を引き裂き、リレイズの街を淡く照らしていた。

「あれは……」

窓の鍵に震える手を掛けながら、少女は掠れた声で呟いた。

北側戦闘区域で現在戦^{いま}っていて、あんな凄^{ワイルド}い広域創造が出来る人物。

深く考えなくても、それは一人しかいなかった。

「……ブラッディ様」

それは、憧れている創造術師の名前　いや、コードネーム。

本当の名前も、素顔も、何も知らないけれど、少女にとってNLFのEースは尊敬する人で憧れだった。

そんな人がこのリレイズの街に来ている。本当は、外出規制など無視して学院を飛び出し、戦闘区域にこっそり入り込みたかった。そんな事が自分に出来るとは残念ながら思わないけれど、もしかしたら、という事もある。試すだけ、試してみたかった。しかし、外出が規制　いや禁止されれば何も出来ない。

窓からこうして憧れの人の創造術が見ただけで運が良いと思っべきだった。実際、他の生徒達はそう思っているだろう。

しかし、少女は、気付いてしまった。

少し、彼女の話しよう。

彼女は昔から誰とでも仲良くなれる少女だった。しっかりした性格で誰とも分け隔て無く接していた事もあるかもしれないが、彼女が気遣いの上手い少女だという要因もあっただろう。

基本的に、優しかったのだ、彼女は。誰にでも受け入れられる優しさを持っていた。

それは自分の良い所だと少女も自負していた。しかし、彼女は周りの人を気遣い過ぎてしまう事で自分が疲れてしまう事が間々(ま

ま) あった。それは、マイナスに感じていた。

少女の気遣いはお節介とかありがた迷惑まではいかなくて、周りから見れば十分「優しい」の範囲だったが、気遣いの上手い彼女は、人の顔色を窺ってしまふ事が多かった。

だから彼女は、観察眼がある　　というのだろうか、雰囲気というものに鋭かった。

それは、彼女の創造術の分野にも影響を与えた。

北側戦闘区域の戦場に広がる炎の壁。

圧倒的で美しく、何より目が吸い込まれるような迫力のある「創造物」。

似ている。いや、似ているどころか、一致する。

彼の「創造物」と、戦場の「創造物」の、雰囲気が。

「まさか……NLFのエース、ブラッディ様は……」

どうしようどうしようどうしよう。

辿り着いてしまったかもしれない。確証なんて何一つ無いけれど。

「彼」の、正体に。

彼女、ではなく、彼。

そういえば「彼」は、今日の夕食の時間、寮食堂に来なかった。

クラスメイトの男の子は、「腹壊したらしい」なんて言っていたけれど。

どうしよう。

「もし、私の推測が合っていたとしたら……私は、彼女の応援、出来なくなるかもしれない」

ゆっくりと窓の鍵を外す。

開いた窓から、冬の冷たい空気が雪崩れ込んできた。

「第一章 創造祭編・第一部「編入生」 終結」

第10話 一瞬戦争（後書き）

第一章の第一部、終了しました。

次回からは第二部「モットリアム猶予期間」が創始します。

感想・ご指摘・アドバイスを、良ければ下さい！

第11話 戦争の後（前書き）

前回に言い忘れたのですが、戦闘時の理論とか理屈とかそういう類のものは全て適当です（ぶつちやけた）。科学的根拠などは一切ありませんので、理論的に可笑しい所は多々あると思います。その時はどうぞ、ご指摘下さい。出来る範囲で修正致します。

では、今回から第一章の第二部「モットリアム猶予期間」が創始します。

第11話 戦争の後

「第一章 創造祭編・第二部「モラトリアム猶予期間」 創始」

レイズクリエイター創造術師育成学院の近くにある創造術師協会支部クリエイターきょうかいの事務員達は慌てていた。

彼らは創造術師ではない。事務の仕事を創造術師に任せる事が出来る程、創造術師は多くない。

広いオフィスの中はデスクが所狭しに並べられ、何人もの事務員コンピュータが一般人には秘匿されている科学技術の結晶である事務機械の画面を凝視し、キーボードを指で弾いていた。

創造術師協会は、国境を越えて全ての戦闘区域を統括する国際組織だ。その支部は、戦闘区域のある街　つまり、世界全ての街にある。

だが、数ある支部の中でも、レイズ創造術師協会支部は規模も人員も大きく多かった。

この支部にいる人々が慌てている理由は、NLFのエースの正体を掴む事に失敗した上、そのエースが炎の広域創造ワイドなどという大技をかましてくれたからだだった。

炎が燃えれば、二酸化炭素が出る。十歳の子供も知っているような化学反応だ。

勿論、NLFエースの創造術「炎の広域創造」でもそれは同じ訳で。

二酸化炭素が環境を壊すのも、誰もが知っている事。

あれだけ炎が立ち上ったのだ。一体、どのくらい二酸化炭素が排出されてしまったのか、事務員達はそれを考えるだけで頭が痛くなっていた。それでなくとも、NLFエース「ブラッディ」に関する情報といえば炎の広域創造を使ったというくらいで、他には一切分かった事がない。顔も性別も分からず、身元確認が全く出来なかった。そんな状況で環境を破壊したとなれば、創造術師協会の上層部本部にいる幹部達に睨まれてしまう。

炎の広域創造で環境を破壊した張本人はNLFエースでも、とばつちりを喰らうのはリレイズ支部だ。創造術師協会は、世界の守護神たるNLFには大きな顔が出来ないから。

その為にオフィスは沈鬱な空気に包まれていたのだが
一人の事務員が、デスクの上の事務機械コンピュータの画面を見ながら突如叫んだ。

その声には、困惑が色濃く混ざっていた。

「大気検査員からの報告、届きました！ ……リレイズの街・北側戦闘区域、《墮天使だてんし》迎撃区域の二酸化炭素量、せ、正常値、だそうです！」

「ただいま、っと」

靴を脱いで窓から男子寮の自室に入ったレゼルは、身体能力強化の創造術を解除した。

彼の髪と瞳が元の色 灰色と漆黒に戻る。

北側戦闘区域の戦場から疾走してきたが、創造術を使っていた為息が切れているという事はない。ただ、冬の凍える空気の中を走ってきたのでかなり寒い という事はなく、『能力』創造と並行し

て身体の周囲に暖気を創造していたし、漆黒の戦闘服は防弾・防刃に加えて防寒の性能も高く備えているので、寒いなんて感覚は一切合切無かった。

「……？」

緋色の髪の少女から返事　お帰りなさい、と彼女は言ってくれる筈だ　が無いのが気になったが、よく見れば脱衣場の証明が付いているのが扉の曇り硝子を通して確認出来た。

「風呂入ってるのか」

ポツリ、と独り言を漏らし、レゼルは自室の玄関に向かった。手に持った靴を戻す為だ。

寮に馬鹿正直に表の大玄関から入れれば外出していた事がバレてしまう。行きに窓から飛び降りたように、帰りは四階の窓に飛び上がってきた訳だ。我ながら良い手際だったと思う。

玄関に靴を置いて、リビングに戻る。

その空間に誰かの気配がある事を、レゼルは既に察していた。風呂から上がったのだろう、きっとセレンだ。

「セレン、ただい……」

「レゼル！　お帰りなさい、早かったですね」

弾んだ声を掛けてくる少女がぱたぱたと駆け寄ってきた。

しかし、レゼルは言葉を失ってしまっていた。

「大丈夫だとは思いますが、怪我は無いですよ？　疲れてはいませんか？　私、夕食を作ったので食べましょう」

彼女の今の姿は、短めのバスタオルを身体の前面に当てているだけで、巻いてすらいなかったのだ。

小柄な身体は折れそうに細く、女の子らしいくびれの曲線がはつきりと見て取れる。桜色に上気した透き通るような白い肌と緋い髪あかから滴る雫、それに濡れた真紅の瞳は、レゼルに艶かしさを感じさせるに十分だった。

「な、何して……いや、早く服を着ろ！」

さしものレゼルも、ポーカーフェイスではいられなかった。

「いえ、大丈夫です。そんな事よりレゼル、疲れてはいませんか？」
上目遣いに見詰めながら、セレンは戦闘服を脱ぐのを手伝おうと襟元に手を掛けてくる。

そうなると必然的に、バスタオルは片手だけで押さえられるという危ない状況になり。

「だ、大丈夫だ！ 自分で脱げるから、セレンは早く服を着てくれ」
セレンの手をやりわりと襟元から外し、早口で捲し立てる。

少しだけ捲かれたバスタオルの隙間から、ちらっと小さな膨らみが視界に入ってしまったって目を逸らす。

「そうですか。では、お風呂場に戻りますね。リンスを持っていくのを忘れただけなので」

セレンは何処か寂しそうな口調でそう言つと、リンスを棚から取り出して風呂場に姿を消した。

そういえば昨日は編入試験や《融合結晶》のルチアからの依頼の事もあって風呂には入れず、今日の朝にシャワーで済ましたのだった。つまり今が風呂場を使うのが初めてで、棚に入っている備え付けのシャンプーやリンスを持っていくのを忘れれば風呂場に無いのは当たり前だ。

パタン、と脱衣場の扉が閉まる音がして、レゼルはやっと天井に向けていた視線を前に向き直した。

「……同室つていうのはちよつと、問題だったかもしれないな」

漆黒の戦闘服を脱いで風呂に入り、寝間着のスウェットに着替えたレゼルは、セレンの作ってくれた夕食を次々と口に運んでいた。

因みに、創造術で食べ物を作って食べる、という行為には意味がない。創造術の『物』の創造は融合体を体外に引っ張り出す時に創造物を構成する原子を創造するが、根本にあるのは融合体。つまり、エナジーと星光だ。生命力たるエナジーを消費して創造物の食

べ物を食べるのは、味はあるが栄養が無いのと等しい。それを食べた後、自分の体内の栄養分はエナジーを使った分とプラスマイナス0（ゼロ）で変わらないのだから。

「美味しい。……美味しい、んだけど……」

濃厚な味わいのマカロニグラタンをもぐもぐと咀嚼してから呟いて、テーブルの上をまじまじと見詰める。

そこには、キラキラと照明の光に反射して輝くディナー達が乗っていた。

今レゼルが食べているグラタンは適度に茶色い焦げ目があり、ホワイトソースは多分かなり手がこんでいるだろう。何と云うか、味が深いと感じさせるのだ。

そして極めつけは、カリカリに焼かれたパンだった。驚く事に、それはセレンの手作りだ。午後、レゼルが仮眠を取っている間に生地を練ったらしいのだが、彼女は本当に料理が上手いと感じさせるのは生地からパンを作った事ではなかった。

いや、勿論それもあるのだが、レゼルはセレンが何でも作れる事を知っている。彼が改めてセレンの料理技術に脱帽したのは、パンの種類が沢山あったからだ。

人参にんじんや薩摩芋さつまいも、トマトなどの野菜ペーストを練り込んだパンに、どうしたことが砂糖まぶを塗したラスクやココアパウダー、チョコチップを練り込んだものまであったのだ。

パン以外にもサラダやスープなど、今日は何時にも増して料理に気合いが入っている。

「……セレン、どうしたんだ？ これ作るの、大変だっただろう」
レゼルはグラタンのマカロニをフォークで突き刺してから手を止め、そう言った。

セレンが料理を作っている姿は微笑ましいし、出来上がった料理を自分に振る舞ってくれるのは嬉しい。だが、彼女に無理をさせてしまいたくはなかった。

「対抗したかったです」

「え？」

隣に座ってスプーンでスープを掬いながら言う寝間着姿のセレンに、レゼルは何の事か分からずきよとんと首を傾げた。

「学院の食堂に、対抗したかったのです。寮食堂は和・洋・中と、かなりの種類の料理を扱ってましたし、私からしても美味しかったですから、悔しかったのです。自分の料理が負けている、とは思いませんが、レゼルが『美味しい』と頻りに言っていたので、その…」

そこで彼女の言葉はぶつんと途切れた。彼女が口籠もったりするのは珍しい。

セレンは掬ったコンソメスープで口を湿らせてから、続けた。

「しかも、寮食堂は本校舎の横にあるもう一つの食堂に味が劣る、とエネデイス先生が仰おっしゃっていました。負けてはいられません」

闘志の籠る声音を聞いて、レゼルは苦笑しながらマカロニを口に運んだ。

「……成程、な。でも、無理はするなよ。セレンの料理が一番美味しいのは俺が知ってるから」

「……はい」

相変わらず無表情の彼女は、だが声は少しだけ嬉しそうに弾ませて、頷いた。

それからは二人とも食事に集中し、パン以外は粗方食べ終わった所でセレンがソファを立った。

パンは保存が効くので様々な色のそれをバケツに詰めながら、レゼルは彼女を見上げた。

「どうした？」

レゼルは座っているの、小柄とはいえセレンも彼を見下ろす形になる。

「キッチンにデザートがあります。アップルパイとチーズケーキ、どちらがよろしいですか？」

「……えっと、じゃあチーズケーキで」

「分かりました」

まだ料理あつたのか、と思いながら、レゼルはキッチンに消える緋色の髪を見送った。

テーブルの上を綺麗にして　といつても、空っぽの皿を端に寄せただけだが　少しすると、セレンがアップルパイとチーズケーキを運んできた。

それをテーブルに置き、セレンはストーンとソファに座った。勿論、レゼルの隣だ。

「どうぞ、レゼル」

チーズケーキを前にしたレゼルに、彼女はフォークを差し出した。レゼルは礼を言つて受け取りながら、ケーキを呆気に取られたように眺める。

滑らかなチーズケーキの表面は、既に芸術の域に達しているだろうあめざいく。餡細工で飾られていた。食べるのが勿体無いと感じる。

「どうしたのですか？」

「いや……やっぱり、セレンの料理は一番だつて思つただけだ」

もう彼女の料理は、そこらの店を超えている。一流レストランで出てきても誰も文句は言わないだろう。

それをレゼルが殆ど独り占めしているのは良いのだろうか。店を出したら絶対成功すると確信出来るのだが

「店、か。それも良いかもな」

ふと、「セレンが人間になれたら」、そうして生きていくのも良い、とレゼルは思った。

「何か、言いましたか？」

「いや、何でもない」

セレンには聞こえなかつたようだったので、レゼルはかぶりを振った。

チーズケーキの餡細工にフォークを当てて軽く力を加えると、パリン、と高い音を立てて砕けた。

「……やっぱ、勿体無いなあ」

そう呟きながらも、砕けて一口サイズになった餡とケーキを一緒に食べる。味は言わずもがな、甘い香りさえ美味しいと思えた。

「そういえば、レゼル」

「何だ？」

「レゼルが戦闘区域に向かった後、ハルキが夕食を誘いに来ました。

『レゼルはお腹を壊した』と言って、丁重にお断りしましたが」

アップルパイをフォークで丁寧に一口サイズに切り分けて、セレンが言う。

「……ちよつと、無理がないか？」

腹を壊した、だなんてベタ過ぎだろう。

「編入初日だったから、と言ったらハルキは納得してくれました」

「ああ、成程」

レゼルは感心したように頷いて、チーズケーキを欠けさせていく。アップルパイも食べてみたかったが、流石にそれは食べ過ぎだ。

レゼルはチーズケーキを完全消費すると、皿を洗う為にソファを立った。

唐突に肌寒さを感じてレゼルは瞼を押し開いた。

男子寮の自室。ベットはセレンが使っているのでソファの上。

部屋の空調はタイマーで停止時間を設定してから寝ているので、時間的に朝の今はもう止まっている。

レゼルは上半身を起こすと、乱れていた毛布を身体に掛け直してテーブルの上の操作端末リモコンを手に取った。今日の朝は昨日とはかなり違う厳しい寒さだった。ピツ、という軽い音と共に空調が再起動する。

ちら、と横に目を向ける。今の音で起こしてしまったのだろうか、一人用のベットの上でセレンが目擦っていた。

「悪い、セレン。起こしてしまったか」

「いえ、もう起きようと思っていたので……」

レゼルが寝起きとは思えないはつきりした声音で謝ると、「こちらは少々寝惚けたセレンが身体を起こしながら言う。

彼女は、ふああ、と可愛らしい欠伸をして、それからぶるると小さく身を震わせた。

「何だか今日は寒いですね」

寒さで眠気が多少なりとも覚めたのか、セレンの声は段々とはつきりしてくる。

「そうだな。……もしかしたら」

呟いて、掛け直した毛布から抜け出た。二度寝しようかと思っただが、セレンが起きようとしていた時間ならばそんな事をしていい時間ではないという事だ。レゼルは部屋の照明を点け、ベランダに出る窓に近付いた。

「レゼル？」

「昨日の夜、少し雲が出ていたからな」

ベットの上から不思議そうに問うてくる少女の声に、レゼルは短く答えてカーテンを開けた。シャツ、という小気味の良い音が部屋に響く。

相変わらず暗い外だが、今日はそれが輪をかけて暗く、夜空の星は全く見えなかった。何故なら、空全体を灰色の厚い雲が覆っていたからだ。

そして、その雲から、白い花卉はなびらのようなものが降ってきていた。

雪だ。ぽつぽつと灯り始めた街の民家の明かりが、白いそれを淡く照らしている。

「雪……」

緋色の髪と瞳の少女も相変わらず無表情だが、囁くように言う彼女の声はレゼルにはちよつと無邪気っぽく聞こえた。

「だから寒いんだな。……屋根に積もってる。結構長い時間降ってるみたいだ」

創造学院の外、街の風景を硝子越しに見ながら呟く。

一年生である彼のこの部屋は四階にある。街の民家よりは明らかに高さが違い、その屋根を見下ろす事が出来る。

民家の屋根には、真っ白な雪が目測で二十センチ程も積もっているようだった。学院の敷地は広大で、普通なら学院外の積雪量など分かるものではないが、創造術を使わなくても優れているレゼルの視力は、街の風景を正確に捉えていた。

「……静か、ですね」

隣に歩み寄ってきたセレンが、窓の外を見ながら言った。生地の薄い寝間着では寒いのだろう、右手が左の二の腕を掴んでいた。

「朝だしな。冬だから、鳥の鳴き声もないし。雪が降っていれば、尚更だろう」

「そうですね。今更ですが、周りの環境が本当に変わりました」

「学院に編入したっていう実感が俺にはまだ無いよ。それに比べれば、今更でもないさ」

小さく笑って、レゼルは見下ろしていた雪景色から目を逸らした。「セレン、寒いだろ。早く着替えて来い」

「はい。では、ついでに洗濯物を干してしましましょう」

コクリと頷き、セレンは洗濯機も置いてある脱衣場に小走りに入っていた。

レゼルも、脱衣場にセレンがいる間に着替えてしまおうと、部屋に備え付けのクローゼットから創造学院の制服を取り出した。

それをソファの上に無造作に投げて、彼は寝間着のスウェットに手を掛け、一気に脱ぐ。

と、その時。

部屋の扉の前で、誰かが立ち止まった気配がした。

恐らくは晴牙だろう、と思ったし、別に彼じゃなくても男だろうからレゼルは見られても大した事ではない。裸なのは上半身だけなのだし。

だが、今はセレンも着替えているのだという事を思い出して、レゼルは慌てて廊下に呼び掛けた。

「今、着替えてる！ ちょっと待ってくれ」

「え？ あ、そうか、分かった」

扉の向こうから聞こえてきたのは晴牙の声だ。

またか、と思いつつ、何かあったのか？ ともレゼルは思った。

彼が着替えを終え、セレンが制服姿で洗濯物の詰まった籠かごを抱えて脱衣場から出てきたのを合図に、レゼルは晴牙に再び呼び掛けた。
「入って良いぞ、ハルキ」

ガシュツ、と気の抜けるような音が鳴って扉がスライドする。

昨日から疑問に覚えていたが、扉のロックは彼に作用しない。副代表権限という所だろうが、ロックのエナジー感知システムを誤認させている事がバレないか、ちょっと不安である。今の所、晴牙に気付かれた様子は全くないが。

「おつす、レゼル。腹、大丈夫か？」

「おはよう。……ああ、もう大丈夫だ。悪いな、心配掛けて」

腹、大丈夫か？ のくだりで訝しげな顔をしてしまいそうになったが、何とか昨夜のセレンの話の思い出して、ポーカーフェイスを取り繕った。ちょっと、反応が遅れてしまったが。

「おはようございます」

それを晴牙が不思議がる前にセレンが彼に挨拶をして意識を逸らす。ナイスな援護射撃だ。

「おつす、セレンちゃん」

晴牙はセレンの抱える籠を見て、

「あ、すまん。朝だもんな、忙しいか」

「いえ。これを室内に干すだけです。朝食は昨日の残りがありますし」

ふるふる、とセレンが首を横に振る。

昨日の残り、とは、夕食に食べた色とりどりのパンの事だ。

「そっか。夕食はセレンちゃんの手作りだったんだもんな、昨日」

「ああ。悪いな、食堂に誘ってくれたみたいなのに」

「いや、気にする事ねえよ。……だけど、今日の朝食は寮食堂で食

つてくれないか？」

頼む、と付け加え、手を合わせて頭を下げ、何故か懇願する晴牙。レゼルはただ、ぼかんとしてしまった。

ちら、と後ろを振り返ってみれば、セレンは部屋の中のハンガーに昨日着用した制服を引っ掛けて掛けている。その中に下着は無い。それは人目に付かない場所。脱衣場にでも干したのだろう。漆黒の戦闘服は、学院の寮などで大っぴらに晒せる訳がなく、脱衣場に洗濯機と並んである乾燥機を使う。

何故他の服を乾燥機を使って乾かさないかと言えば、それは学院がなるべく制服は干して乾かす事を推奨しているからだ。服に星の光を浴びせておくと、創造術を使う際に星の光を取り込み易くなる事は、データで証明されている。

乾燥機は下着を乾かす為という用途で用意されているが、レゼルとセレンは下着を乾燥機で乾かさない代わりに戦闘服を乾燥機で乾かす事にしたのだ。

閑話休題。

レゼルはこちらの話に無関心なセレンから目を外して、未だ頭を下げている晴牙に向き直った。

「別に良いけど、理由は？」

「良いのか？ マジで、本当か？」

「本だから、俺が寮食堂で朝食を摂らなきゃならない理由を教えてください」

ガバツ、と顔を上げて詰め寄ってくる晴牙に、レゼルは後退りながらそう対応した。

だが、晴牙は何とも言えない困ったような表情をして、それはその、と口籠もった。

「何だ？ 言えない事か」

「い、いや、そうではないんだけど。……昨日、ミーファがさ」

「ミーファ？」

思いがけず突然出てきた名前に、レゼルは訳が分からず問い返し

た。

「ああ。ミーファが、今日はお前を絶対食堂に連れて来いって言うてて」

「何故に？ 何かあるのか？」

本気で分かっているレゼルの発言を聞いて、晴牙が溜め息を吐いた。

後ろからも、小さく息を吐く音が聞こえた。

「ともかく、そういう事だから、来い」

有無を言わさない口調で晴牙が言うので、レゼルは頷くしかなかった。といつても、断る理由なんてなかったのだが。

ミーファが何故そんな事を言ったのか気になったが、この後、何故かセレンが少し不機嫌になった事の方が、レゼルは気になった。

第11話 戦争の後（後書き）

感想・ご指摘、ありましたら書いて下さると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7092v/>

星影月華の創造術

2011年10月10日03時20分発行